福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

元岡・桑原遺跡群18

Motooka Kuwabara

－第20次調査の報告４・第36次調査の報告２・第38次調査・第45次調査の報告－

２０１１

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

元岡・桑原遺跡群18

Motooka　Kuwabara

－第20次調査の報告４・第36次調査の報告２・第38次調査・第45次調査の報告－

２０１１

福岡市教育委員会

巻頭図版 1

↓水崎山

（1）38 次・45 次調査地点遠景（西から）↑45 次調査地点

巻頭図版 2

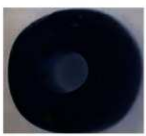
（2）45 次調査桑原古墳群 A 群 10 号墳石室床面 (北から)

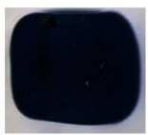
104

104

104

108


105


105

106

106

116

115

115

（3）45 次調査桑原古墳群 A 群 10 号墳出土玉・耳環

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・春日市原町地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原・糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、すでに平成18年度には工学部が移転したところです。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から当教育委員会が取り組んでおり、すでに土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社を委託者とした発掘調査報告書が13冊、土地の再取得後に九州大学を委託者とする報告書が2冊発行されております。

本書は福岡市土地開発公社を委託者する第14冊目の調査報告書で、以前報告した第20次・第36次調査の追加報告と第38・45次調査の報告になります。いずれも地域の歴史を語る上で欠かすことが出来ない成果と考えております。

本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査を委託された福岡市土地開発公社、調査に協力していただいた九州大学をはじめとする関係各機関と地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成23年3月18日
福岡市教育委員会
教育長　山田 裕嗣

例　言

1　本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が福岡市土地開発公社の委託を受けて福岡市教育委員会が実施した元岡・桑原遺跡群第 20・36・38・45 次調査の報告書である。このうち第 20 次調査は、福岡市埋蔵文化財調査報告第 962 集「元岡・桑原遺跡群 8」・同第 1013 集「元岡・桑原遺跡群 13」および同第 1063 集「元岡・桑原遺跡群 14」に、第 36 次調査は、同第 1011 集「元岡・桑原遺跡群 11」で既報であり、本書の第 20 次調査は旧石器～弥生時代遺物編、第 36 次調査は近世・近代墓編である。

2　本書は福岡市土地開発公社と受託契約を結んで実施した調査の第 14 冊目の報告であるが、他に九州大学受託分が 2 冊ある。

3　本書に掲載した遺構図の作成者は次のとおりである。

第 36 次調査：屋山洋（調査担当者）・土井良伸・水崎るり・岡田裕之

第 38 次調査：濱石哲也・菅波正人・池田祐司 (調査担当者)・土井良・水崎

第 45 次調査：池田（調査担当者）・土井良・水崎

4　本書に掲載した遺物の実測図の作成者は次のとおりである。

第 20 次調査：米倉・大庭友子・国際文化財研究所・九州文化財研究所

第 36 次調査：屋山・濱石正子・岡田裕之

第 38 次調査：池田・大庭

第 45 次調査：池田・大庭・西澤千絵里

5　本書に掲載した図の整図者は次のとおりである。

第 20 次調査：米倉・大庭

第 36 次調査：屋山・熊谷幸重

第 38 次調査：池田・大庭

第 45 次調査：池田・大庭

6　本書に掲載した写真の撮影者は次のとおりである。

第 20 次調査：米倉

第 36 次調査：屋山

第 38 次調査：濱石・菅波・池田

第 45 次調査：池田・西澤

7　図番号・図版番号等は各章ごとの通し番号とし、「Ⅱ－1」「Ⅲ－1」とつけた。

8　掲載した遺物の番号は、各調査ごとの通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。

9　本書の編集は屋山・池田の助言を得て米倉が行った。

10　本書の執筆は第 20 次調査を米倉、第 36 次調査を屋山、第 38・45 次調査を池田が行った。

11　本調査で出土した遺物および調査の記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、活用される。

12　第 45 次調査の出土鉄製品・耳環・玉類の保存処理・分析・実測・報告については埋蔵文化財センターの西澤が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の経緯と経過…… 7
Ⅱ　元岡・桑原遺跡群の位置と環境…… 9
Ⅲ　第 20 次調査の報告－４－ …… 12
　1　第 20 次調査の立地と概要 …… 12
　2　出土遺物…… 15
　（旧石器・縄文時代初頭の石器・石鏃・剥片・石錐・石核・石斧・石斧未製品
　・磨石・凹石・敲石類・石錘・砥石・縄文土器・弥生土器・土錘・金属製品）
　3　まとめ…… 51
Ⅳ　第 36 次調査の報告－２－
　Ⅰ　調査の記録…… 69
　　立地と環境…… 69
　　各調査区の概要…… 69
　Ⅱ　調査の報告…… 70
　　1　A区の調査…… 70
　　2　B区の調査……107
　　3　E区の調査……111
　　4　小結……119
Ⅴ　第 38 次調査の報告
　1　調査の概要……137
　2　1区の調査……139
　3　2区の調査……141
　4　3区の調査……142
　5　4区の調査……143
Ⅵ　第 45 次調査の報告
　1　調査の概要……149
　2　9号墳 ……150
　3　10 号墳 ……155
　4　11 号墳 ……172
　5　溝……175
　6　おわりに……175

挿　図　目　次

Ⅱ　元岡・桑原遺跡群の位置と環境

1　元岡・桑原遺跡群位置図 …… 8
2　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 ……10

Ⅲ　第 20 次調査の報告－ 4 －

1　第 20 次調査地点位置図 ……13
2　第 20 次調査地点遺構配置図 ……14
3　旧石器時代の石器 ……16
4　ポイント 1 ……17
5　ポイント 2 ……18
6　石鏃 1 ……19
7　石鏃 2 ……20
8　石鏃 3 ……21
9　石鏃 4 ……22
10　石鏃 5 ……23
11　石鏃 6 ・剥片 1 ……24
12　剥片 2 ・つまみ形石器 ……25
13　剥片 3 ……26
14　石錐 ……27
15　石核 1 ……28
16　石核 2 ……29
17　石核 3 ……30
18　スクレイパー 1 ……32
19　スクレイパー 2 ……33
20　スクレイパー 3 ・石匙 ……34
21　石斧・石斧未製品 1 ……35
22　石斧・石斧未製品 2 ……36
23　石斧・石斧未製品 3 ……37
24　石斧・石斧未製品 4 ……38
25　石斧・石斧未製品 5 ……39
26　磨石・凹石・敲石類 1 ……41
27　磨石・凹石・敲石類 2 ……42
28　石錘 ……43
29　石庖丁・紡錘車・有孔石製品 ……44
30　砥石 1 ……45
31　砥石 2 ……46
32　縄文土器 ……48
33　弥生土器 ……49
34　土錘・金属製品 ……50

Ⅳ　第 36 次調査の報告－ 2 －

1　調査区位置図 …… 67
2　36 次調査区周辺図 …… 68
3　36 次調査区現況測量図 …… 68
4　A 区全体図 ……折り込み 1 表
5　A 区遺構番号図 ……折り込み 1 裏
6　A 区経塚周溝範囲図 …… 71
7　A 区古墳時代～古代出土遺物 …… 72
8　A 区トレンチ土層図 1 …… 73
9　A 区トレンチ土層図 2 …… 74
10　A 区トレンチ土層図 3 …… 75
11　A 区トレンチ土層図 4 …… 76
12　A 141 ・A 160 実測 …… 78
13　A 165 実測図 …… 79
14　A 233 ・234 実測図 …… 80
15　A 233 人骨出土状況 …… 81
16　A 254 実測図 …… 82
17　A 区土壙墓 1 …… 83
18　A 区土壙墓 2 …… 84
19　A 区土壙墓 3 …… 85
20　A 区近世墓 1 …… 78
21　A 区近世墓 2 …… 88
22　A 区近世墓 3 …… 89
23　A 区近世墓 4 …… 90
24　A 区近世墓 5 …… 91
25　A 区近世墓 6 …… 92
26　A 区近世墓 7 …… 93

27　A区近世墓８ …… 94
28　A区近世墓９ …… 95
29　A区近世墓 10 …… 96
30　A区近世墓 11 …… 97
31　A区近世墓 12 …… 98
32　A区近世墓 13 …… 99
33　A区石仏出土状況 …… 100
34　A区近世墓出土遺物１ …… 101
35　A区近世墓出土遺物２ …… 102
36　A区近世墓出土遺物３ …… 103
37　A区近世墓出土遺物４ …… 104
38　A区近世墓出土遺物５ …… 105
39　B区近代墓全体図 …… 106
40　B 201 実測図 …… 108
41　B 214 実測図 …… 109
42　B 202 実測図 …… 110
43　E区 SC001 実測図 …… 112
44　E区全体図 …… 折り込み２
45　E区 SC002 実測図 …… 113
46　E区 SC002 遺物実測図 …… 114
47　E区 SC013 実測図 …… 115
48　E区 SB01・SB03 実測図 …… 116
49　E区 SB02・E区出土遺物実測図 … 117
50　G区出土遺物 …… 119

Ⅴ　第 38 次調査の報告

1　第 38 次調査地点位置図 …… 137
2　第 38 次調査地点全体図 …… 138
3　１区全体図 …… 139
4　１区出土遺物 …… 140
5　２・３・４地点全体図 …… 141
6　溝１ …… 142
7　溝１土層図 …… 142
8　溝２ …… 143
9　溝２土層図 …… 143
10　３・４区土坑 …… 143

Ⅵ　第 45 次調査の報告

1　第 45 次調査地点位置図 …… 149
2　桑原古墳群Ａ群全体図 …… 150
3　第 45 次調査地点南側全体図 …… 151
4　９号墳全体図 …… 152
5　溝土層図 …… 152
6　９号墳石室 …… 153
7　９号墳閉塞石 …… 153
8　９号墳石室俯瞰、堀方 …… 154
9　９号墳出土土器 …… 155
10　10 号墳全体図 …… 156
11　10 号墳周溝土層 …… 156
12　10 号墳石室 …… 157
13　10 号墳石室２ …… 158
14　10 号墳石室俯瞰・堀方 …… 159
15　10 号墳周溝・墓道遺物出土状況 … 160
16　10 号墳石室・墓道出土遺物 …… 162
17　10 号墳出土土器１ …… 163
18　10 号墳出土土器２ …… 164
19　10 号墳出土土器３ …… 166
20　10 号墳出土土器・石器 …… 167
21　10 号墳出土鉄鏃 …… 168
22　10 号墳出土太刀・鑿 …… 170
23　10 号墳出土玉類 …… 171
24　11 号墳全体図 …… 172
25　11 号墳周溝土層 …… 172
26　11 号墳出土土器 …… 173
27　11 号墳出土鉄製品 …… 174
28　10 号墳出土遺物蛍光Ｘ線分析結果 … 176

図 版 目 次

巻頭図版
（1）調査地点遠景 (西から)　（2）45 次調査桑原古墳群Ａ群１０号墳石室床面 (北から)
（3）45 次調査桑原古墳群 10 号墳出土玉・耳環

Ⅲ　第 20 次調査の報告－４－
1　旧石器・ポイント１ …… 57
2　ポイント２ …… 58
3　石鏃１・２ …… 59
4　石鏃５・石銛・剥片 …… 60
5　石核・スクレイパー１ …… 61
6　スクレイパー２・石匙・石斧１ …… 62
7　石斧２ …… 63
8　磨石類・石錘１ …… 64
9　石錘２ …… 65
10　石庖丁・紡錘車・金属異性品他 …… 66

Ⅳ　第 36 次調査の報告－２－
1　１．36 次調査開始前（東から）　２．36 次全景（北から） ……121
2　１．36 次全景（北から）　２．Ａ区全景（北から）122
3　１．経塚古墳全景（北から）　２．経塚古墳調査前葺石露出状況 ……123
　３．頂部配石出土状況　４．墳丘下旧表土　５．Ａ区近世墓墓域（北から）
4　１．Ａ区調査前風景（東から）　２．Ａ区立石出土状況（調査前） ……124
　３．Ａ区表土剥ぎ（南から）　４．Ａ区（西から）　５．Ａ区西側（東から）
　６．Ａ区中央部（北東から）　７．Ａ区東側（北東から）　８．Ａ区西端墓壙群（北から）
5　１．Ａ 010（西から）　２．Ａ 023（西から）　３．Ａ 035（中央石組み）……125
　４．Ａ 038（西から）　５．Ａ 061（西から）　６．Ａ 076（西から）
　７．Ａ 095（西から）　８．Ａ 219・Ａ 220・Ａ 211（手前から）
6　１．Ａ 133（南から）　２．Ａ 135（北から） ……126
　３．Ａ 039・Ａ 040・Ａ 041（西から）　４．Ａ 022（西から）　５．Ａ 111（西から）
　６．Ａ 071（西から）　７．Ａ 277（北東から）　８．Ａ 037（西から）
7　１．宝暦墓石　２．宝暦墓石拡大　３．享和墓石１　４．享和墓石２ ……127
　５．文政８年墓石出土状況　６．寛永７年墓石　７．年代不明墓石　８．昭和墓石
8　１．立石墓遠景　２．立石墓群１（北から）　３．立石墓群２（北から） ……128
　４．立石墓群３　５．Ａ 122（西から）　６．Ａ 168（西から）　７．Ａ 204（東から）
　８．Ａ 212（西から）
9　１．Ａ 215（西から）　２．Ａ 249（西から）　３．Ａ 259（東から）……129
　４．右からＡ 271 ～ 274（南東から）　５．Ａ 128（南から）　６．Ａ 141（北から）
　７．Ａ 160（東から）　８．Ａ 254（北から）
10　１．Ａ 142（東から）　２．Ａ 150(西から)　３．Ａ 162（北東から）……130
　４．Ａ 167（北から）　５．Ａ 193 土層（西から）　６．Ａ 194（南から）
　７．Ａ 195（東から）　８．Ａ 241（北から）

11　1．仏像頭部出土状況　2．火葬骨出土状況　3．火葬骨壺出土状況 ……131
4．薬缶出土状況　5．G区経塚周溝底部ベルト(南から)
12　1．A区トレンチ土層（北から）　2．Cトレンチ(北西から)……132
3．D－1トレンチ土層（北西から）　4．D－3トレンチ土層(北西から)
5．Fトレンチ(北西から)　6．Fトレンチ(南から)　7．Gトレンチ(東から)
8．トレンチ設定状況(北から)
13　1．B区近代墓(西から)　2．B区近代墓(北から)　3．B区近代墓墓標出土状況1　133
4．B区近代墓墓標出土状況2　5．B201 甕棺出土状況(北から)
6．B201 人骨出土状況(北から)　7．B201 石蓋　8．B203 土壙墓(西から)
14　1．B202(南から)　2．B202 数珠出土状況　3．B214 掘方(南東から) ……134
4．B214 人骨出土状況（東から）　5．C区全景(東から)
15　1．D区全景(東から)　2．F区全景(南西から)　3．谷部試掘状況 ……135
4．E区全景(南東から)　5．E区西端部遺構出土状況(南から)
16　1．E区竪穴式住居群(南から)　2．SC001 床面(西から) ……136
3．SC001 掘方(西から)　4．SC002 床面(西から)　5．SC002 掘方（西から）
6．SC002 カマド　7．SC002 カマド基底部(西から)　8．SB01(西から)

V　第38次調査の報告

1　38次調査遠景（北西から） …… 144
2　1区全景（北から）…… 144
3　水崎山・調査地点遠景（北西から）　145
4　1区全景（北東から）…… 145
5　1区2トレンチ溝状部断面（南東から）… 145
6　1区2トレンチ南半（東から）…… 145
7　1区から2区（南西から）…… 145
8　1区5トレンチ（南東から）…… 145
9　1区3トレンチ礫群（南東から）… 145
10　2区溝1頂部（北東から）…… 145
11　2区全景（南から）…… 146
12　2区溝1（東から）…… 146
13　2区溝1（西から）…… 146
14　2区溝1土層（東から）…… 146
15　2区溝1西側斜面（西から）…… 146
16　2区溝1（西から）…… 147
17　2区溝1東側斜面（北東から）…… 147
18　2区溝1東側斜面作業中(南西から)… 147
19　2区溝1東側斜面下部（北東から）　147
20　2区溝1東側斜面土層（南西から）　147
21　3区全景（南から）…… 147
22　3区溝2作業（南から）…… 147
23　3区溝2作業（東から）…… 147
24　3区溝2（西から）…… 148
25　3区土坑1（北から）…… 148
26　4区試掘（南から）…… 148
27　4区全景（南から）…… 148
28　4区北端頂部・土坑2（北から）… 148
29　4区土坑3（南西から）…… 148
30　1区出土遺物1 …… 148
31　1区出土遺物2 …… 148

Ⅵ　第４５次調査の報告

1　元岡・桑原遺跡東半（北から）…… 177
2　桑原古墳群Ａ群 9･10 号墳（北東から）… 177
3　9 号墳全景（南西から）…… 178
4　9 号墳石室全景（南東から）…… 178
5　9 号墳全景（南西から）…… 178
6　玄室右側壁 …… 178
7　玄室左側壁 …… 178
8　奥壁 …… 178
9　羨道部（玄室から）…… 179
10　9 号墳・溝 1（南西から）…… 179
11　9 号墳・溝 1（南西から）…… 179
12　溝 1（北東から）…… 179
13　10 号墳（西から）…… 179
14　10 号墳石室全景（東から）…… 179
15　10 号墳全景（西から）…… 180
16　10 号墳（北から）…… 180
17　10 号墳遺存状況（南から）…… 180
18　天井石遺存状況（東から）…… 180
19　玄室床第 1 面（南から）…… 180
20　玄室床第 2 面（南から）…… 180
21　玄室床第 3 面（南から）…… 181
22　玄室床第 4 面（南から）…… 181
23　羨道・前庭部床第 1 面（南から）… 181
24　羨道・前庭部床第 2 面（南から）… 181
25　奥壁（西から）…… 181
26　玄室右側壁（北から）…… 181
27　玄室左側壁（南から）…… 182
28　前庭部右側壁（南から）…… 182
29　前庭部左側壁（北から）…… 182
30　玄門（玄室から）…… 182
31　玄室床第 3・4 面（西から）…… 182
32　玄室第 4 面（西から）…… 182
33　石室堀方（北東から）…… 183
34　前庭部第 1 面須恵器出土状況（南西から）… 183
35　前庭部鉄器出土状況（北西から）… 183
36　玄室第 4 面遺物出土状況（北から）　183
37　周溝遺物出土状況（西から）…… 183
38　周溝遺物出土状況（北東から）…… 183
39　11 号墳遠景（南東から）…… 184
40　11 号墳全景（東から）…… 184
41　11 号墳全景（南から）…… 184
42　墳丘部礫出土状況（南東から）…… 184
43　石室推定部（北西から）…… 184
44　周溝土層（東から）…… 184
45　9 号墳出土遺物 …… 185
46　10 号墳出土土器 1 …… 186
47　10 号墳出土土器 2 …… 187
48　10 号墳出土土器 3 …… 188
49　10 号墳出土土器 4・石器 …… 189
50　10 号墳出土鉄器 1 …… 190
51　10 号墳出土鉄器 2 …… 191
52　10 号墳出土鉄器 3 …… 192
53　10 号墳出土玉類・耳環 …… 193
54　10･11 号墳出土鉄器顕微鏡写真 … 193
55　11 号墳出土遺物 …… 194

表　目　次

Ⅱ－１　元岡・桑原遺跡群調査一覧……11
Ⅲ－１　第 20 次調査遺物一覧 ……52 ～ 56

Ⅰ　調査の経緯と経過

九州大学統合移転に関する発掘調査は、土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社（以下「公社」）による委託分と、九州大学が再取得を行った後に行った九州大学（以下「大学」）による委託分がある。公社による委託分は平成８年度に本調査が開始されて以来、平成 20 年度に終了した。大学委託分は、平成 15 年度に本調査を開始し、現在も調査中である。

統合移転地内の埋蔵文化財包蔵地は、古墳などを除いて元岡・桑原遺跡群の名称で一括りにし、同遺跡群は 57 次の調査を実施しており（平成 22 年 10 月現在）、福岡市土木局を原因とする調査２件と民間開発１件以外のすべてが統合移転に伴う調査である。

本書に掲載した第 20・36 次の調査データと第 38・45 次調査の調査データ及び調査の組織は次のとおりである。なお第 20 次調査・第 36 次調査の調査組織については既報告分を参照願いたい。

第 20 次調査（調査番号０００１）

調査期間　平成 12 年４月５日～同 15 年５月 23 日　調査面積　２０，１３０㎡

主な遺構と遺物

奈良時代の建物群と池、「大宝元年」銘木簡・墨書土器群・銙帯・越州窯青磁など

古墳時代後期住居約 100 軒　　古墳時代大池・大量の木製品群

旧石器時代から弥生時代の包含層（未掘）

第 36 次調査（調査番号０３４１）

調査期間　平成 15 年９月１日～同 17 年３月 31 日　　調査面積８，０００㎡

主な遺構と遺物

古墳時代中期の大型円墳（三段築成・葺石）埴輪　　古代集落　　中世末～近代の墓

第 38 次（調査番号０３７１）・45 次調査（調査番号０５３５）

調査期間　38 次　平成 16 年３月 8 日～同 17 年 1 月 17 日　　調査面積 1,000㎡

45 次　平成 17 年７月 20 日～同 17 年 11 月 22 日　　調査面積 1,128㎡

調査組織

調査委託　福岡市土地開発公社

調査主体　福岡市教育委員会

調査時　教育長　植木とみ子

大規模事業等担当課長　二宮忠司（前任）力武卓治（後任）

主査　濱石哲也（前任）　米倉秀紀（後任）

調査担当　38 次調査　濱石哲也・菅波正人・池田祐司　　45 次調査　池田祐司

調査庶務　文化財管理課管理係

整理時　教育長　山田裕嗣

埋蔵文化財第２課長　田中壽夫

調査第２係長　菅波正人

調査庶務　埋蔵文化財第１課管理係

●は前方後円墳、■は製鉄関連遺跡

図Ⅱ－1　元岡・桑原遺跡群位置図（1/50,000）

Ⅱ　元岡・桑原遺跡群の位置と環境

1　立地

元岡・桑原遺跡群は玄界灘に突き出た福岡市西側の糸島半島にある。糸島半島は、現在はその全面で九州本島と繋がっているが、繋がっている部分の大半が江戸時代の干拓によるもので、縄文時代海進以降中世までは中央の一部で陸橋状に繋がっており、その東と西側は大きく海が湾入していたと考えられている。東側湾入部（古今津湾）の奥にあたる元岡・桑原遺跡群の北東側と南側に縄文時代中・後期の貝塚（桑原飛櫛貝塚・元岡瓜尾貝塚）があり、陸橋部分には「泊（とまり）」の地名が残っている。元岡・桑原遺跡群は古今津湾の奥部北側に位置している。

糸島半島は花崗岩から成る急峻な山地・丘陵部から成り、広い平野はほとんど存在しない。半島全体に渡って、浸食による狭い谷が複雑に出入りし、わずかに海岸近くに溜まった幅の狭い沖積平野が存在するだけである。元岡・桑原遺跡群の立地している地点も、標高２ｍ～ 120 ｍ前後の等高線が密に入り組み、往時は丘陵部から直接海岸線へ移行する地形であったと考えられる。沖積層の一部は最終氷期（第 42 次調査地点）もあるが、現在残されている沖積層の大半は縄文時代後期以降の海退時以降に形成されたもので、それ以前の遺跡はおおむね丘陵もしくは山際の段丘面にある。

海退後の縄文時代晩期になると低地部に貯蔵穴（第２次）や包含層（第 42 次）などが現れるが、谷部の大半が埋まり平地部が出現するのは古墳時代前半中までかかるところが多く、その時期になると各谷とも細い流路のみが残されていく状況である。これ以降元岡・桑原地区の開発が本格化したと考えられる。第３次調査のように崖面近くにある弥生時代住居に比べ、古墳時代前期後半以降の住居が埋まった谷の狭い平地部に築かれている。

今回報告する第 20・36・54 次調査は古今津湾の北縁すぐ近くに位置し、調査区のすぐ北側には縄文時代中期の貝塚である桑原飛櫛貝塚がある。20 次・54 次調査区は、縄文海退以後に形成されたと思われる狭い谷にたまった沖積地の上に営まれた遺跡で、上記の海岸部近くの平地の立地そのものである。縄文時代後半期から弥生時代の状況は未調査のためよく分からないが、完全に谷が埋まった古墳時代中期以降には 100 軒以上の住居群が検出されている。谷の水は流路（川）として残り、その一部をせき止め池状の遺構（００４）からは古墳時代の木製品・祭祀関係遺物が出土している。遺構の数は少ないものの、遺跡の南端にある第 42 次調査区でも同様の状況が確認されている。第 42 次調査区は古今津湾に面し、谷を埋めた狭い平地で、２本の川から弥生時代後半から古墳時代前半の遺物１万箱と住居・建物などが検出されている。

一方第 36 次調査区は山地から延びる狭い丘陵部の先端部に営まれており、やはり当遺跡の一般的な形成の一つの典型である。第 42 次調査の２本の川に挟まれた小丘陵には７世紀代の方墳が築かれ、このほかにも丘陵の古今津湾側の丘陵先端部に円墳が数基築かれている。20・54 次の土地利用、36 次の土地利用は、ともに限られた土地を有効に利用した立地である。

なお歴史的環境と周囲の遺跡については既報告分、特に元岡・桑原遺跡群３（福岡市報告第 829 集）、遺跡内の時代別の状況については同 15（同報告第 1064 集）が詳しい。

図Ⅱ－2　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図（1/150,000）

表Ⅱ－１　元岡・桑原遺跡群調査一覧表

	遺跡名	原因者等	調査期間	古墳数	調査面積	内容等	遺物量
9602	第１次	確認調査	971201 ～ 981031			試掘のみ	
9656	桑原石ヶ元古墳群	確認調査	961111 ～ 981031	19		円墳	
9657	桑原金屋古墳	確認調査	960820 ～ 961129		500	前方後円墳	
9658	元岡石原古墳	確認調査	960827 ～ 961129		1,280	前方後円墳	3
9656	桑原石ヶ元古墳群	公社	971201 ～ 981031	12	8,154	円墳	
9659	第２次	公社	961111 ～ 970325		3,007	古墳時代～古代溝、土坑、水田	35
9763	第３次	公社	971129 ～ 990222	1	3,500	縄文時代石器炉、弥生時代住居址、円墳	144
9764	第４次	公社	971201 ～ 980331		1,219	古代～中世掘立柱建物・溝	5
9771	元岡古墳群２次	確認調査	971110 ～ 971128		60		3
9811	第５次	公社	980427 ～ 980623		2,500	古代土坑・包含層	1
9812	第６次	公社	980630 ～ 980828		2,800	古墳時代包含層	1
9813	第７次	公社	980506 ～ 990611		7,500	古墳時代～古代住居址・建物、池、製鉄炉	530
9829	第８次（元岡古墳群Ａ群）	公社	980916 ～ 981225	1	300	円墳	2
9851	第９次	公社	981102 ～ 981210		190	弥生時代住居址	12
9854	第 10 次	公社	990106 ～ 990225		1,336	古代～中世包含層	1
9855	第 11 次	公社	990106 ～ 990320		1,650	古墳時代～古代土器、包含層	8
9902	第 12 次	公社	990406 ～ 000328		5,500	古代製鉄炉	326
9903	第 13 次	公社	990412 ～ 000316	3	600	前方後円墳１基、円墳２基	6
9904	第 14 次	公社	990422 ～ 990722		1,200	古代包含層	1
9923	第 15 次	公社	990611 ～ 990928		3,500	古代包含層、中世水田	80
9933	第 16 次	公社	990802 ～ 991110		1,200	古代包含層	1
9934	第 17 次（元岡古墳群Ｂ群）	公社	990910 ～ 991208	2	517	円墳	4
9946	第 18 次	公社	991010 ～ 020215		16,800	古墳時代～古代、住居、建物、池、製鉄炉	1100
9947	第 19 次	公社	991016 ～ 981215		3,000	古代包含層	1
0001	第 20 次	公社	000405 ～ 030523		20,130	古墳時代住居、古代建物、製鉄炉	2050
0002	第 21 次	土木局	000405 ～ 000921	3 基		石ヶ元古墳群円墳１基、桑原古墳群Ａ群１基	6
0033	第 22 次	公社	000410 ～ 001025		4,750	古代掘立柱建物、製鉄関連遺構	10
0019	第 23 次	公社	000601 ～ 010331		8,110	確認調査	1
0034	第 24 次	公社	000821 ～ 030320		5,500	古墳時代住居址、古代製鉄炉	800
0052	第 25 次（桑原古墳群Ａ群）	公社	001124 ～ 011130	7	2,200	円墳	16
0110	第 26 次	公社	010405 ～ 011130	1	5,487	古墳時代住居址、円墳、古代掘立柱建物	1
0153	第 27 次	公社	011201 ～ 020820		4,495	古墳時代住居址	106
0154	第 28 次	公社	020201 ～ 020704		2,200	古代～中世包含層	30
0204	第 29 次（元岡古墳群Ｎ群）	公社	020405 ～ 030930	11	4,000	円墳	10
0240	第 30 次	公社	020801 ～ 020930		2,450	古代包含層	0
0242	第 31 次	九大	030401 ～ 060113		9,000	古代瓦窯・製鉄、古墳時代祭祀関連	1200
0257	第 32 次	九大	030120 ～ 030331		1,700		0
0303	第 33 次	九大	030408 ～ 030519	1	450	桑原鏡山古墳群	2
0310	第 34 次	公社	030401 ～ 030812	3	1,200	元岡古墳群Ｊ群	3
0340	第 35 次	公社	030520 ～ 050112		1,853	石ヶ原古墳	1
0341	第 36 次	公社	030901 ～ 050331	1	3,500	経塚古墳＋中近世墓群	196
0365	第 37 次	公社	031020 ～ 040226	4	461	元岡古墳群Ｏ群	3
0371	第 38 次	公社	040508 ～ 050117		1,000	水路域	1
	第 39 次	民間	040405 ～ 040416		88	包含層	80
0410	第 40 次	九大	040407 ～ 040430		1,000	遺物少量流れ込み	1
0435	第 41 次	九大	040507 ～ 041130		900	製鉄＋包含層	30
	第 41 次 B	九大	060202 ～ 060217				
0452	第 42 次	九大	041001 ～ 090331		8,000	弥生時代～古墳時代の自然流路	9063
0496	第 43 次	公社	050207 ～ 050308		500	古墳墓葬・その後無断破壊	1
0523	第 44 次	九大	050601 ～ 051020		1,189	古墳～古代集落	60
0535	第 45 次	公社	050720 ～ 051122	3	1,128	桑原古墳群Ａ群	30
	第 46 次	土木局	050808 ～ 051011		403		4
0562	第 47 次（1 号墳）	九大	060105 ～ 060310	1	107	前方後円墳ではなく円墳	1
0563	第 48 次	公社	060110 ～ 060223		447	弥生住居	17
0611	第 49 次	公社	060403 ～ 070322		4,000		55
0709	第 50 次	公社	070401 ～ 070827		811		44
0741	第 51 次	公社	070829 ～ 081003		6,888	古墳時代～古代建物跡	275
0763	第 52 次	九大	080121 ～ 100331		3,000	弥生時代～古墳時代の自然流路	
0768	第 53 次	公社	080215 ～ 080409		770	古代集落	7
0844	第 54 次	公社	081006 ～ 090109		1,872	古代集落	53
	第 55 次	九大	100401 ～			7 世紀代大形円墳	

調査報告書一覧

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報１		福岡市埋蔵文化財調査報告書第 693 集	2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報２		福岡市埋蔵文化財調査報告書第 743 集	2003
元岡・桑原遺跡群１	第２次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 725 集	2002
元岡・桑原遺跡群２	桑原石ヶ元古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744 集	2003
元岡・桑原遺跡群３	第３・４・８・11 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 829 集	2004
元岡・桑原遺跡群４	第 12・15・24 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 860 集	2005
元岡・桑原遺跡群５	第 13・17・25・29・37 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 861 集	2005
元岡・桑原遺跡群６	第 22・27・28・34 次・金屋古墳・石ヶ原古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 909 集	2006
元岡・桑原遺跡群７	第 28 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 910 集	2006
元岡・桑原遺跡群８	第 20 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 962 集	2007
元岡・桑原遺跡群９	第 46 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 963 集	2007
元岡・桑原遺跡群１０	第 23・30・36 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 964 集	2007
元岡・桑原遺跡群１１	第７次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1011 集	2008
元岡・桑原遺跡群１２	第 20 次 -2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1012 集	2008
元岡・桑原遺跡群１３		福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1013 集	2008
元岡・桑原遺跡群１４	第 12・18・20 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1063 集	2009
元岡・桑原遺跡群１５	第 33・40・41・44・47 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1064 集	2009
元岡・桑原遺跡群１６	第 18 次 -2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1102 集	2010
元岡・桑原遺跡群１７	第 31 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1103 集	2010
桑原遺跡群	第１次発掘調査概報	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 432 集	1995
桑原遺跡群	飛櫛貝塚第１次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 480 集	1996

Ⅲ　第 20 次調査の報告－４―

１　第 20 次調査の立地と概要

第 20 次調査の報告は、すでに３冊の報告書を発行しているが、本書では未報告分縄文時代・弥生時代を中心とする石器・土器及び奈良時代遺物の追加資料を報告する。

第 20 次調査は元岡・桑原遺跡群の北側にあり、往事には調査地点の北東側近くまで海が湾入していたものと考えられ、調査地点のすぐ北側の現在の水田部分は、調査区とかなりの段差を持った谷川が流れ、東側の湾入部に注いでいたものと思われる。調査地点は東側と西側の急峻な丘陵に挟まれた谷地形で、谷が埋まった後の古墳時代中期以降に 100 基近い竪穴住居が営まれている。それ以前の縄文時代・弥生時代（古墳時代より下の面）は、未調査のため詳細は不明であるが、調査区北東側に弥生時代の包含層があり、丘陵際の小段丘面もしくは小沖積地上に何らかの遺構がある可能性も考えられる。以下、時代別に簡単にまとめる。

旧石器時代～縄文時代前半期は土器・石器が少量出土している。包含層等の状況はよくわからない。縄文時代後半期は土器の量は少ないものの、阿高系土器や晩期の粗製土器、剥片鏃・つまみ形石器などの石器類などが出土している。旧石器時代～縄文時代遺物は 11 区より北側での出土が多い。この地点の東側丘陵の第 27 次調査で旧石器時代遺物が出土しており、20 次調査東側の丘陵に当該期の遺跡群があるものと思われる。また 20 次調査のやや西側の第２次調査では縄文時代晩期の貯蔵穴が検出され、当調査区も未掘の 11 区以北の沖積地部分に同様の遺構群の可能性がある。

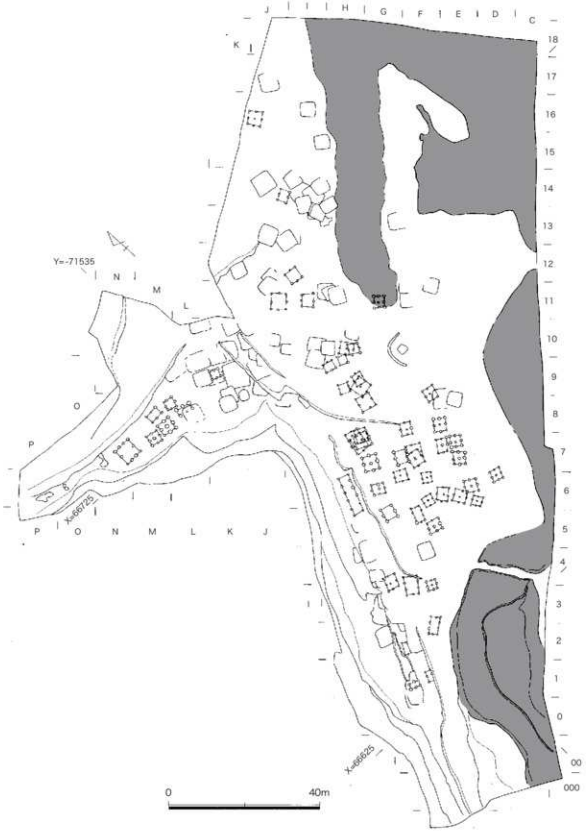
弥生時代は、調査区北東側の第 54 次調査近くで包含層が検出された。包含層は最上面の一部しか掘っていないが、特に玄武岩製石斧未製品と多くの剥片類が出土しており、当地で石斧製作を行っていることが判明した。出土土器はおおむね弥生時代中期中頃以降で、石斧生産の時期よりもやや新しい。弥生時代前期は不在の可能性もあるが、縄文時代晩期以降ほぼ継続した居住が想定できる。

古墳時代には、竪穴住居が 70 軒以上検出されている。５世紀以降、一部８世紀代を含むが、その多くが６・７世紀のものである。一部奈良時代の整地層以下を掘っていない部分もあるため、総件数はさらに増えるものと思われる。４世紀後半～５世紀には谷を堰き止めて築造した大きな池状遺構ＳＸ０４４があり、池が存続した７世紀までの間に大量の土器・祭祀遺物群が出土した。調査区北端では６世紀後半代の貯木遺構があり、柱材・建築材などが出土している。

７世紀末から８世紀代は極めて重要な遺構・遺物が出土している。谷を堰き止めて作った池状遺構ＳＸ００１と 30 棟あまりの建物群が築かれている。池状遺構は長さ 35 m、幅 20 mで、築堤で堰き止め、築堤中央部に木材を埋め込んだ排水施設を備えている。池状遺構の存続時期は紀年銘資料から西暦 700 年前後から８世紀末頃までが考えられる。建物は２×２間の 15㎡未満の小型の倉庫が多く、一部縦長の建物などが見られる。池状遺構などから木簡が多く発見されている。その中には「壬申年韓鐵□□」（692 年か）を最古とし、「大寶元年」「延暦四年」の紀年銘木簡、「嶋郡赤敷里」「登志郷」「常石田」などの地名、「「難波部」「額田部」「久米部」「建部」「中臣部」「乙猪」「嶋足」などの人名、「嶋里」「里長」などの郡符木簡、さらには祭祀に関わるものや役職名など多種多彩な木簡・墨書土器が出土している。また多くの越州窯磁器をはじめとする中国製陶磁器群に新羅産緑釉、６点の帯金具など、官衙系の豊富な遺物が出土している。

以上のように、極めて重要な遺構・遺物群が出土しており、古墳時代以下の層を掘削することなく、奈良時代の遺構群をそのまま埋め戻して保存している。

図Ⅲ－1　第20次調査地点位置図（1/3,000）



図Ⅲ－2　第 20 次調査地点遺構配置図（1/1,000）

2　出土遺物

第20次調査からは、石器が浅いコンテナで25箱の他、玄武岩剥片が20箱出土した。前述のとおり、縄文・弥生時代包含層はほとんど未掘のまま埋め戻したため、ここで報告する石器は、古墳時代の大溝０４４や奈良時代の池状遺構００１など後世の遺構から出土したもの、遺構面から出土したものなどで、出土層位等からは所属年代が不明なものが大半である。石器は旧石器時代の石器以降、縄文時代・弥生時代のものを含み、砥石・磨石などは奈良時代のものも含んでいるものと思われる。形状等から所属時期が限定できるものもあるが、大半の石器の時期は明確ではない。

まず時期的に限定できる旧石器時代のものと考えられる石器を取り上げ、その後に器種別に述べていく。

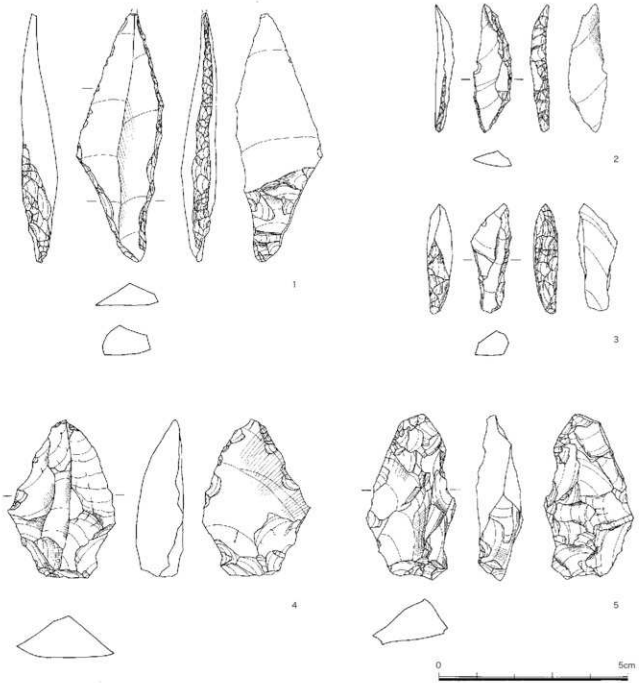
（１）旧石器時代の石器（図Ⅲ－３、図版Ⅲ－１上）

前述のように、保存のため弥生時代以下の包含層を調査していないため、旧石器時代包含層の存否は不明である。20次調査区の南東のやや高い地点にある第27次調査区では旧石器時代遺物が出土しており、少なくとも近隣には良好かつ広範囲な旧石器時代遺跡が存在する。出土した旧石器時代石器と（２）のポイントはいずれも27次に近い地点から出土している。

１～３はナイフ形石器である。１は粒状の黄色味を帯びた黒曜石製で、長さ6.6㎝のやや大型のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、主要剥離面側の下部は基部調整を行い、ブランティングは主要剥離面側から調整を行っている。２は長さ3.4㎝の小型のナイフ形石器で、縞が入った黒色黒曜石製である。基部の調整は縁辺部のみである。３も長さ2.9㎝の小型のナイフ形石器である。小形の割に厚みがある。主要剥離面側から行っているブランティングもやや長めの剥離となっている。縞が入った灰黒色黒曜石製。４は剥片尖頭器である。漆黒黒曜石製で、長さ4.2㎝を測る。基部のみやや調整を行っているが、上半部は大きな調整は見られない。長さの割に幅・厚みがあり、ずんぐりとした形態である。５は角錐状石器で長さ4.4㎝を測る。漆黒黒曜石製。全体に粗い調整で形態も整っておらず、ポイント等の未製品の可能性も考えられる。

（２）ポイント（図Ⅲ－４・５、図版Ⅲ－１）

ポイントは９点出土した。旧石器時代から縄文時代初期のものと考えられる。６は木葉状の形態を成す。長さ8.1㎝を測る。ハリ質安山岩製である。やや太めの細長い押圧剥離で全形を形作っている。基部にやや厚みを残している。７もハリ質安山岩製で、６に近い形態であるが、全体に調整は粗く、中央下部に厚みを残している。長さ6.2㎝を測る。８は先端部のみの破片で、全形はかなり大きくなる。片面は主要剥離面を大きく残している。ハリ質安山岩製。９もハリ質安山岩製で片面には主要剥離面を残している。破片中央部付近は先端部からの剥離によって、段ができている。また基部の一部に自然面を残している。10もハリ質安山岩製。前４者に比べ細身の形態で、全体的にていねいな押圧剥離を施している。なお破片には鉄分が強く付着しており、一部剥離が図化できていない。11は安山岩製である。平面形はポイントの形態を成しているが、主要剥離面側は調整が進んでいるものの、厚さ1.8㎝と厚く、未製品（失敗品）の可能性が高いものと思われる。12はパティナが進んだハリ質安山岩製で、長さ8.6㎝を測る。横長の剥離による調整を主とし、階段状剥離になっている部分が多い。13もパティナが進み白色味を帯びたハリ質安山岩製で、長さ11.8㎝を測る。薄い剥片素材を利用しているが、先端部に厚みが残り、尖っていない。14もハリ質安山岩製であるが、パティナが進んでいない。大形ポイントの基部としたが、全長はかなり長くなり、厚さも厚い（2.7㎝）。

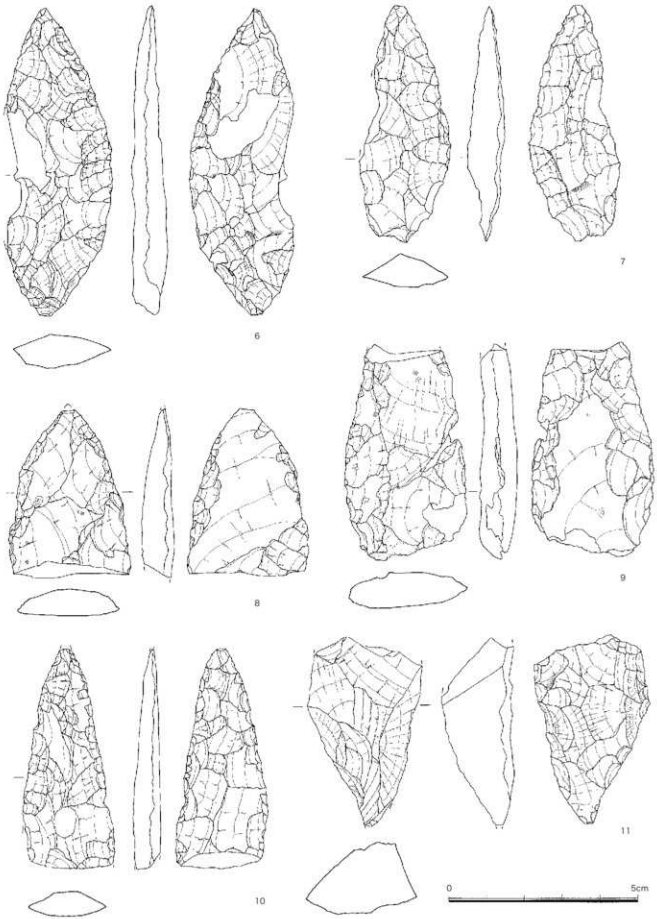


図Ⅲ－３　旧石器時代の石器（1/1）

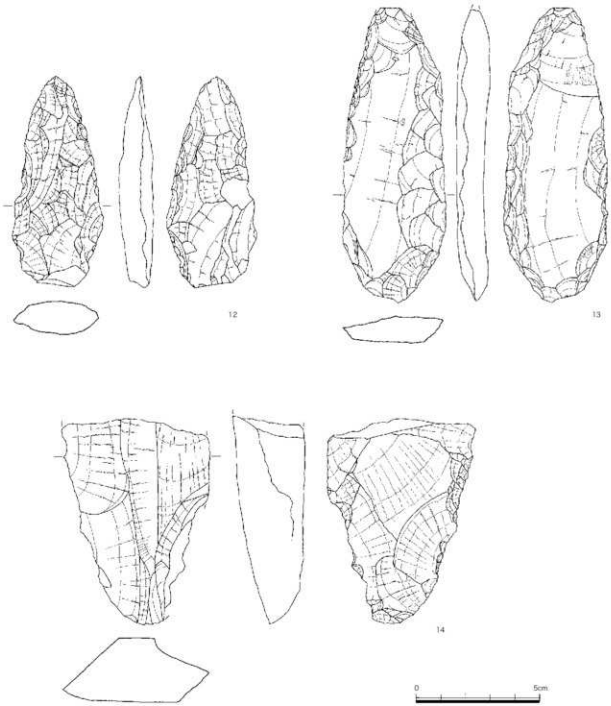
（３）石鏃（図Ⅲ－６～11、図版Ⅲ－２～４）

石鏃・石鋸の可能性のある大型石鏃及び未製品の可能性のある石器あわせて85点を確認し、82点を掲載した。その他に加工を施した剥片で石鏃の未製品の可能性があるものが数点ある。石材は黒曜石が67点、サヌカイトを含む安山岩が14点、石英が1点である。局部磨製石鏃・鍬形鏃や石刃状剥片を使った剥片鏃など時期比定の容易なものもあるが、大半は明確な所属年代が不明である。以下、特徴的なものについて説明する。

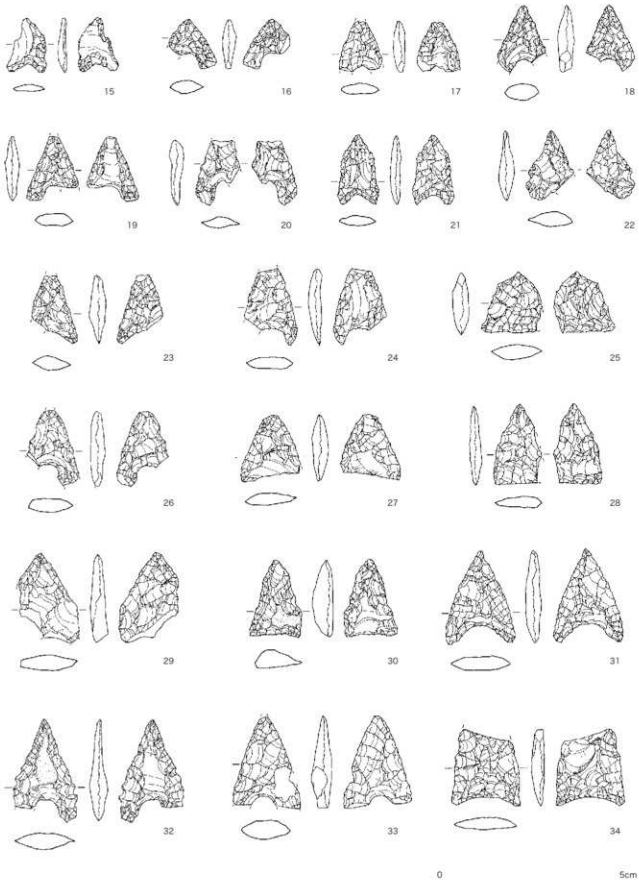
15～23、25～27は長さ2㎝前後より小さい小型の石鏃である。15は剥片鏃で、側縁の一部を欠失する。19は片面中央に縦方向の剥離があるが、先端欠失時にできた剥離と考えられる。21は五角形を呈している。28・30・43・47は基部を下方向からの細かな剥離によって平坦に作ってい



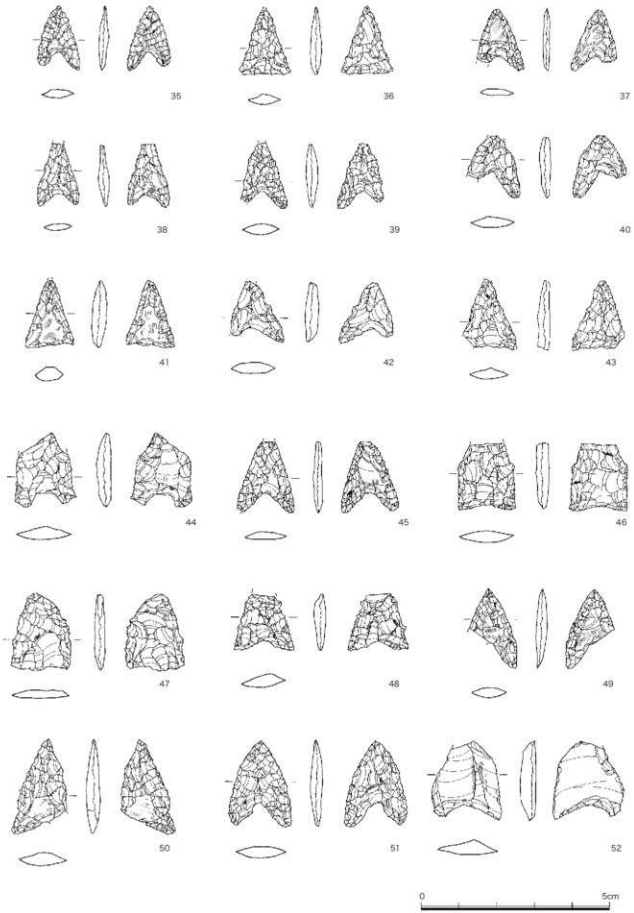
図Ⅲ－4　ポイント1（1/1）



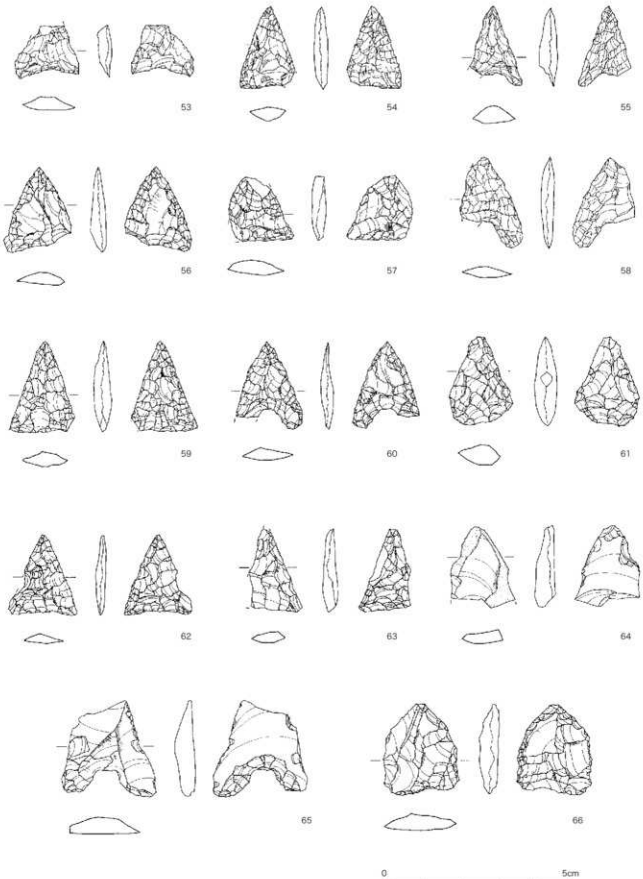
図Ⅲ－5　ポイント2（2/3）



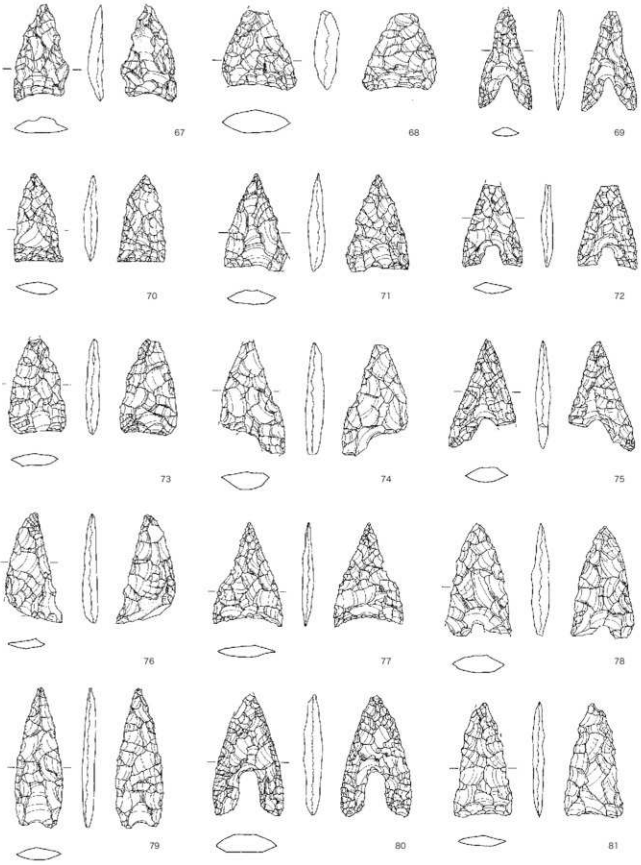
図Ⅲ－6　石鏃1（1/1）



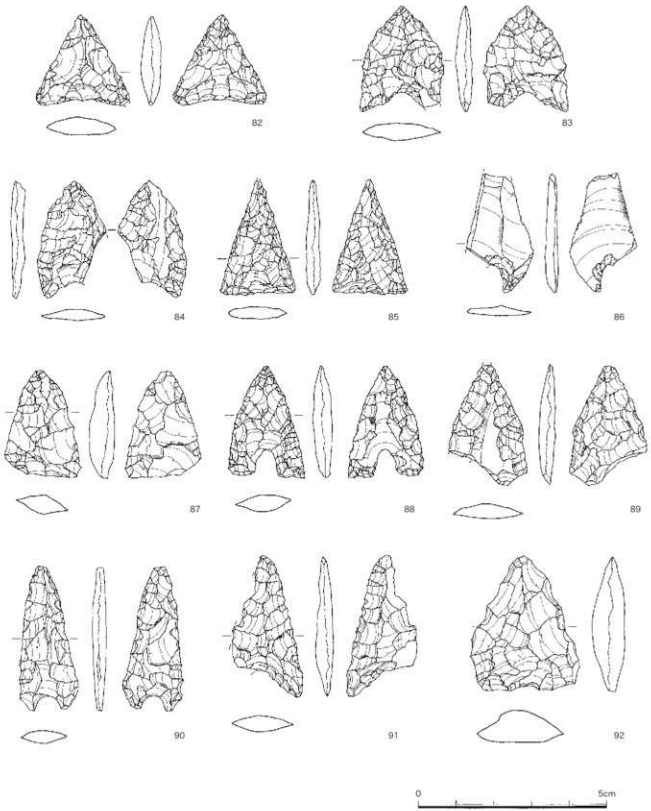
図Ⅱ－7　石鏃2（1/1）



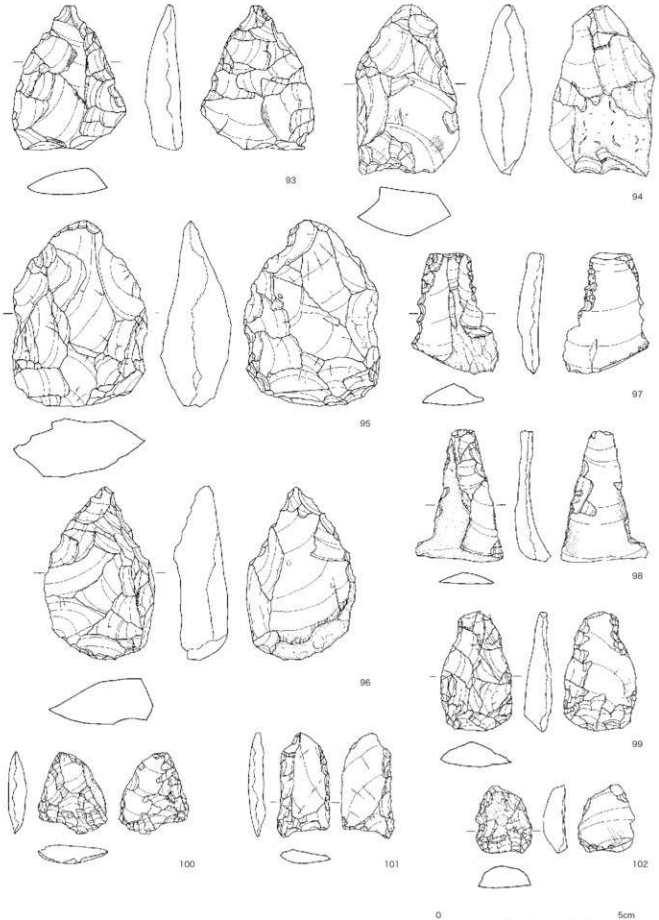
図Ⅲ－8　石鏃3（1/1）



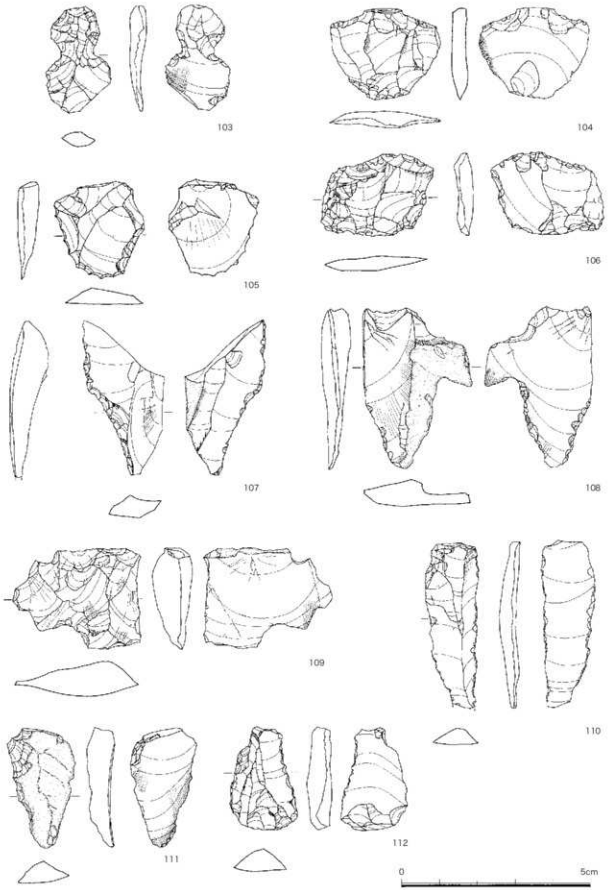
図Ⅱ－9　石鏃4 (1/1)



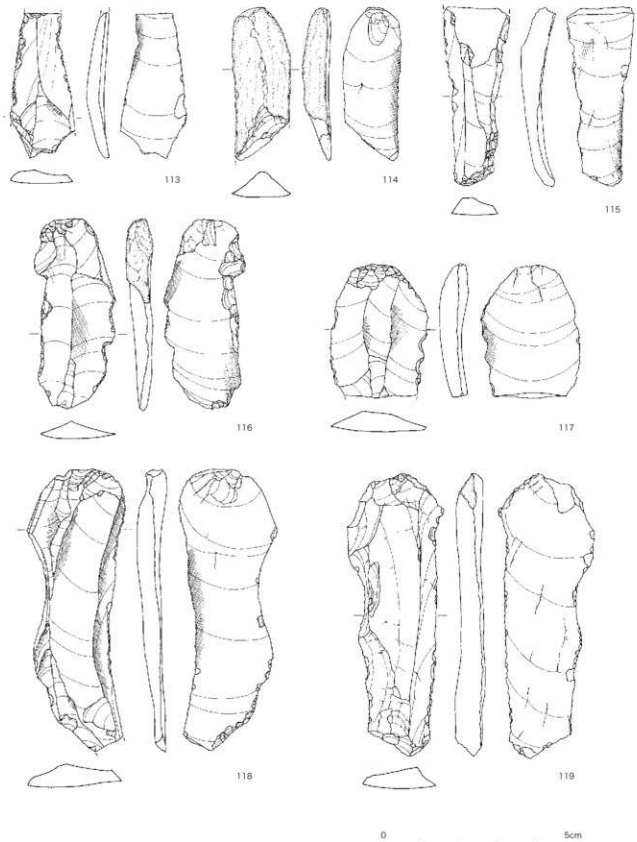
図Ⅲ－10　石鏃5（1/1）



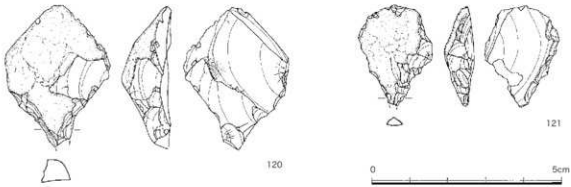
図Ⅱ－11　石鏃6・剥片1（1/1）



図Ⅲ－12　剥片2・つまみ形石器（1/1）



図Ⅲ－13　剥片３（1/1）



図Ⅲ－14　石錐（1/1）

る。32は片面に自然面、反対面に主要剥離面を残している。37は長さ1.6cmで両面の中央に研磨を施している。41・49も両面研磨を施している。パティナも古めで、縄文時代草創期後半～早期初頭のものであろう。44・45は主要剥離面を一部に残している。52は縦長剥片を利用した剥片鏃である。61は全体に作りが雑で、脚・基部らしきものを意図しておらず、未製品の可能性もある。64・65は剥片鏃であるが、64は自然面を多く残し、加工は先端部の一部にとどまっていることから未製品もしくは石鏃ではない可能性がある。66は長めの押圧剥離と先端部に細かな調整を施しているが、全体の形状から完成品ではないかもしれない。78～81は長さ3㎝を超す。79は細身で小さな凹脚を作り出している。80は鍬形鏃である。82は正三角形、83は五角形を呈している。86は縦長剥片を利用した剥片鏃である。90は細身で小さな基部が付く79と同形態である。92は全体に作りが粗く、厚みもあり、未製品かもしれない。93～96は大型の石鏃もしくは未製品で、石銛の可能性があるものである。93は安山岩製で、粗い剥離を施している。94は黒曜石製で、先端部があまり尖っていない。95は安山岩製で、2.4㎝の厚みがあり先端部の尖りも顕著でなく、未製品もしくは別の製品かもしれない。96についても別の製品の可能性がある。

（4）剥片（図Ⅲ－11～13、図版Ⅲ－4）

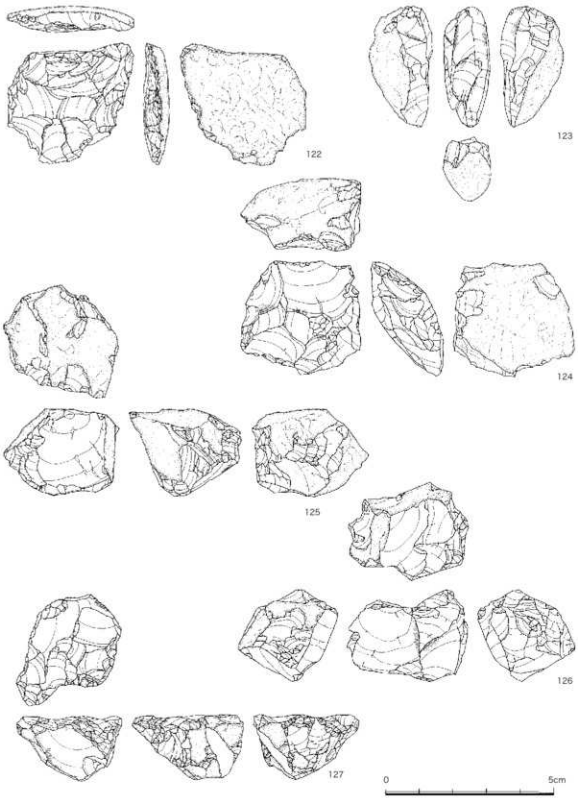
剥片・加工痕がある剥片、使用痕がある剥片、及びつまみ形石器をまとめて述べる。97～102は剥片の両側縁に加工痕が認められるものである。97・98は先端がやや細くなる縦長剥片の両側に加工を施した物で、ともに片面に自然面を残している。99は主要剥離面の周縁と反対面のほぼ全面に加工を施している。100～102は小型の剥片の周縁のほぼ全面に細かい加工を施しているもので、特に100・101は石鏃の未製品の可能性も考えられる。103はつまみ形石器で頭部に調整を施している。104はやや幅広のつまみ形石器で、頭部は折損している。105はつまみ形石器に近い形状であるが頸部に細かい剥離が認められず、側縁に使用痕がある。106は片面の四縁に加工（一部使用痕）が施されている。楔形石器に似る。107・108はやや特異な形状の一ないし二辺に使用痕が認められる。110は使用痕がある縦長剥片。113～119は中・大型の縦長剥片で側縁に使用痕が認められる。114は片面が全面自然面である。118・119は特に大型で、側面からの形状はほぼ直線的で反っていない。

（5）石錐（図Ⅲ－14、図版Ⅲ－5上）

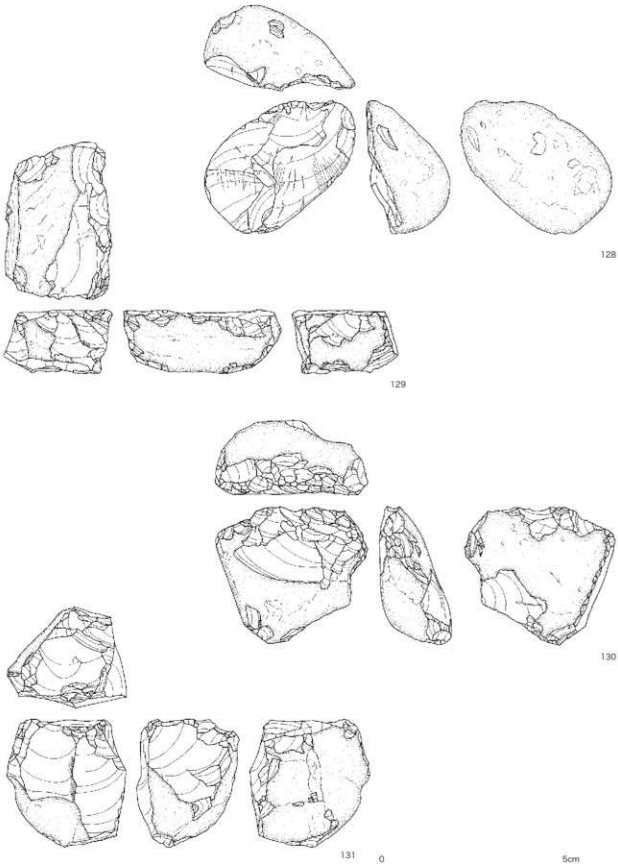
120・121は石錐で、ともに先端部を欠失している。片面は主要剥離面を残し、反対面の大半は自然面である。

（6）石核・原石（図Ⅲ－15～17、図版Ⅲ－5上）

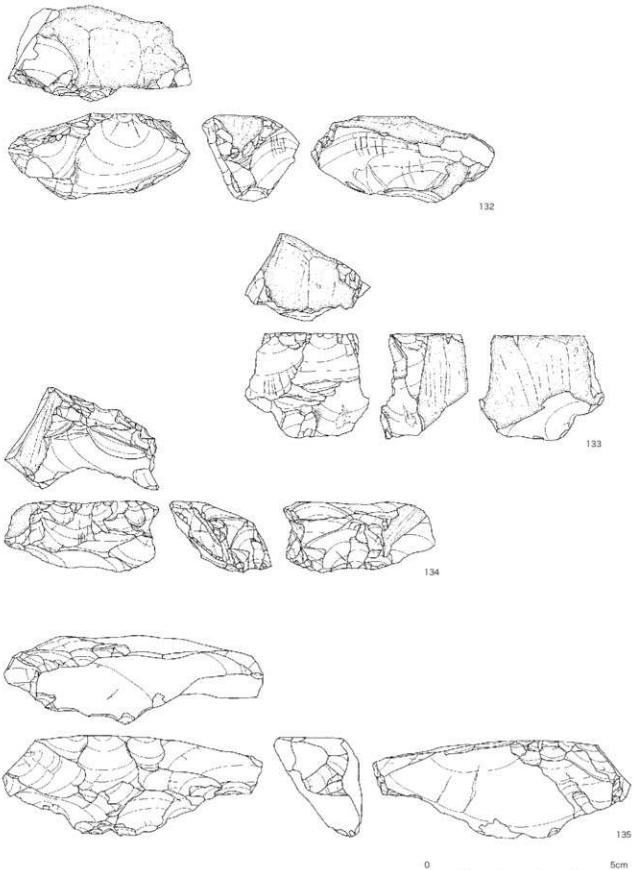
122～135は石核・原石で、すべて黒曜石製。122は片面が全面自然面で厚さ0.8cmと薄めのもの



図Ⅲ－15　石核１（1/1）



図Ⅱ－16　石核２（1/1）



図Ⅲ－17　石核３（1/1）

である。周縁部に細かな剥離があることから、小剥片を剥出し終わった後にスクレイパーに転用したものと思われる。123は長さ3㎝以上の縦長剥片を剥出している。124～126は小型の横長剥片を剥出したと考えられる。128は径5㎝未満の円礫を素材に、大きく半裁した後横長の小剥片を剥出している。129は角礫の素材で、片面に小剥離が確認できる。131は角礫を素材にやや幅広の縦長剥片を剥出している。135は最も大きな石核である。上下の方向からやや大きめの横長剥片を剥出している。

（7）スクレイパー・石匙（図Ⅲ－18～20、図版Ⅲ－5・6）

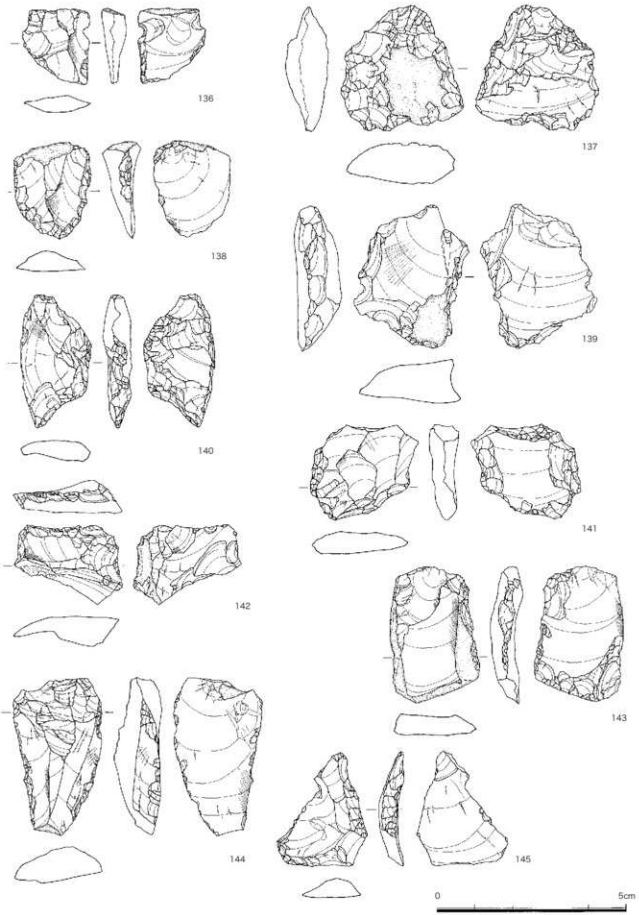
掻器・削器・石匙をまとめた。136は主要剥離面と周縁調整のパティナの色が異なる。古い時代の剥片を再利用した可能性が高い。141・150なども同様である。137は周縁のほぼ全面に調整が認められる。138は両側縁に調整がある。139・140は側縁の一部に調整が認められる。141はほぼ周縁の全面に、142は長側縁に調整が施されている。144は使用痕と加工の判断が付きがたい。146・156は全体が二等辺三角形に近い形態の両側縁に調整を施している。154・155は横長の剥片の下辺に調整を施している。157～159はやや大型のもので、一ないし二辺に調整を施している。

160～167は石匙である。160・161は縦形の石匙で、いずれも下部を欠失している。162～166はやや横長の石匙で、164と166は黒曜石製である。167はかなり横長の剥片を利用しており、つまみ部を欠失している。

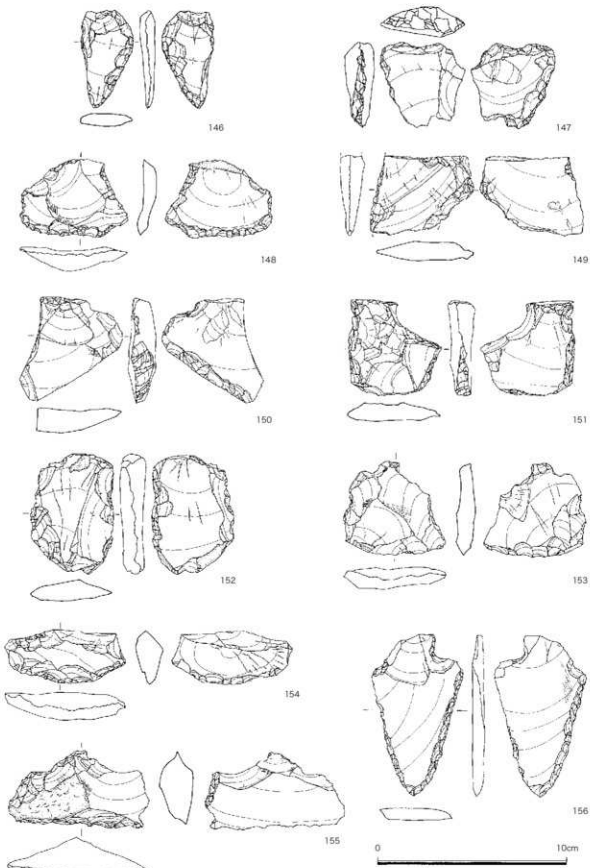
（8）石斧・石斧未製品（図Ⅲ－21～25、図版Ⅲ－6・7）

石斧・石斧未製品はほぼ全点図化し、図化した以外に、石斧・未製品の可能性のある小破片数点がある。168～183は磨製石斧の未製品で、いずれも玄武岩製である。168は一部に自然面を残している。下部を大きく欠失している。縦方向に大きく剥ぎ取った後、一部周縁調整と頭部の調整を施している。169は一部に自然面を残しているが周縁調整が進んでいる破片で、遺存しているのは刃部と思われる。幅（11.7㎝）の大きさから太形の石斧と思われる。170は原石の剥ぎ取った剥片素材を使用している。片面はもともと自然面であったのを、調整によって剥ぎ取っているが、一部に自然面を残している。周縁調整はあまり進んでいない。打製石斧の未製品の可能性もあるが、厚さや形状から小型の磨製石斧未製品と思われる。171は170と大きさ的には近いが、礫素材から製作されている。周縁調整が進み、ほぼ石斧の形状に近くなっている。敲打直前の破片と考えられる。頭部の形状が丸みを帯び、断面形が尖っていることから、弥生時代前期の可能性がある。172もほぼ石斧の形状ができあがっている。中央の一部に擦痕が観察できるが、研磨によるものか何らかの原因で擦ったものか、遺存状況が良くなくわからない。今山第8次調査では、敲打以前に研磨を施したものもあることから、どちらにしても不自然ではない。173はもともと石斧に近い形状の原石を選び、それに周縁調整を施したもので、両面とも中央に自然面を大きく残している。刃部の加工はあまり進んでいないが、失敗部位が見つからない。あるいは刃部の厚みが厚すぎて遺棄したものか。174は敲打段階まで進んだ未製品である。175は小型品である。ほぼ全面に大きな剥離を施し側縁も交互剥離を成しているが、形状からは石斧の未製品かどうか不明である。176も玄武岩製の加工を全面に施したものであるが、大きさ的には石斧の未製品とは判じがたい。一見楔形石器のような剥離である。177はほぼ周縁調整が終わっている。

頭部は自然面で、平面形は四角形で断面形も尖っておらず、中期に属するものか。178はほぼ完形の未製品である。刃部の尖りなど一部を除いてほぼ全形ができあがっているが、図の右面の中央部に縦方向の大きな剥離が入っており、これが失敗の原因である。179は石斧に近い形状の原石を選択している。全体の粗い調整と一部の周縁調整が行われているが、刃部の厚みの削減は進んでいない。180～183は敲打段階まで進んでいる。182は幅の割には厚さが厚い。183はやや小型の未製品で、敲打の後に研磨状の擦痕が認められる。明確ではないものの、擦痕のある部分に剥離や敲打が認めら

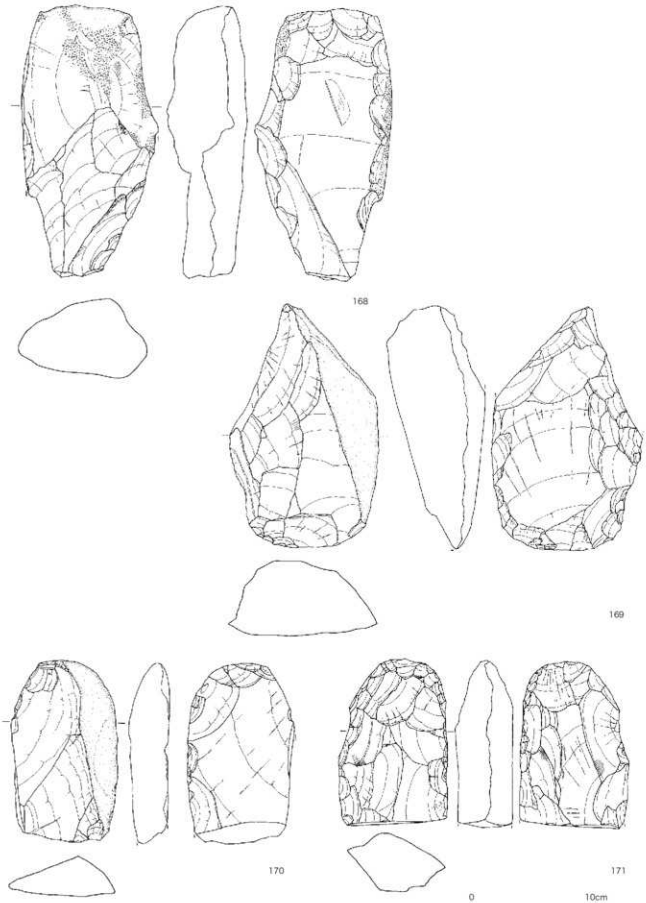


図Ⅲ－18　スクレイパー1（1/1）

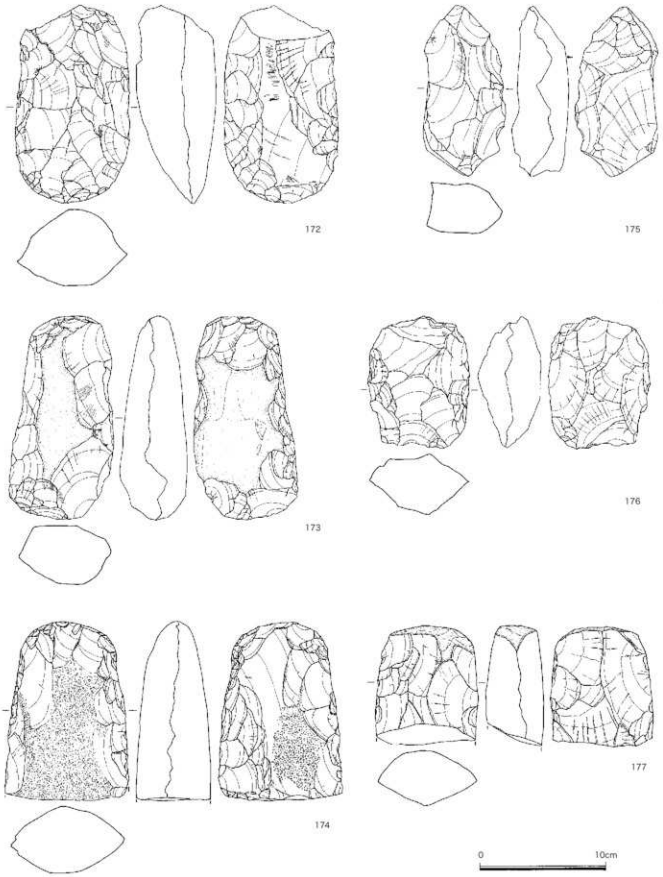


図Ⅲ－19　スクレイパー2（1/2）

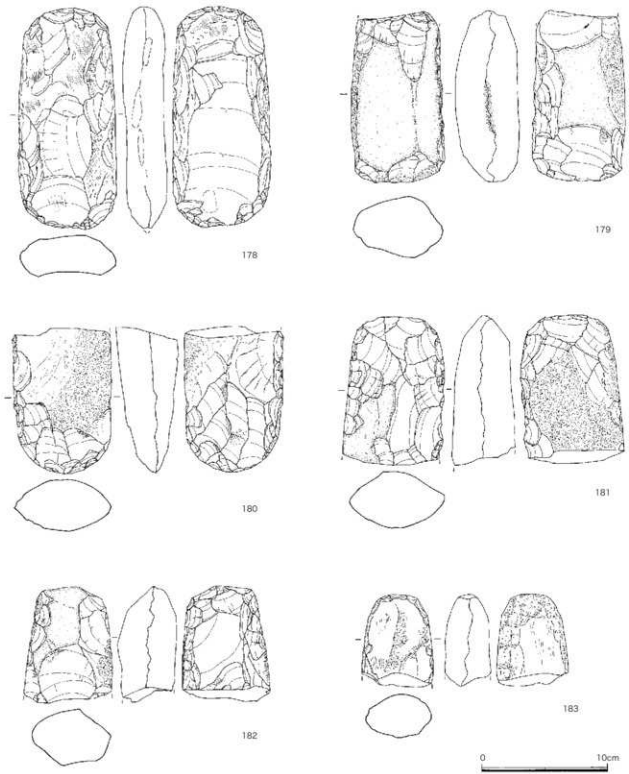
図Ⅲ－20　スクレイパー3・石匙（1/2）



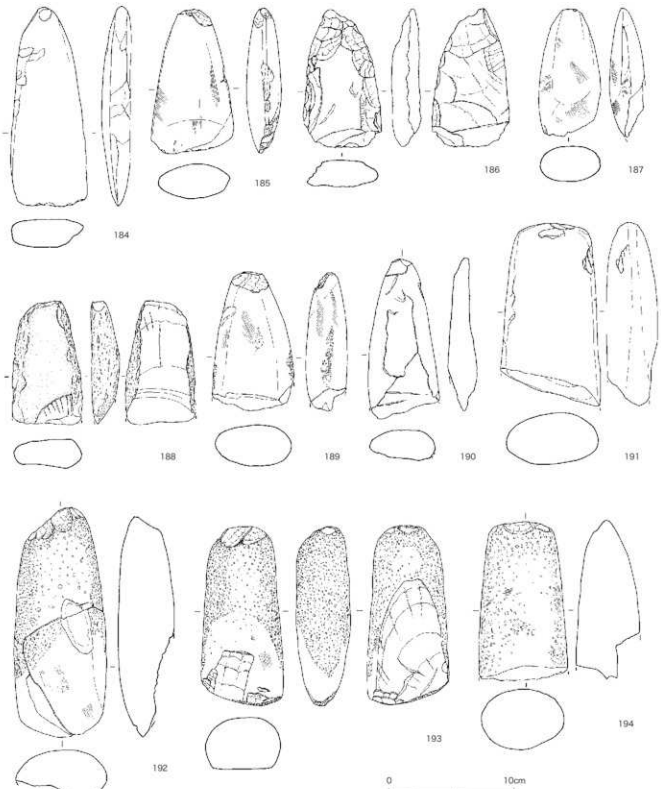
図Ⅲ－21　石斧・石斧未製品１（1/3）



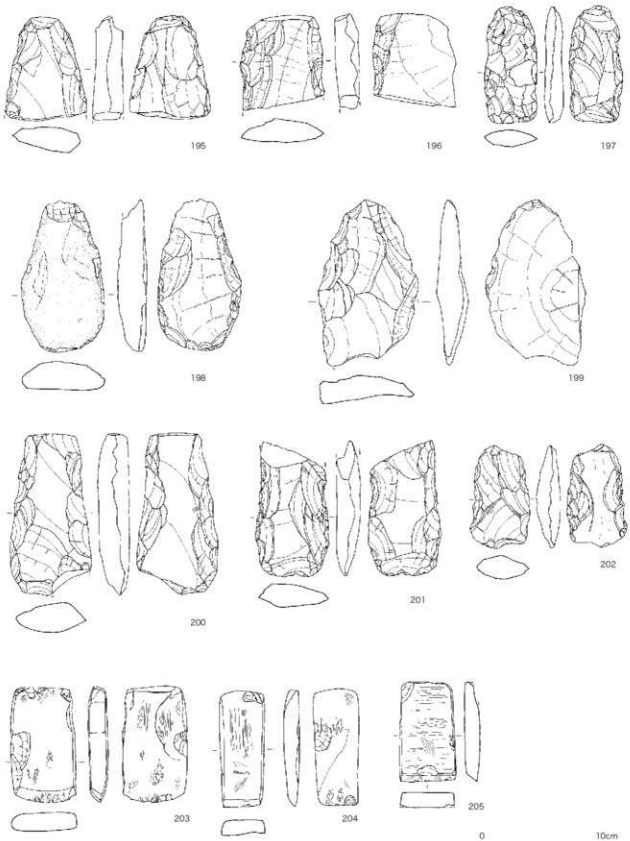
図Ⅱ－22　石斧・石斧未製品２（1/3）



図Ⅲ－23　石斧・石斧未製品３（1/3）



図Ⅱ－24　石斧・石斧未製品4（1/3）



図Ⅲ－25　石斧・石斧未製品５（1/3）

れないことと両面のかなり広い面に擦痕が認められることから研磨を施しているものと思われる。

184 ～ 194 は両刃の磨製石斧である。184 は蛇紋岩製。長さ 15.7㎝と長い割には厚さ 2.2㎝と薄い。両面はほぼ平坦になるまで研磨している。全体に摩滅が進んでおり、剥離の痕跡や敲打痕はほとんど認められない。黄色味を帯びた青白色を呈する。185 も蛇紋岩製で 184 より極端に短く、全体的にも丸みをもった側面・断面形を成している。長さが短いのは研ぎ直しの可能性もある。研磨痕が部分的に確認できるが、全体的に摩滅が進んでいる。青白色を呈する。186 も蛇紋岩製である。片面は周縁の一部を除いてほとんど加工が施されず、反対面はやや大きめの周縁加工が残されている。敲打痕は確認できず、一部に擦痕が認められるが、ごく一部にとどまることからも研磨とは考えられず、本品は未製品と考えられる。少量ではあるが、蛇紋岩の剥片も出土しており、少なくとも本遺跡で何らかの加工を施したものと考え得る。187 も蛇紋岩製と思われるが、色調がやや灰色味を帯びている。欠失部分は 3 ㎝程度と思われる。頭部の一部などを除きほぼ全面を研磨している。以上の 4 点は材質・形態から縄文時代の所産と判断されよう。188 は刃部からの打撃によって、片面をほぼ全面欠失する。使用時によるものか。安山岩製で、残りの 1 面はほぼ自然面で、一部に敲打痕が残り、研磨の痕跡は伺えない。189 は緑色片岩製か。ほぼ全面を研磨している。190 は片面を完全に欠失する。遺存状況が悪く、研磨・敲打の状況は不明。

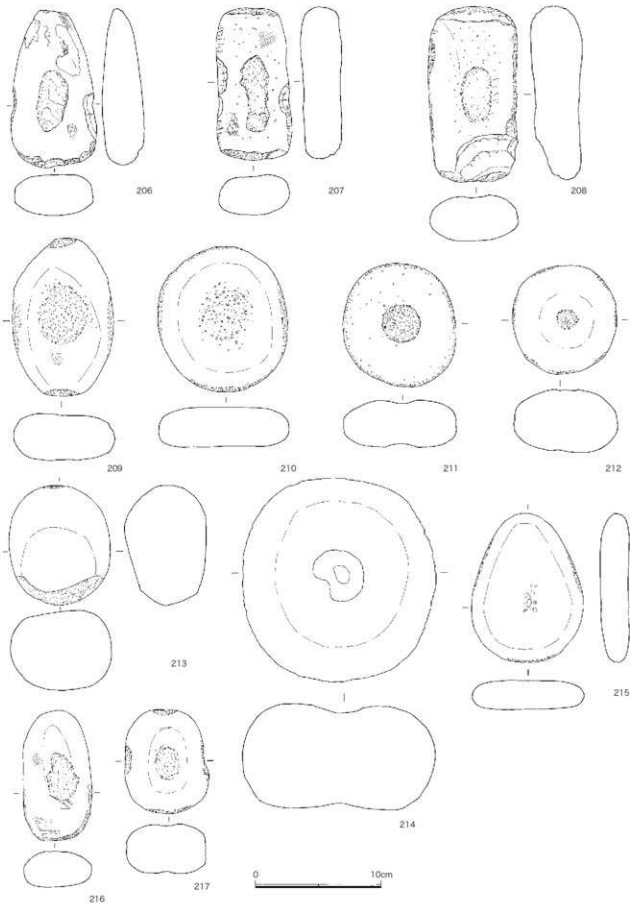
191 ～ 194 は玄武岩製の太型蛤刃石斧である。191 は縦方向の見通し図を見ればわかるが、下部が凹んでおり製品らしくなく、未製品の可能性も考えられる。しかし風化が激しく明確な研磨痕は確認できないものの、滑らかな表面であることから少なくとも研磨を施していることは間違いない。192 は長さ 18.1㎝、重さ 829 ｇを計る。片面の刃部部分を大きく欠失し、反対面も剥離している（この部分は接合した）。使用時に刃部が欠損したものか。頭部に調整時の剥離が残った他は敲打と研磨によって全面加工痕を消している。193 は長さ 14.0㎝、重さ 682 ｇを計る。192 と同様に刃部を大きく欠損している。頭部には剥離が残り、やや丸みを帯びた四角形を呈する。刃部欠失後に敲石に転用しているため、先端部が敲打によって潰れている。194 は下部を欠失している。191 と同様に研磨痕が確認できず、頭部の縦断面は尖っており、剥離も大きく遺存していることから完成品直前の可能性もある。

195 ～ 202 は打製石斧またはその未製品である。195 は玄武岩の小礫を用いたものである。やや厚みがある礫素材であることから、小型の磨製石斧未製品の可能性もある。白色に近い色調である。196 は玄武岩の剥片を素材とした打製石斧である。頭部は自然面である。197 は安山岩質の石材であるが、パティナが古く風化も進んでいる。長さ 9.2㎝と小型であり、この大きさの打製石斧は考えがたく、別の用途を考えた方が良いかもしれない。198 は玄武岩の剥片を素材としている。主要剥離面の周縁を調整し、反対面は自然面である。刃部は潰れており、敲石に転用している。199 は玄武岩の横長剥片を縦に利用した珍しい製品である。刃部を欠失しているが、あるいは未製品かもしれない。200 は玄武岩の縦長剥片を素材としている。全体的に摩滅がひどい。201 は安山岩の縦長剥片の周縁に調整を施して打製石斧としている。202 は玄武岩製である。頭部を欠失しているが、それでもかなり小型と思われ、あるいは打製石斧では無いかもしれない。

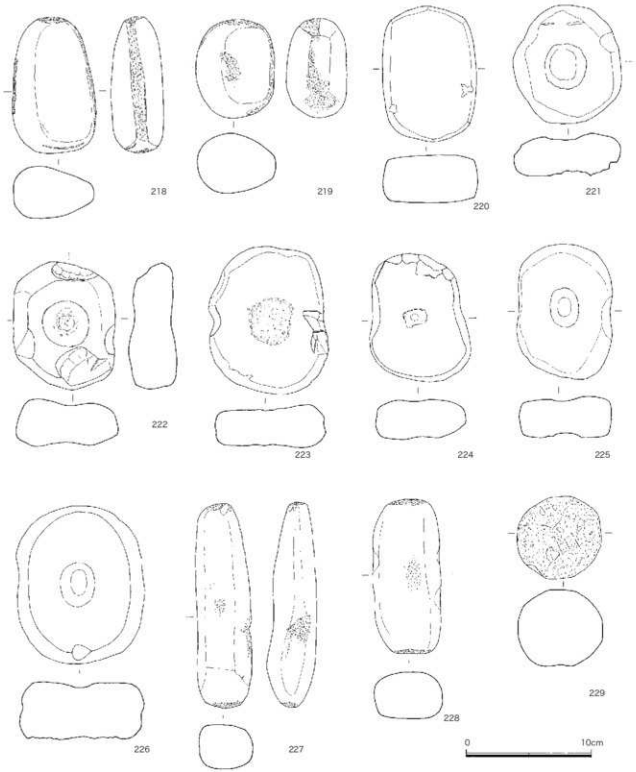
203 ～ 205 は頁岩製磨製片刃石斧である。203 は片側縁に緊縛のためか一部を欠失している。204 はやや細身の片刃石斧。205 は頭部に段を有している。

（9）磨石・凹石・敲石類（図Ⅲ－ 26・27、図版Ⅲ－ 8）

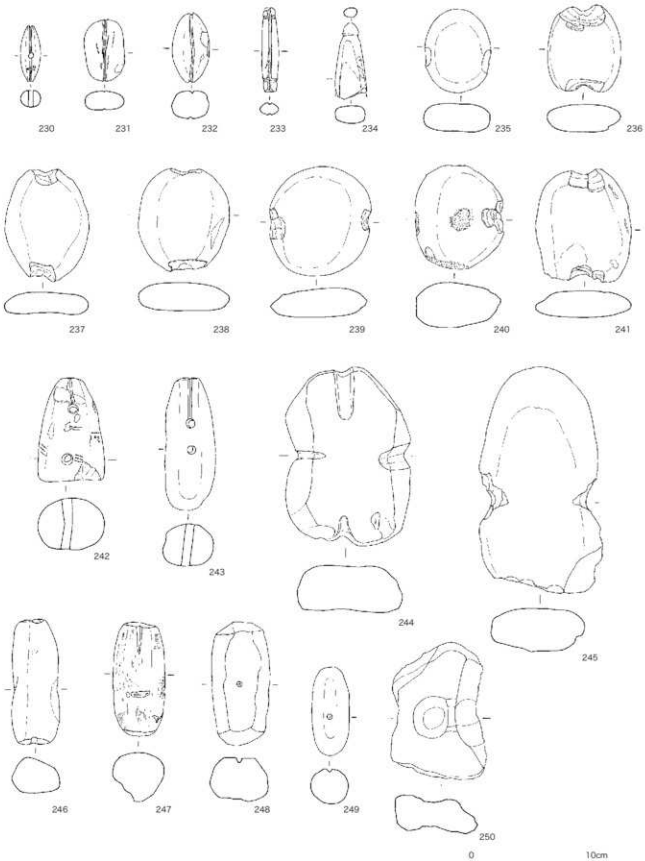
図化したのは全体の 1 ／ 3 程である。磨石・凹石・敲石は兼用しているものが多く、ここではこの類の石器をまとめて報告する。206 ～ 208 は全体に研磨痕が認められ、中央部が敲打で凹み、両



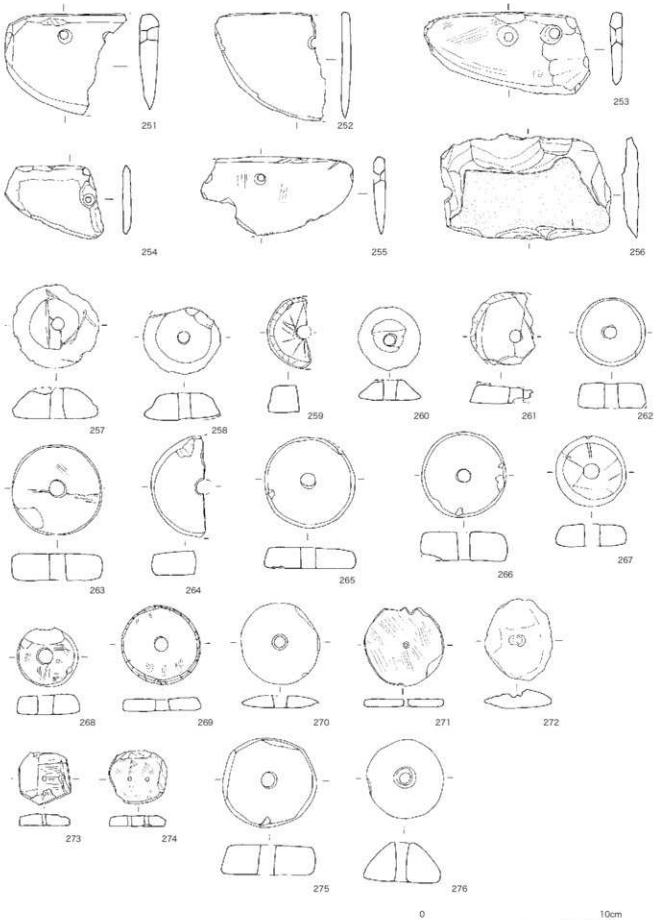
図Ⅱ－26　磨石・凹石・敲石類１（1/3）



図Ⅲ－27　磨石・凹石・敲石類２（1/3）

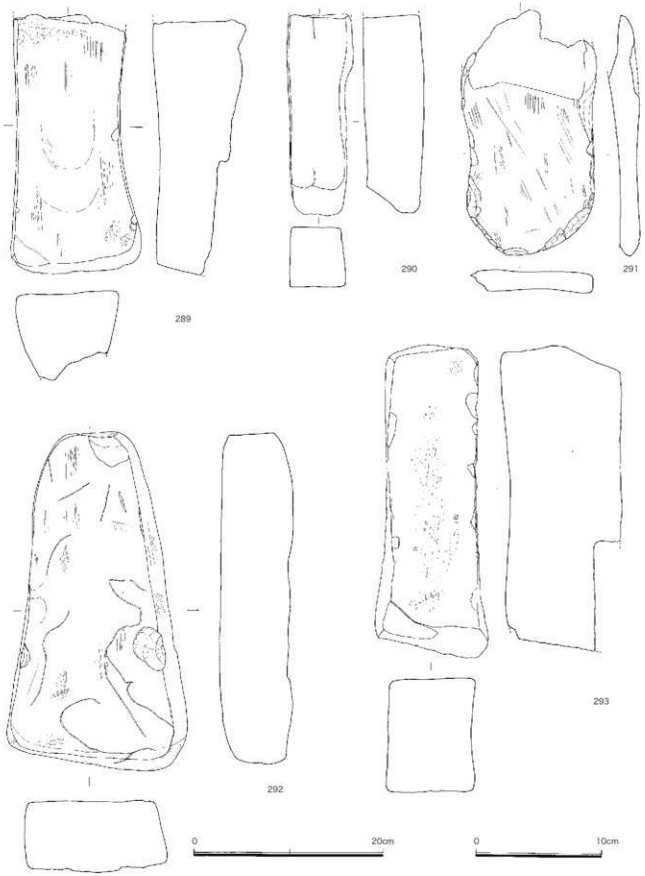

230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
0
10cm

図Ⅲ－28　石錘（1/3）



図Ⅱ－29　石庖丁・紡錘車・有孔石製品（1/2）

図Ⅱ－30　砥石１（1/3）



図Ⅲ－31　砥石２（1/3・1/4 292 のみ）

端部にも敲打痕がある。磨製石斧の転用と思われる。209 ～ 212・216・217 は全体が磨かれ、円形・楕円形の中央部と端部の敲打痕あるものである。213 は両端部、特に片側に敲打痕のみがある。214 は中央部が敲打と「擂り」により凹んでいる。215 は扁平な石材の中央部に敲打痕が認められる。218・219 は断面形が三角形を呈し、三角形の頂点にあたる辺が敲かれているやや特殊な形で、かなり小さいながら南西諸島のクガニ石にやや似ている。220 はいわゆる石けん状の磨石。221 は両面中央に「擂り」による凹みがある。222 ～ 225 は両面中央に敲きと擂りによる凹みがある点は 221 と同じだが、両辺中央に石錘のような抉りが施されている。226 は中央の凹みだけである。227 は棒状の敲石で、今山遺跡では石斧の剥離に使われると考えられる細い棒状の敲石が発見されているが、本品はやや厚く、別の物か。229 は玄武岩製の円形敲石で、今山遺跡例から石斧の敲打具と考えられる。

これらの遺物は縄文時代・弥生時代のものとともに、奈良時代の池状遺構００１や２～４区で出土した 218・219 の断面三角形の磨石や 223・224 の両側縁に抉りがある凹石などは奈良時代である可能性も考えられる。

（10）石錘（図Ⅲ－ 28、図版Ⅲ－ 8・9）

図化した以外に数点の破片がある。230 ～ 232 は長楕円形の形態に溝を彫ったもので、230 は中央に穴を穿っている。233 はさらに両端部に横溝を彫っている。234 は滑石製で石錘以外の可能性もある。235 ～ 241 は扁平な礫の２方向に抉りを施したもので、240 は中央に敲打による凹みがあり、転用品である。242・243 は形態は異なるが２穴を穿ち、上の穴まで溝を彫っている。244・245 は大型の石錘。246 は両側縁と両端部にわずかに溝が確認できる。247 は滑石製で、ほぼ全面を磨き、図の上部に溝があり、中央やや下部にも横方向の溝が確認できる。248・249 は中央に浅い穴がひとつある。石錘の未製品の可能性がある。250 は滑石製で、両側中央に浅い穴があり、片面の一部を溝状に彫っている。あるいは大型石錘の未製品か。

（11）石庖丁（図Ⅲ－ 29、図版Ⅲ－ 10）

図化した以外に小片が数点ある。253・254 は立岩産である。256 は図の左側に穿孔と思われる部分があることから、石庖丁の未製品と考えられる。

（12）紡錘車（図Ⅲ－ 29、図版Ⅲ－ 10）

厚さが薄いもの、厚さが厚く断面形が長方形のもの、厚さがあり断面形は台形のものの大きく３タイプに分けられる。前者は弥生時代、後２者は古墳時代以降の可能性が高いものと思われる。257・259・267 には先刻が施されている。

（13）有孔石製品（図Ⅲ－ 29、図版Ⅲ－ 10）

３点ある。いずれも滑石製品。272 は１穴を途中まで穿っている。未製品か。273 は１穴を、274 は２穴を穿っている。

（14）砥石（図Ⅲ－ 30・31、図版Ⅲ－ 9・10）

１／３程の点数を実測した。小形の棒状のもの（277 ～ 281）厚みのあるもの（283 など）、扁平なもの（284）、大形のもの（292・293）など、種々なものがある。

（15）玄武岩剥片類

前述のように、玄武岩の剥片がコンテナ 20 箱出土した。玄武岩製石斧未製品の出土と合わせて、当地で石斧製作が行われたことは明らかである。玄武岩製石斧未製品と玄武岩剥片・チップが大量に出土した今山遺跡第８次調査の計測結果では、長さ４～５㎝以下の剥片がまとめてブロック状に捨てられており、それ以上の大きな剥片は散漫な状態で出土している。本調査で出土した剥片類の計測は行っていないが、おおむね長さ２～ 10㎝内外のもので特に長さ４～５㎝以下のものが大半を占め、

それらが図Ⅲ－2のH 17・18区付近でまとまって出土しており、今山遺跡同様に概ね第2工程の調整時に出た剥片（石屑）をまとめて捨てたものと考えられる。なお今山遺跡では玄武岩剥片を利用したスクレイパーや石庖丁などが出土したが、当調査では確認できなかった。

（16）縄文土器（図Ⅲ－32）

縄文時代と考えられる石器は多く出土したが、縄文土器と確認できたものは少なく、全部で20点あまりで、295の1点を除き、後期末後半から晩期中頃の粗製土器である。当調査区の全出土遺物の量が多いことから、他の時期の土器片の中に紛れている可能性もある。294は滑石を多く含んだ沈線文土器。295は粗製に近い鉢の胴部片。296～299は粗製深鉢である。296は条痕の上からなで消し、297は外面条痕で内面はなで消し、298・299は横方向の条痕施文土器である。特に298・299は小さな凹みが器面に無数にある。これは早良から糸島にかけての縄文時代後期末から晩期中頃の粗製深鉢に多く見られる。

（17）弥生土器（図Ⅲ－33）

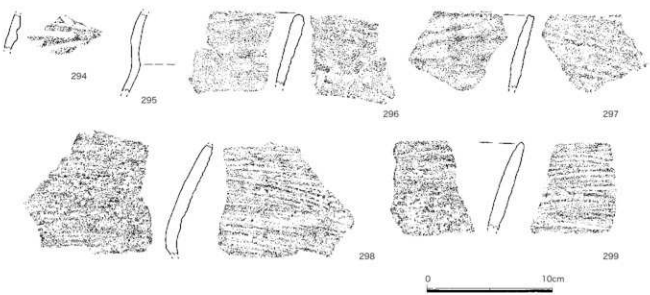
弥生土器も出土量はさほど多くない。前期～中期前半の土器は見あたらない。中期中頃(300など)以降で、中期後半がもっとも量的に多く、赤彩土器（309・310）を含んでいる。後期の土器（303・315など）は余り多くない。

（18）土錘（図Ⅲ－34）

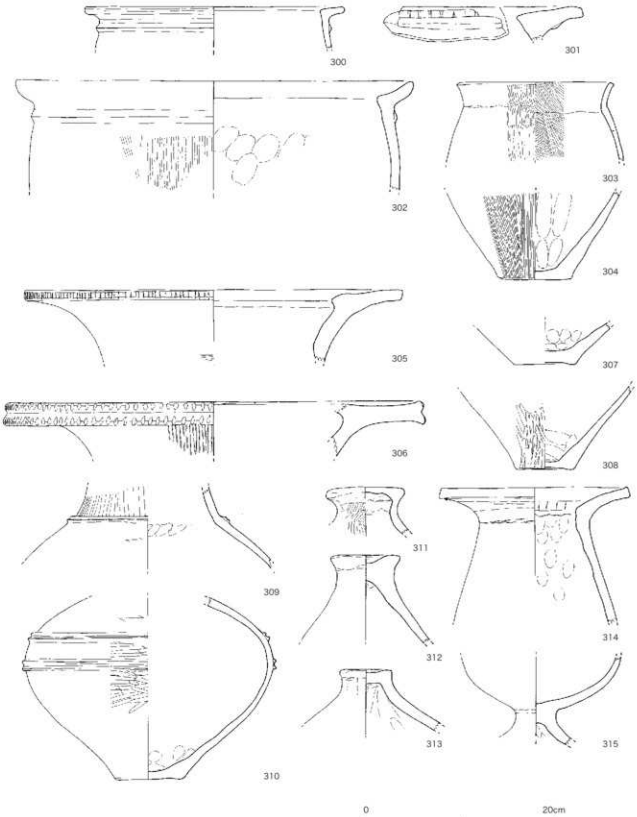
土錘は177点出土し、30点実測した。大きく分けると本体に穴が貫通するタイプ(316～342)と、長方形の平面形の端に穴を開けているタイプ（343～345）の2者に分けられ、前者は長さや厚みでさらにいくつかのタイプに分けられる。ただし329は穴が貫通しておらず、土錘ではなく、別の製品か失敗品である。後者は今山遺跡第8次調査で出土しており、北九州市近辺の遺跡例から弥生時代～古墳時代初め頃の所産かと考えられる。

（19）金属製品（図Ⅲ－34、図版Ⅲ－10）

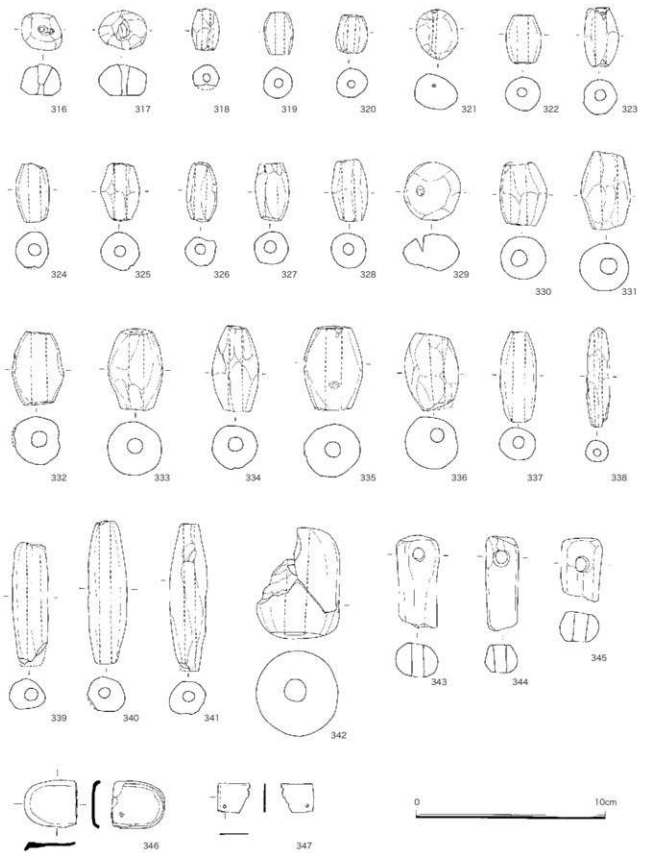
奈良時代の追加資料で、ともに帯金具の部品と思われる。346は蛇尾で青銅製。347は青銅製の破片で、巡方の金具であろう。



図Ⅲ－32　縄文土器（1/3）


300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
0
20cm

図Ⅲ－33　弥生土器（1/4）



図Ⅲ－34　土錘・金属製品（1/2）

3　まとめ

今回の報告は、主に旧石器時代～古代に至る出土石器を報告した。出土した石器は利器・石核だけでも400点近くに及び、広範囲の時代の遺物を包含している。残念ながら、今回報告した遺物の大半が古墳時代以降の遺構や川・池などの中から出土しており、1点1点の詳細な時期は不明なものが多い。黒曜石・安山岩の剥片石器は当然弥生時代以前であろうが、磨石類（凹石・敲石含む）・石錘・砥石の中には、古墳時代・奈良時代のものも含んでいる。

旧石器時代～縄文時代初頭の石器は、1点を除き、11区から北側で出土しており、21～26区の東側の調査区である第27次調査ではナイフ形石器・台形石器・船底形細石器が出土しており、当調査区で出土した石器群もこれらと一連の遺跡のものと思われ、当調査区の立地から考えれば、20次調査の東側に27次調査も含めた旧石器時代の良好な遺跡が広がっていると考えられる。

縄文時代の遺物も、早期初頭の局部磨製石鏃・鏃形鏃から後期後半～晩期前半の剥片鏃やつまみ形石器など各時期の石器が出土している。その中でも蛇紋岩製石斧4点は特記すべき遺物である。いずれも遺存状況は良くないが、縄文時代的な石斧は6点しかなく、そのうち4点が蛇紋岩製で、かつ完成品ではない1点と少数ながら剥片が出土していることから、未製品の状態で搬入され当地で最終仕上げを行ったと考えられる。

一方、弥生時代石斧の代表格である玄武岩製磨製石斧の未製品と玄武岩の剥片類も出土していることは、本文で述べたとおりである。出土した約20箱の玄武岩剥片類はH～J－17・18区近辺の大溝００４ほとりあたりでまとまって出土した。石斧未製品の多くもこの地点周辺から出土している。未製品は、第1工程に近いもの2点、第2工程のもの7点、第3工程のもの7点であるが、第3工程のものの中に研磨状の擦痕が認められるものが2点ある。石斧の製作道具としては、棒状の敲石1点と円形の敲石1点が出土している。これらの点から、当地点で玄武岩石斧製作を行っていたことは明らかである。今山遺跡第8次調査では、須玖1式までしか石斧製作は確認できなかったが、当地で出土している弥生土器はそれ以降が主体となっている。ただし弥生時代包含層の大半は未掘であり、必ずしも時期的に矛盾するものでは無いと思われる。

玄武岩製石斧は今山遺跡以外でも製作が行われており、糸島では今宿五郎江遺跡・周船寺遺跡など、早良平野では有田遺跡・四箇遺跡など、福岡平野では那珂遺跡・比恵遺跡などで玄武岩石斧未製品とともに剥片類・敲石などが出土しているが、糸島平野以外ではおおむね前期の範疇のもので、糸島平野では中期においても製作が行われている。今回は量的にもさほど多くなく、時期的にも不明な点が多いが、伊都地域の周船寺遺跡や今宿五郎江遺跡だけでなく、志摩地域においても石斧製作が行われていたことが明らかとなった。

磨石・敲石のうち、218・219の2点は断面が三角形を呈するやや特殊なものであるが、ともに奈良時代の遺構・遺物が集中する3区・4区で出土したものである。これがすぐに奈良時代の遺物であることを意味するわけではないが、今後の同種の遺物に関心を払っていきたい。

奈良時代遺物の重要性についてはここで述べるまでもなく「大宝元年」銘木簡の他、多量の中国製陶磁器群の他、4点の帯金具が既報告済みで、今回さらに2点の資料を追加することが出来た。しかし郡衙などにも比して重要な遺物群であるにもかかわらず遺跡の性格は不明な点が多く、製鉄遺構が多い周辺の調査地点も含めて、検討していかなければならない。

Ⅲ－1　第 20 次調査遺物一覧

※出土位置の標記に統一性がないが、ラベルの標記に従った

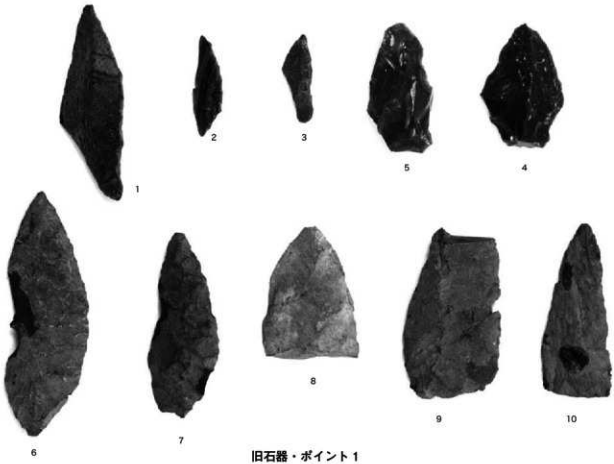
図	No.	器種	石材	長	幅	厚	重量	出土位置	備考
3	1	ナイフ形石器	黒曜石	6.6	2.3	0.8	8.6	H18 区 044 遺構面	
3	2	ナイフ形石器	黒曜石	3.4	1.0	0.4	1.2	I12 区遺構面	
3	3	ナイフ形石器	黒曜石	2.9	1.1	0.7	1.7	H11 区 050（床面）	
3	4	剥片尖頭器	黒曜石	4.2	2.8	1.1	9.5	G23 区 044（黒色粘）	
3	5	角錐状石器	黒曜石	4.4	2.4	1.2	10.2	G11 区 044（床面）	
4	6	ポイント	安山岩	8.1	2.8	0.9	19.3	～J 17 ～ 18 区遺構面	欠損あり
4	7	ポイント	安山岩	6.2	2.4	0.9	10.8	H17 区 044 西側検出面	
4	8	ポイント	安山岩	4.5	3.2	0.8	12.1	H16 区 044（西岸）-20 ～ 60cm黒色土	先端部のみ
4	9	ポイント	安山岩	5.7	3.3	1.1	21.8	H18 区 044（遺構面）	先端欠
4	10	ポイント	安山岩	5.9	2.3	0.7	9.4	C-3 区 001 暗灰砂土（-80）	
4	11	ポイント	安山岩	4.8	2.9	1.8	23.0	H-15 区 044(-30)	
5	12	ポイント	安山岩	8.6	3.6	1.4	40.0	H17 区 044 遺構面	
5	13	ポイント	安山岩	11.8	4.2	1.1	78.6	H-16 区 044（-60）	
5	14	ポイント	安山岩	8.3	5.8	2.7	118.2	C14 区トレンチ 1	
6	15	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.2	0.3	H17 区 044 遺構面	
6	16	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.4	0.4	I16 区 098（壁溝）	片脚欠
6	17	石鏃	黒曜石	1.3	1.1	0.3	0.4	E7 区遺構面（暗褐粘）	先端部・両脚欠
6	18	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.5	0.7	G8 区斜面より	両脚欠
6	19	石鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.6	H7 区遺構面	片脚欠
6	20	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.4	0.5	G11 区 091 Ｐ１（掘り方）	先端・片脚欠
6	21	石鏃	黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.5	H14 区 044(-30cm)	
6	22	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.6	D12 区トレンチ	片脚欠
6	23	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.4	0.6	D6 区暗褐粘	先端・片脚欠
6	24	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.7	G8 区斜面より	先端部・片脚欠
6	25	石鏃	黒曜石	1.6	1.6	0.4	1.0	J11 区遺構面	先端・片脚欠
6	26	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.9	E10 区遺構面	片脚欠
6	27	石鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.9	I9 区遺構面	
6	28	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.3	0.7	G7 区遺構面（整地層上面）	片脚欠
6	29	石鏃	黒曜石	2.3	1.6	0.4	1.4	077 下層	片脚欠
6	30	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.5	1.3	D11 区遺構面	
6	31	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.2	H13 区 044（床面）	
6	32	石鏃	黒曜石	2.7	1.7	0.5	1.3	ＳＸ２４	片脚欠
6	33	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.5	1.7	E2 区遺構面（暗褐粘）	両脚一部欠
6	34	石鏃	黒曜石	2.0	1.8	0.3	1.2	E2 区遺構面（暗褐粘）	先端部欠
7	35	石鏃	黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.4	J-10 区遺構面	
7	36	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	J-15 区遺構面	
7	37	石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.2	0.3	D-5 区遺構面	局部磨製
7	38	石鏃	黒曜石	1.6	1.0	0.2	0.4	C-00 区暗褐色粘	
7	39	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.5	I-12 区遺構面	先端欠損
7	40	石鏃	安山岩	1.6	1.4	0.3	0.6	J-9 区遺構面	欠損あり
7	41	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.7	I-9 区縄文トレンチ	
7	42	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.6	H14 区 044-120 黒色土	
7	43	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.7	E-7 区遺構面	片側欠損（少）
7	44	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.4	1.0	G-6 区遺構面	
7	45	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.2	0.5	I-12 区遺構面	
7	46	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.3	1.1	H-16 区	
7	47	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.3	1.0	H16 区 044 － 80cm	
7	48	石鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.6	C-2 区 001 暗褐粘 (-10-20)	先端欠損
7	49	石鏃	黒曜石	2.1	1.2	0.3	0.5	I-9 区遺構面	
7	50	石鏃	黒曜石	2.5	1.5	0.4	1.0	F5 区遺構面黄灰粘	
7	51	石鏃	黒曜石	2.3	1.6	0.3	0.9	G-7 区遺構面	
7	52	石鏃	黒曜石	2.0	1.9	0.3	1.3	ラベルなし	先端欠損
8	53	石鏃	黒曜石	1.4	1.7	0.4	0.7	J-9 区遺構面	先端欠損
8	54	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	3.0	1.0	J-10 区遺構面	基部片方欠損
8	55	石鏃	石英	2.1	1.4	0.5	0.8	N7 区 0112（上面北）	
8	56	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.3	1.1	H-14 044(-20cm)	基部片方欠損
8	57	石鏃	黒曜石	1.7	1.7	0.4	1.0	G-7 区遺構面	欠損あり
8	58	石鏃	黒曜石	2.4	1.6	0.3	1.0	D23 区 162 Ⅱ黒色粘	基部片側欠損
8	59	石鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.4	1.4	H-14 区 -100cm 黒色土	

図	No.	器種	石材	長	幅	厚	重量	出土位置	備考
8	60	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.3	0.9	J-9 区遺構面	片側欠損
8	61	石鏃	黒曜石	2.3	1.6	0.5	2.1	F23 区 044 黒色土	
8	62	石鏃	黒曜石	2.1	1.8	0.2	0.7	EF12 ～ 13 区遺構面	
8	63	石鏃	黒曜石	2.2	1.3	0.3	1.0	D12 区トレンチ 1	片側欠損
8	64	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.4	1.6	E23 区遺構面木材集積中	欠損あり
8	65	石鏃	黒曜石	2.5	2.5	0.5	2.4	H16 区 044 － 80cm	先端欠損
8	66	石鏃	黒曜石	2.4	1.9	0.5	2.2	H16 区 044 － 80cm	
9	67	石鏃	黒曜石	2.6	1.4	0.3	0.9	G-13 区 044 上面	剥片鏃
9	68	石鏃	黒曜石	2.0	1.9	0.6	2.4	C9 区 002-30cm	先端欠損
9	69	石鏃	安山岩	2.6	1.4	0.2	0.8	I-12 区遺構面	
9	70	石鏃	黒曜石	2.3	1.3	0.4	0.8	F23 区 161(木樋周辺)	
9	71	石鏃	黒曜石	2.6	1.7	0.4	1.6	F-6 区遺構面	
9	72	石鏃	黒曜石	2.2	1.5	0.3	0.9	H11 区 044-40cm	
9	73	石鏃	黒曜石	2.5	1.5	0.3	1.4	C-0 区 001 暗灰砂土 -60 ～ 70	
9	74	石鏃	安山岩	2.9	1.7	0.4	2.1	F 8 区遺構面	基部片側欠損
9	75	石鏃	黒曜石	2.9	1.8	0.4	1.3	H-9 区 032-P2 付近包含層	
9	76	石鏃	黒曜石	2.9	1.5	0.3	1.3	E23 区木材集積中	
9	77	石鏃	黒曜石	2.7	1.8	0.3	1.0	I8 区 0117 下層	2 分割
9	78	石鏃	安山岩	3.0	1.7	0.5	2.0	G-7 区遺構面	
9	79	石鏃	安山岩	3.7	1.3	0.3	1.6	I-12 区遺構面	
9	80	石鏃	黒曜石	3.2	1.9	0.5	2.2	G-11 区 044 底面	鍬形鏃
9	81	石鏃	安山岩	3.0	1.5	0.3	1.3	G-5 区遺構面	
10	82	石鏃	安山岩	2.4	2.5	0.5	2.2	I10 区 048(2.3 区)	
10	83	石鏃	黒曜石	2.8	2.2	0.4	2.2	E13 区遺構面	
10	84	石鏃	黒曜石	3.1	1.8	0.4	1.6	I12 区Ｐｉｔ７１９	片脚欠
10	85	石鏃	安山岩	3.0	2.0	0.4	1.7	北側落ち攪乱	
10	86	石鏃	黒曜石	3.1	1.8	0.4	1.3	F-8 区遺構面（整地層上面）	剥片鏃
10	87	石鏃	黒曜石	2.8	1.9	0.5	3.2	E23 区遺構面木材集積中	
10	88	石鏃	黒曜石	3.0	2.0	0.4	2.5	G-15 区 044(-60cm)	
10	89	石鏃	黒曜石	3.1	2.1	0.4	2.4	D-7 区暗褐色粘	
10	90	石鏃	安山岩	3.8	1.6	0.4	2.2	E-7 区遺構面（暗褐粘）	先端欠損
10	91	石鏃	安山岩	3.7	1.9	0.4	2.4	E-7 区遺構面（暗褐粘）	片側欠損
10	92	石鏃	安山岩	3.6	2.9	0.8	7.9	D22 区 162(ベルト)	片側欠損、未製品？
11	93	石鋸？	安山岩	3.8	3.0	0.7	10.4	H15 区 044-60cm	
11	94	石鋸？	黒曜石	4.5	2.7	1.3	13.3	F22 区 044 黒色土	
11	95	石鋸？	安山岩	5.0	3.6	2.4	29.8	H16 区 044(-80cm) 黒色土	
11	96	石鋸？	安山岩	4.6	2.9	1.2	17.6	E11 区	
11	97	石鏃未製品？	黒曜石	3.2	2.2	0.6	3.5	E-3 区池状遺構　暗灰粘	
11	98	石鏃未製品？	黒曜石	3.5	2.3	0.9	2.8	D12 区トレンチ 1	
11	99	石鏃未製品？	安山岩	3.1	1.9	0.7	3.9	D23 区 162(1 区) 黒色粘	
11	100	石鏃未製品？	黒曜石	2.1	1.9	0.5	1.6	I-16 区遺構面	
11	101	石鏃未製品？	安山岩	2.7	1.4	0.4	1.6	F23 区 161(木樋)	
11	102	石鏃未製品？	黒曜石	1.8	1.5	0.6	1.7	D23 区 162 Ⅲトレ暗青灰粘	
12	103	つまみ形石器	黒曜石	2.8	1.7	0.5	1.6	D-4 区 002(北平) 暗灰砂土 (-40)	
12	104	つまみ形石器	黒曜石	2.4	2.9	0.4	2.9	H16 区 044(西)-50cm 大木周辺	
12	105	加工痕剥片	黒曜石	2.6	2.5	0.4	2.9	H13 区 044-60cm	
12	106	加工痕剥片	黒曜石	2.2	3.0	0.4	2.9	F-23 区１６１（木樋周辺）	
12	107	UF	黒曜石	4.1	2.2	1.0	4.3	D12 区トレンチ	
12	108	UF	黒曜石	4.2	2.9	0.8	5.7	F22 区 044(黒色粘)	
12	109	剥片	黒曜石	2.7	3.4	1.1	7.1	G7 区遺構面 (整地層上面)	
12	110	縦長剥片 U F	黒曜石	4.4	1.4	0.6	2.5	F22 区 044 黒色粘	
12	111	加工痕剥片	黒曜石	3.2	1.7	0.7	3.3	H15 区 044 遺構面	
12	112	剥片	黒曜石	2.7	1.8	0.7	2.9	D-0 区 001 暗灰砂土 (-100cm)	欠損あり
13	113	UF	黒曜石	3.7	1.7	0.6	2.6	H14 区 044(-30cm)	
13	114	UF	黒曜石	4.0	1.6	0.8	3.9	E10 区 077(上面)	
13	115	石刃状剥片 UF	黒曜石	4.7	1.8	0.9	4.4	077 下層	
13	116	U F	黒曜石	5.0	2.1	0.7	6.0	H13 区 044(-110cm) 黒色土	
13	117	U F	黒曜石	3.6	2.7	0.7	6.1	H-15 区 044(-80cm)	半欠
13	118	石刃	黒曜石	7.5	2.6	0.8	11.9	H13 区 044(-80cm)	
13	119	石刃	安山岩	7.5	2.5	0.8	13.3	C0 区 001 暗灰砂土－ 40cm	

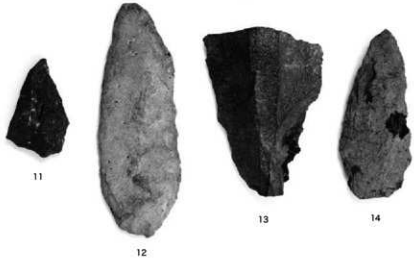
図	No.	器種	石材	長	幅	厚	重量	出土位置	備考
14	120	石錐	黒曜石	3.7	2.8	1.3	9.7	E10 区遺構面	先端欠
14	121	石錐	黒曜石	2.6	1.9	0.8	2.9	H17 区 044 暗灰粘 -70cm	
15	122	石核	黒曜石	3.6	3.7	0.8	10.1	E8 区 002（南半）暗褐粘	
15	123	石核	黒曜石	3.6	1.4	1.9	9.9	D13 区トレンチ 1 黒色土	
15	124	石核	黒曜石	3.3	3.6	2.1	20.2	H14 区 044(-70cm)	
15	125	石核	黒曜石	2.6	3.4	3.3	26.8	D12 区トレンチ 1	
15	126	石核	黒曜石	2.7	3.6	2.9	22.6	D23 区 162 Ⅲトレ（暗青灰色粘）	
15	127	石核	黒曜石	1.9	3.2	3.3	16.2	E ～ H 21 ～ 24 区遺構面（北側拡張区）	
16	128	石核	黒曜石	3.5	4.0	2.2	24.0	H18 区 044(トレンチ 1) 暗灰粘	
16	129	石核	黒曜石	1.7	2.8	4.2	26.2	E3 区遺構面（暗褐粘）	
16	130	石核	黒曜石	3.6	4.0	2.0	26.1	E3 区遺構面（暗褐粘）	原石の一部に剥離
16	131	石核	黒曜石	3.4	3.2	2.7	30.7	H14 区 044(-30cm)	
17	132	石核	黒曜石	2.3	4.8	2.6	25.1	E ～ F11 ～ 12 区遺構面	
17	133	石核	黒曜石	2.8	3.3	2.3	17.6	H12 区 044(-100cm)	
17	134	石核	黒曜石	1.9	4.0	2.7	13.8	E ～ F11 ～ 12 区遺構面	
17	135	石核	黒曜石	2.6	6.8	2.3	31.0	F-11 区 075（壁溝）	
18	136	スクレイパー？	黒曜石	2.0	1.8	0.7	1.7	E10 区遺構面	
18	137	スクレイパー	黒曜石	3.3	3.3	1.7	9.7	E8 区 040(壁溝)	石鏃未製品？
18	138	スクレイパー	黒曜石	2.5	2.0	1.0	3.6	I10 区遺構面	石鏃未製品？
18	139	スクレイパー	黒曜石	3.8	3.1	1.3	12.0	E8 区 002(黒色粘) -50	
18	140	スクレイパー？	黒曜石	3.5	1.9	0.7	4.6	F8 区遺構面（整地層上面）	
18	141	スクレイパー？	黒曜石	2.5	2.9	0.8	5.4	G7 区遺構面	
18	142	スクレイパー	黒曜石	2.1	2.9	0.8	3.5	D23 区 162 Ⅲトレ（暗青灰色粘）	
18	143	スクレイパー？	黒曜石	3.5	2.4	0.8	6.8	D12 区トレンチ 1	
18	144	スクレイパー	黒曜石	4.1	2.3	1.3	9.9	H-13 区 044 上面	
18	145	スクレイパー？	黒曜石	3.0	2.4	0.7	2.9	H18 区 044(遺構面)	
19	146	スクレイパー？	安山岩	5.2	2.8	0.8	12.5	E5 区遺構面	
19	147	スクレイパー	安山岩	4.5	4.5	1.6	28.8	H12 区 044 トレンチ 1 -80 ～ 100cm	
19	148	スクレイパー	黒曜石	5.6	4.1	1.1	21.7	F6 区暗渠中	
19	149	スクレイパー	安山岩	4.2	5.5	1.3	28.6	D4 5 区間ベルト中 2 層	
19	150	スクレイパー	安山岩	5.5	5.4	1.5	39.3	G15 区 044(-40cm)	
19	151	スクレイパー	安山岩	5.0	5.0	1.5	34.1	E7 区遺構面	石匙？
19	152	スクレイパー	安山岩	6.4	4.4	1.4	43.8	H18 区 044(遺構面)	再利用品？
19	153	スクレイパー	安山岩	4.9	5.5	1.1	28.4	D-12 区トレンチ 1	
19	154	スクレイパー	安山岩	2.8	6.4	1.5	24.9	H-18 区 044 トレンチ 1 暗灰粘	
19	155	スクレイパー	安山岩	4.1	7.4	2.1	46.0	E ～ H 21 ～ 24 区遺構面北側拡張区	
19	156	スクレイパー	安山岩	8.4	4.8	0.6	31.0	L-10 区遺構面	石匙？
20	157	スクレイパー	安山岩	6.3	6.1	1.1	39.9	H12 区 044 トレンチ 1 (-60 ～ 80)	
20	158	スクレイパー	安山岩	5.8	7.0	1.0	45.3	J-9 区遺構面 (-10)	
20	159	スクレイパー	安山岩	7.3	8.2	2.0	109.7	D-20 区 162 Ⅲトレンチ暗青灰粘	
20	160	石匙	安山岩	4.3	3.1	0.6	8.2	H-13 区 044 上面	半欠
20	161	石匙	安山岩	3.7	3.2	1.0	9.6	E9 区遺構面	基部のみ
20	162	石匙	安山岩	5.5	2.5	0.8	10.3	D-8 区 002 暗灰砂土 (-30)	
20	163	石匙	黒曜石	6.0	4.3	1.1	18.8	F-9 区遺構面	
20	164	石匙	安山岩	4.7	7.3	1.5	37.8	北側拡張区黒色粘質土層	
20	165	石匙	黒曜石	4.4	5.0	1.2	20.4	J16 区遺構面	
20	166	石匙	安山岩	7.4	10.4	1.5	87.7	E7 区遺構面（青灰粘）	一部欠
20	167	石匙	安山岩	10.8	3.1	1.0	39.7	H-16 区 044(-20 ～ 60) 黒色土	
21	168	石斧未製品	玄武岩	21.5	10.7	6.5	1,931.0	D-13 区 044 床面土器だまり No1-5	
21	169	石斧未製品	玄武岩	18.9	11.7	7.1	1,812.0	北側拡張区　黒色粘質土層	
21	170	石斧未製品	玄武岩	14.3	8.4	3.2	566.3	F-22 区 044 東岸	
21	171	石斧未製品	玄武岩	13.5	8.5	4.6	727.5	H-17 区 044(-80) 暗灰粘	刃部欠損
22	172	石斧未製品	玄武岩	15.5	9.1	6.0	1,145.7	H-18 区 044 トレンチ 1 暗灰褐	
22	173	石斧未製品	玄武岩	15.9	8.0	4.6	919.8	H-16 区 044(-80) 黒色土	
22	174	石斧未製品	玄武岩	14.2	10.1	5.2	1,158.9	H-18 区 044 トレンチ 1 暗灰粘	
22	175	石斧未製品？	玄武岩	13.3	6.3	4.0	502.0	H-18 区 044 トレンチ 1 暗灰褐	
22	176	石斧未製品	玄武岩	10.5	8.0	4.9	468.6	F-22 区 044 黒色粘	
22	177	石斧未製品	玄武岩	9.4	8.1	4.4	515.3	H-18 区 044 トレンチ 1 暗灰粘	刃部欠損
23	178	石斧未製品	玄武岩	17.4	7.8	3.2	761.4	H-15 区 044(-80) 黒色土	
23	179	石斧未製品	玄武岩	13.3	7.3	5.0	800.7	H-15 区 044(-50)	

図	No.	器種	石材	長	幅	厚	重量	出土位置	備考
23	180	石斧未製品	玄武岩	11.5	7.8	4.0	584.3	H-17 区 044(-70) 暗灰粘	基部欠損
23	181	石斧未製品	玄武岩	11.7	7.9	4.5	653.1	H-17 区 044(-70) 暗灰粘	刃部欠損
23	182	石斧未製品	玄武岩	9.1	6.9	4.4	419.1	H-12 区 044(-80)	
23	183	石斧未製品	玄武岩	7.3	5.7	3.6	224.6	H-17 区 044(-80) 暗灰粘	
24	184	両刃石斧	蛇紋岩	15.7	5.9	2.2	278.0	F-5 区遺構面	
24	185	両刃石斧	蛇紋岩	11.3	6.5	2.8	270.1	G-11 区 044（上面）暗灰粘	
24	186	石斧未製品？	安山岩	10.9	6.1	2.1	170.9	G-11 区 044（上面）暗灰粘	
24	187	両刃石斧	蛇紋岩	10.0	4.9	2.8	186.2	不明	
24	188	両刃石斧	蛇紋岩	9.7	5.5	2.3	164.6	H-15 区 044(-80) 黒色土	
24	189	両刃石斧	蛇紋岩	11.0	6.3	3.7	340.3	H26 区北西隅遺構面	
24	190	両刃石斧	蛇紋岩	12.5	5.5	2.4	178.5	D・E12 区遺構面	
24	191	両刃石斧	玄武岩	14.5	7.8	4.0	708.7	D-13 区トレンチ１（黒色土）上層	刃部欠損
24	192	両刃石斧	玄武岩	18.1	7.2	5.0	829.4	H-16 区 044(西岸大木付近)	
24	193	両刃石斧	玄武岩	14.0	6.5	4.0	681.6	D-23 区 162 暗青灰粘	
24	194	両刃石斧	玄武岩	12.5	7.0	4.7	637.4	SX001 土手 -101	
25	195	打製石斧？	玄武岩	8.2	6.4	2.1	170.4	H-17 区 044(-80) 暗灰粘	刃部欠損
25	196	打製石斧	玄武岩	7.4	6.5	1.8	143.0	H-16 区 044(-60)	
25	197	打製石斧	玄武岩	9.2	4.1	1.3	81.5	F-8 区遺構面	
25	198	打製石斧	安山岩	12.0	6.5	2.3	248.0	E-5 区遺構面（整地層）	
25	199	打製石斧	玄武岩	13.0	7.8	1.7	234.4	H-16 区遺構面	
25	200	打製石斧	玄武岩	12.7	6.4	2.4	289.6	D-10 区トレンチ１（上層）	
25	201	打製石斧	玄武岩	10.6	5.8	1.9	150.3	H-3 区遺構面	
25	202	打製石斧	玄武岩	8.2	4.7	1.9	83.7	F-23 区 044 黒色粘	石斧未製品？
25	203	片刃石斧	頁岩	9.1	5.1	1.5	138.8	D-00 区 001 暗褐粘	
25	204	片刃石斧	頁岩	6.1	2.4	0.7	23.4	H-17 区 044 遺構面	
25	205	片刃石斧	頁岩	7.9	4.3	1.2	87.7	H-14 区 044（-80）黒色土	
26	206	磨石・敲石・凹石	安山岩	12.4	6.7	3.2	437.8	G-13 区 044(-110) 黒色土	石斧転用
26	207	磨石・敲石・凹石	玄武岩	11.9	5.8	3.1	428.5	G-13 区 044(-110) 黒色土	石斧転用？
26	208	磨石・敲石・凹石	安山岩	13.3	7.0	3.6	670.0	E-3 区遺構面暗褐粘	石斧転用？
26	209	磨石・敲石・凹石	玄武岩	12.4	8.0	3.7	642.7	H-15 区 044(-80cm)	
26	210	磨石・敲石・凹石	花崗岩	11.4	10.2	3.1	619.1	G-12 区 044 トレンチ (-20 ～ 40)	
26	211	磨石・敲石・凹石	玄武岩	9.7	8.8	3.7	574.8	D-22・23 区遺構面（黒色土）	
26	212	磨石・敲石・凹石	花崗岩	8.5	8.1	5.0	527.1	C-3 区 001 暗褐粘	
26	213	磨石・敲石・凹石	花崗岩	9.5	8.0	6.4	692.2	H-17 区 044（西岸検出面）	
26	214	磨石・敲石・凹石	花崗岩	16.0	15.1	8.2	3,500.0	C-2 区 001 東半青灰粗砂 (-30 ～ 40)	
26	215	磨石・敲石・凹石	安山岩	11.8	8.8	2.3	388.7	H-13 区 044（-90）黒色土	
26	216	磨石・敲石・凹石	玄武岩	10.2	5.4	2.8	298.8	D-4 区 002(南半）暗褐色粘	
26	217	磨石・敲石・凹石	玄武岩	8.2	6.6	3.8	372.8	D-3 区 001 暗褐色粘 (-40 ～ -50)	
27	218	磨石・敲石・凹石	花崗岩	10.7	6.5	4.1	426.0	F-4 区遺構面	
27	219	磨石・敲石・凹石	花崗岩	7.8	6.2	4.7	339.6	001 暗褐色粘（-40 ～ 50）	
27	220	磨石・敲石・凹石	凝灰岩	10.7	7.4	3.7	535.5	D-4 区 002(南半）暗灰砂土 (-40)	
27	221	磨石・敲石・凹石	緑色片岩	9.2	8.4	3.3	368.0	H-15 区 044(-60)	
27	222	磨石・敲石・凹石	安山岩	10.1	7.0	3.8	534.1	E-0 区 001 西側整地層	
27	223	磨石・敲石・凹石	花崗岩	11.7	9.3	3.3	653.8	E-3 区 001 北トレンチ整地層	
27	224	磨石・敲石・凹石	安山岩	10.1	7.8	3.1	432.0	D-7 区 002 暗褐粘 (-20)	
27	225	磨石・敲石・凹石	凝灰岩	10.7	7.5	3.2	422.7	D-23 区 162 Ⅲトレ暗青灰粘	
27	226	磨石・敲石・凹石	花崗岩	12.4	10.0	4.5	915.5	044（1 面）H-14 区	
27	227	磨石・敲石・凹石	安山岩？	16.1	4.3	3.8	397.0	D・F-4 ～ 7 区遺構面	
27	228	磨石・敲石・凹石	花崗岩	12.1	5.4	3.7	428.2	D-5 区 002 暗褐粘	
27	229	磨石・敲石・凹石	玄武岩	6.7	6.5	6.0	416.1	044 黒色土	
28	230	石錘	滑石	4.4	1.7	1.3	12.1	H-18 区 044 遺構面	
28	231	石錘	凝灰岩？	4.9	3.1	1.5	37.1	H-17 区 044(-70) 青灰粘	
28	232	石錘	滑石	5.6	2.9	2.2	53.5	H-14 区 044(西岸）(-120)	
28	233	石錘	滑石	6.6	1.4	1.0	12.5	G-11 区遺構面	
28	234	石錘	滑石	6.0	2.2	1.4	29.2	E-8 区 002（南半）	
28	235	石錘	花崗岩	6.6	5.2	2.3	121.9	F-23 区 044 黒色粘	
28	236	石錘	安山岩	6.9	5.8	2.2	143.8	H-18 区 044 遺構面	
28	237	石錘	緑色片岩？	8.8	6.6	1.6	160.5	F-22 区 044（東岸）	
28	238	石錘	緑色片岩？	8.1	7.1	2.2	200.8	H-16 区 044(-80) 黒色土	
28	239	石錘	玄武岩	8.6	8.0	2.3	248.1	I-16 区遺構面	

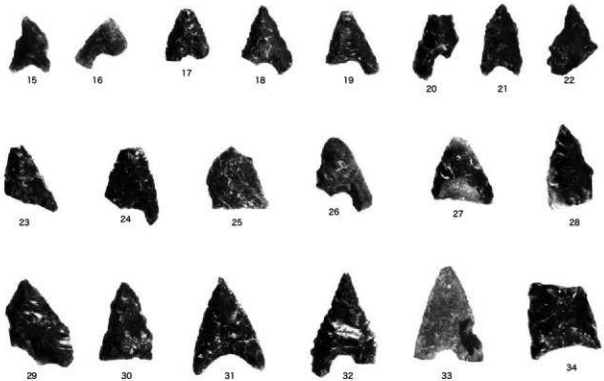
図	No.	器種	石材	長	幅	厚	重量	出土位置	備考
28	240	石錘	玄武岩	8.2	6.9	3.6	328.9	G-16 区 044(-40 ～ 50)	
28	241	石錘	玄武岩	9.0	7.6	2.1	233.6	H-12 区 044 トレンチ 1 (-100 ～ 120)	
28	242	石錘	滑石	7.2	5.3	4.0	235.6	H-14 区 044(-120)	
28	243	石錘	滑石	10.5	4.9	3.5	223.8	F-23 区 044 東岸	
28	244	石錘	凝灰岩？	14.0	9.8	3.6	758.7	H-17 区 044 西岸検出面	
28	245	石錘	安山岩？	17.8	9.6	3.4	1,114.7	H-13 区 044(-100)	
28	246	石錘	安山岩	9.8	3.8	2.8	196.7	G-16 区 044（西岸)(-20 ～ 30)	
28	247	有孔石製品	滑石	9.0	4.0	3.8	221.3	E-3 区遺構面	
28	248	有孔石製品	？	9.7	4.5	3.4	260.4	H-15 区西岸 044 土器だまり No.20	
28	249	有孔石製品	？	6.9	2.9	2.9	90.7	D-2 区 001 暗灰砂土 (-80)	
28	250	有孔石製品	凝灰岩系？	10.7	7.5	2.8	343.5	H-16 区 044(-50)	
29	251	石庖丁	輝緑凝灰岩	6.4	5.3	1.0	39.6	E-23 区 162(Ⅱトレ黒色粘)	
29	252	石庖丁	安山岩？	5.8	5.7	0.4	27.2	H-17 区 044 遺構面	
29	253	石庖丁	輝緑凝灰岩	8.8	4.3	0.7	36.4	H-17 区 044 遺構面	
29	254	石庖丁	？	5.2	3.8	0.4	13.4	D-7 区 002 暗褐粘 (-30 ～ 40)	
29	255	石庖丁	？	8.0	4.2	0.6	26.2	F-22 区 044(黒色粘)	
29	256	石庖丁未製品？	凝灰岩系？	9.0	5.6	0.8	71.5	H-17 区 044（遺構面）	
29	257	紡錘車	滑石	4.4	4.5	1.7	45.5	E-3 区 001 暗灰粘	
29	258	紡錘車	滑石	3.5	4.0	1.4	26.6	H-17 区 044 遺構面	
29	259	紡錘車	滑石	3.7	2.3	1.4	18.9	H-14 区 044(-70) 暗灰粘	
29	260	紡錘車	滑石	3.4	3.8	1.1	14.5	H-17 区 044(-70) 暗灰粘	
29	261	紡錘車	滑石	3.8	3.3	1.0	17.8	G-15 区 044(-40)	
29	262	紡錘車	滑石	3.6	3.6	1.3	32.3	D-5 区 002 暗灰砂土	
29	263	紡錘車	滑石	4.8	4.8	1.4	66.0	C-6 区暗灰砂土	
29	264	紡錘車	滑石	5.3	2.8	1.2	32.9	D-6 区 002 暗灰砂土 (-30)	
29	265	紡錘車	滑石	4.8	4.8	1.1	42.6	E-2 区遺構面	
29	266	紡錘車	滑石	4.5	4.5	1.5	60.2	D-7 区 002 暗灰砂土 (-30 ～ 40)	
29	267	紡錘車	滑石	3.7	3.7	1.2	28.1	H-17 区 044 遺構面	
29	268	紡錘車	滑石	3.1	3.2	1.0	14.9	D-1 区 001 暗灰砂土 (-60)	
29	269	紡錘車	滑石	4.7	4.2	0.7	22.6	G-6 区遺構面	
29	270	紡錘車	滑石	4.3	4.1	0.7	18.8	G-11 区遺構面	
29	271	紡錘車	滑石	4.1	4.2	0.4	13.8	H-13 区 044(-50)	
29	272	紡錘車未製品？	滑石	4.3	3.6	1.0	22.1	K-9 区遺構面	
29	273	石製品	滑石	2.8	2.7	0.6	7.1	G-13 区東岸 044 土器だまり No.101	
29	274	石製品	滑石	2.8	3.1	0.6	9.7	H-13 区 044(-30)	
29	275	土製紡錘車	―	4.7	4.9	1.6	45.7	D-6 区 002 暗褐粘下層	
29	276	土製紡錘車	―	4.1	4.1	2.1	29.1	F-23 区 044 黒色粘	
30	277	砥石	凝灰岩系？	8.1	5.8	1.8	117.7	C-4 区 002 東半暗灰砂土 (-60)	
30	278	砥石	粘板岩系？	8.4	3.0	1.7	66.4	H-16 区 044(-80) 黒色土	
30	279	砥石	？	8.9	2.3	1.6	61.7	F-6 区遺構面	
30	280	砥石	砂岩系	9.5	4.0	1.7	116.4	D-5 区遺構面（暗褐粘）	
30	281	砥石	砂岩系	9.9	3.4	1.5	89.7	E-8 区 002 北半暗褐色粘 (-20)	
30	282	砥石	砂岩系？	15.1	3.4	4.5	366.8	H-14 区 044 西岸 (-120)	
30	283	砥石	？	13.0	5.4	5.0	514.2	E-4 区遺構面（暗褐粘）	
30	284	砥石	砂岩系？	15.5	5.4	1.7	287.4	D-5 区遺構面	
30	285	砥石	安山岩	14.8	8.0	3.5	662.9	D-0 区 001 暗褐色粘 (-10 ～ 30)	
30	286	砥石	砂岩系	15.4	10.3	3.5	1,045.5	D-22・23 区遺構面（黒色土）	
30	287	砥石	安山岩系？	13.0	6.1	7.5	885.4	D-4 区 002（南半）暗灰砂土 (-70)	
30	288	砥石	凝灰岩系？	18.9	6.6	2.8	727.5	D-12 区トレンチ 1	
31	289	砥石	安山岩系？	20.4	10.2	6.8	2,144.7	H-14 区 044 西 (-100) 青灰粘	
31	290	砥石	砂岩系？	15.9	5.2	4.7	736.7	H-18 区 044 トレンチ 1 暗灰粘	
31	291	砥石	粘板岩系？	19.3	10.6	2.2	611.3	H-17 区 044（西岸大木）	
31	292	砥石	？	35.9	19.1	7.6	8,400.0	H-15 区 044(-80)	
31	293	砥石	砂岩	24.0	6.9	9.0	3,300.0	H-16 区 044(-80)	



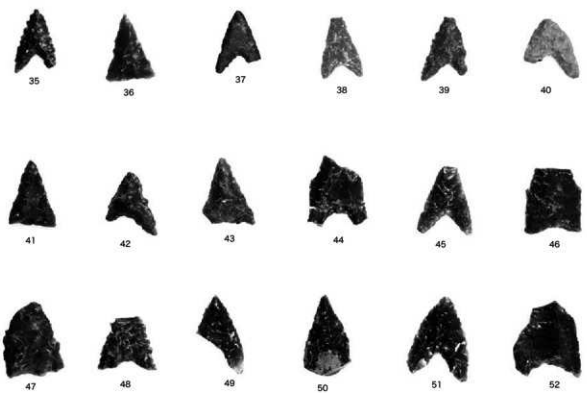
旧石器・ポイント1



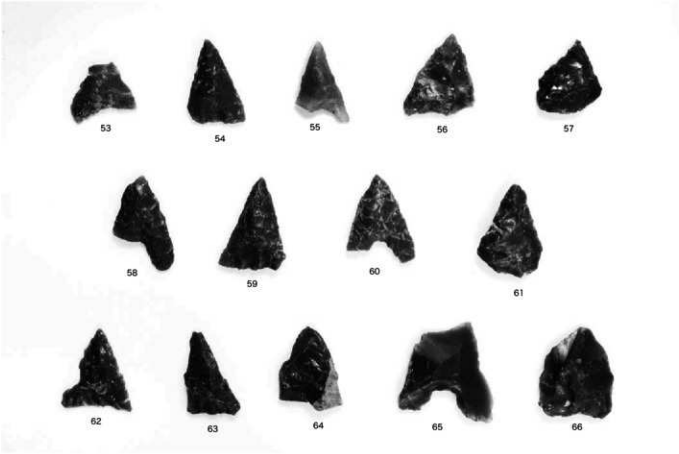
ポイント2


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

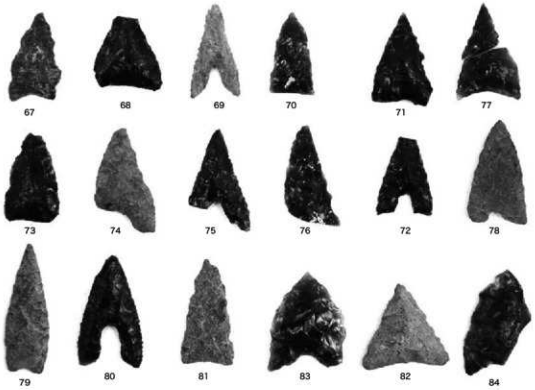
石鏃1


35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52

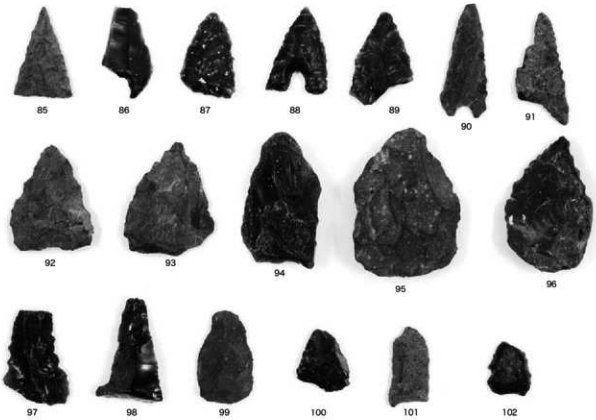
石鏃2


53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66

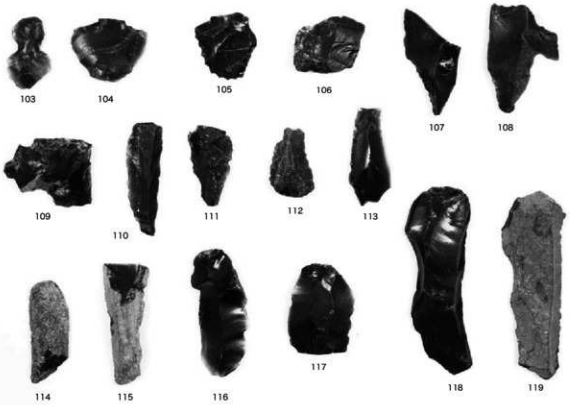
石鏃3


67
68
69
70
71
77
73
74
75
76
72
78
79
80
81
83
82
84

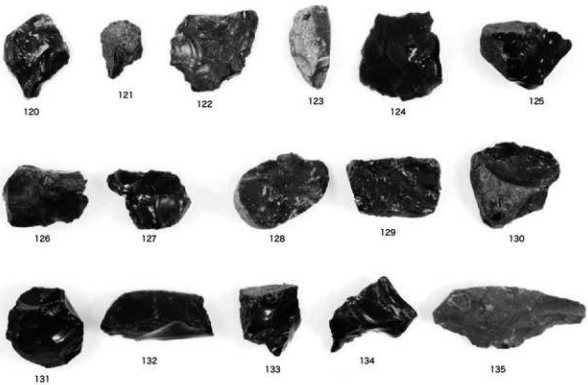
石鏃4



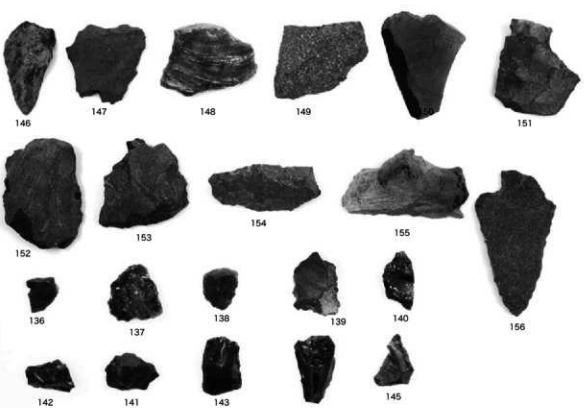
石鏃５・石鋸・剥片１



つまみ形石器・剥片２

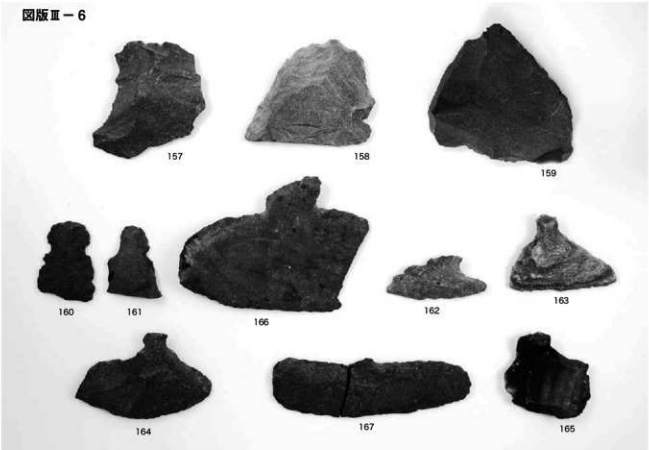


石錐・石核

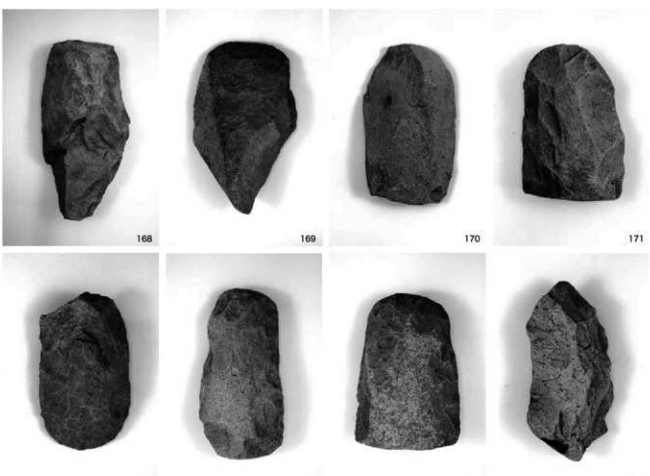


スクレイパー1

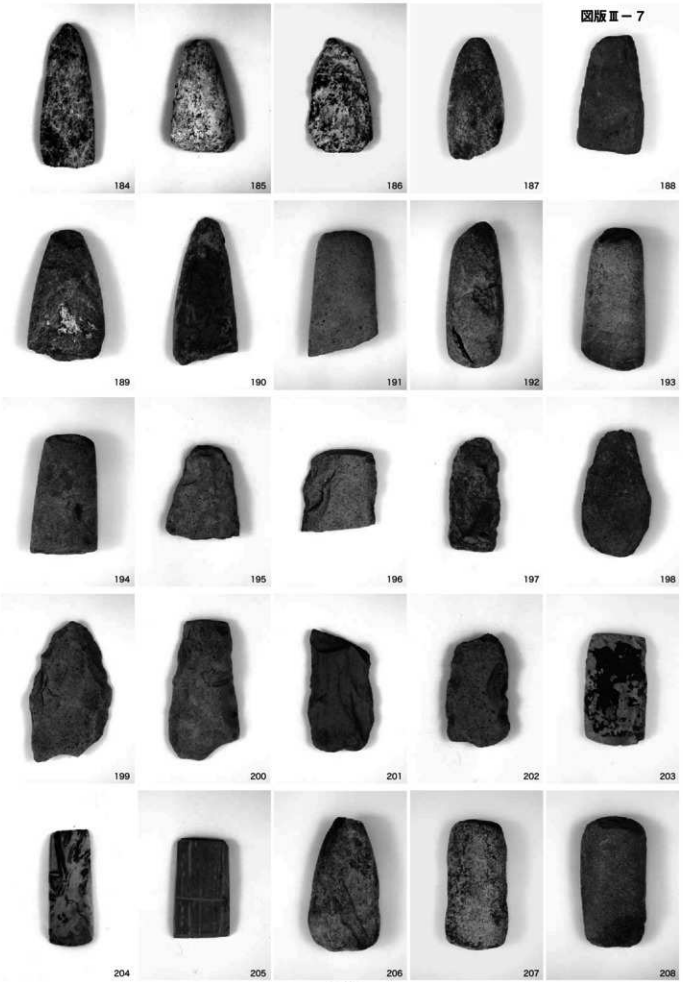
図版Ⅲ－6



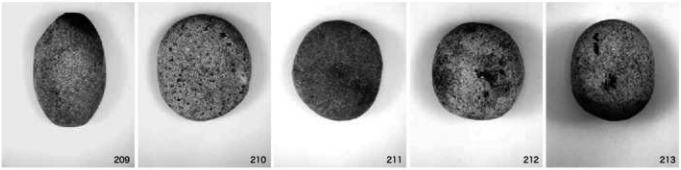
スクレイパー2・石匙



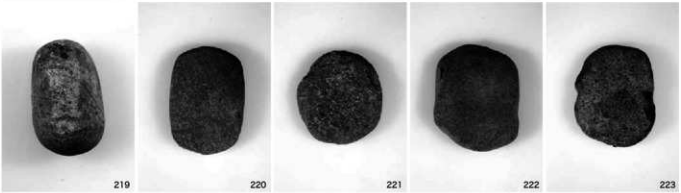
石斧1

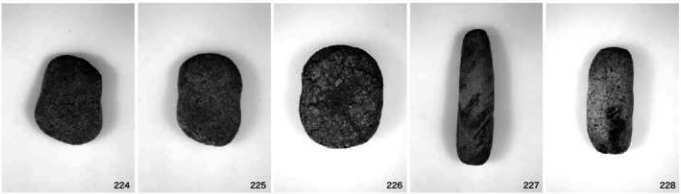

184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208

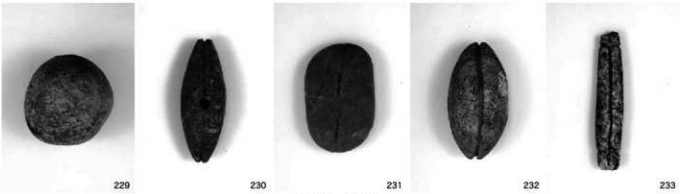
石斧2


209
210
211
212
213

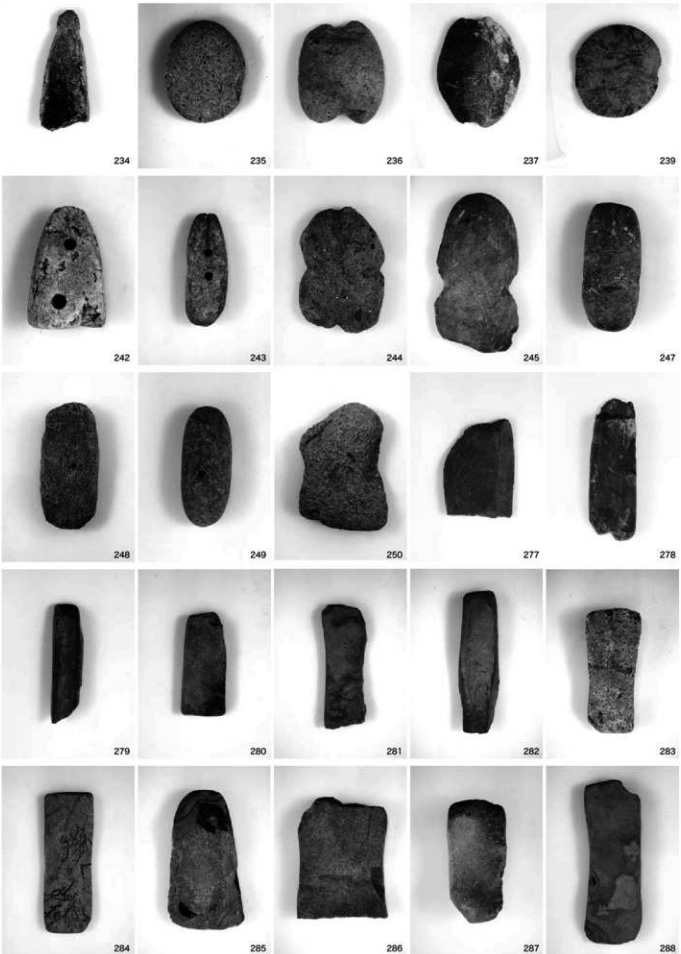
214
215
216
217
218


219
220
221
222
223


224
225
226
227
228

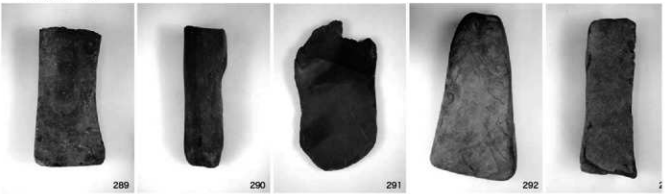

229
230
231
232
233

磨石類・石錘 1

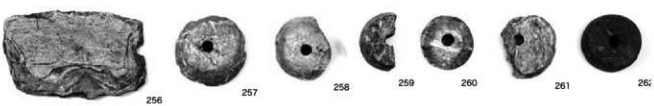

234
235
236
237
239
242
243
244
245
247
248
249
250
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288

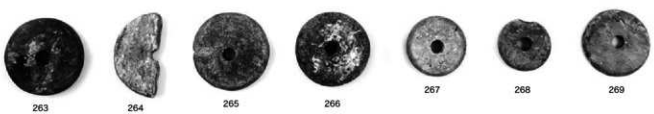
石錘2・砥石1

図版Ⅲ－10



砥石2





石庖丁・紡錘車・有孔石製品

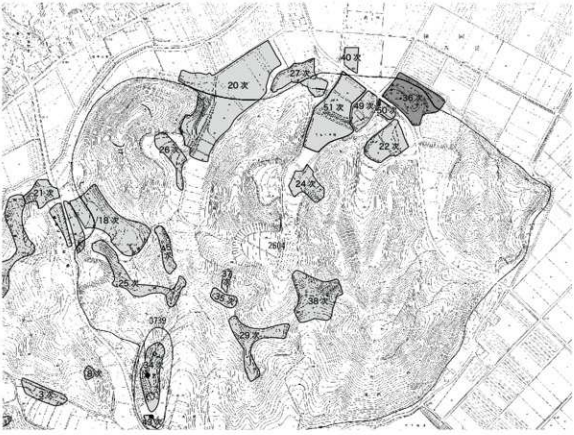
金属製品

第 36 次調査の報告

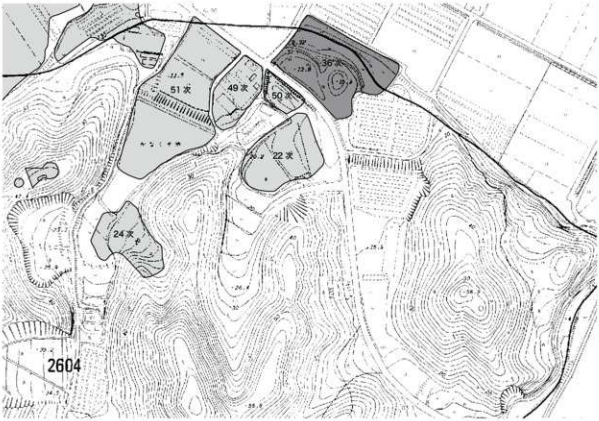
この報告は平成 20 年 (2008) の『元岡・桑原遺跡群 11』(福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告第 1011 集) で報告した元岡・桑原遺跡群第 36 次調査報告の続きである。『元岡・桑原遺跡群 11』では B 区に位置する経塚古墳墳丘とその頂部に位置する配石遺構の報告のみであったので、今回は前回報告できなかった A 区、B 区 (経塚古墳以外)、E 区について報告を行う。C・D・F・G 区は水田として造成したときにかなり削平されており、近世以前に遡る掘り込みは確認できなかった。

36 次調査区は当初、水崎山から伸びる丘陵先端部のうち新弁天橋から東泉寺を結ぶ道路から北東側の部分とその南東側に広がる谷部を合わせた 14000㎡を調査対象とした。そのうち東南側の谷部については平成 8 年度の試掘調査で 7 本のトレンチを入れた結果、遺構が存在しない可能性が高いとされていた。今回発掘調査を開始するにあたっては、細かく試掘トレンチを設定して地盤まで掘り下げたが、遺構・遺物ともに確認できなかった。その結果をふまえて谷部は調査範囲から外し、丘陵上の 6920㎡を本調査の対象とした。

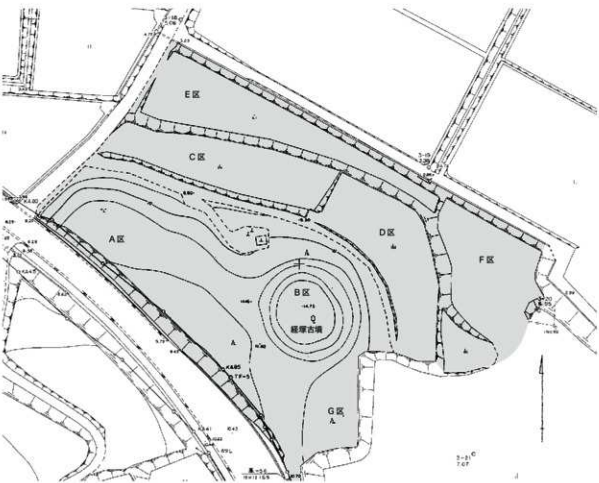
丘陵上には昭和 40 年代まで利用されていた近現代墓と直径 30 m前後の円墳である経塚古墳が存在することは調査開始前から判明していた。ただ A 区に関しては調査開始時前はブッシュに覆われており状況がよく判らなかったため、むやみに重機をいれて遺構を壊すのを避けるため試掘調査を行っておらず、近世～近代墓についての詳しい状況は不明であった。調査はまず森林組合による伐採



Ⅳ－1　調査区位置図 (1/8,000)



Ⅳ－2　36次調査区周辺図（1/4,000）



Ⅳ－3　36次調査区現況測量図（1/1,000）

を 2003 年 8 月から行い、それがほぼ終了した 9 月 1 日から調査を開始した。

36 次調査区は北東側に傾斜する丘陵の先端に位置する。経塚古墳を除く敷地全体が、南西側の高所から北東側低地と東側の谷に向かって段造成されており、いちばん西側の高所が近現代墓地、その下は水田や畑等に利用されていた。調査時にはこの各造成面を調査区として A 区 ~G 区まで設定した。調査の結果、各区で出土した遺構は下記のとおりである。

A 区　中世墓、近世 ~ 現代墓、古代製鉄関連遺構、経塚古墳周濠

B 区　経塚古墳 (5 世紀中頃)　中世配石遺構 (経塚古墳墳頂部)　近代墓（経塚古墳北側裾部）

C 区　土坑 (近現代)

D 区　土坑 (近現代)

E 区　竪穴式住居、掘立柱建物、柱穴群

F 区　遺構無し

G 区　A 区との境界に経塚周溝がわずかに残存

調査は経塚古墳頂部の表土剥ぎを行い石室の位置を確認すると共に、D・F・G 区など古墳下側にある平坦面の表土剥ぎから開始した。

調査の結果、B 区の経塚古墳と A 区の近世墓地は保存されることになった。経塚古墳は地域の首長墓としての価値や葺石等の遺存状態の良さ、また墳頂部の立石や周囲の配石遺構が古代末～中世の信仰を示すなど複合的な価値が認められたためと思われる。A 区は近世墓群であるが、盛土の下に経塚古墳の周溝や丘尾切断の痕跡が残されていることや、古代末～中世墓が存在する可能性が高い。近世墓としても、最終埋葬面の石製台座だけでも 300 基近く存在したことが推定され、盛土部分の中下層の墓を加えた総数は膨大な数になり、また部分的には台座の並びなどが良く遺存している。これら経塚古墳に関連する部分や古代末～中世にかけての祭祀関連遺構、大規模な近世墓の存在が保存につながったものと思われる。

Ⅰ．調査の記録

立地と環境

経塚古墳は水崎山から北東方向に向かって伸びる丘陵の先端の台地部分に位置する円墳である。舌状台地の先端とその下の水田との高低差は現状で 12 m を測り、古墳築造時は瑞梅寺川河口と元岡川が合流する湿地帯に面していたと思われるが、36 次調査区の東西両側には谷が開口しており、経塚古墳が位置する丘陵は湾に突き出す形であったと考えられる。谷を挟んだ西側に位置する丘陵の中腹には全長 24 m の前方後円墳である金屋古墳が、また谷を挟んだ南東側の丘陵頂部には全長 50 m の前方後円墳である塩除古墳が位置しており、これらは糸島半島東側の首長墓の系列と考えられている。経塚古墳は円墳ではあるが、墳丘の直径が約 30 m と大きく、首長墓の系列に入ると考えられる。

各調査区の概要

A 区の調査　A 区は経塚古墳の南西側に位置する。昭和 40 年頃まで元岡・桑原地区の墓地として利用されており、A 区全域に近世～近代墓が広がる。墓域は A 区のみではなく道路を挟んだ南側の 50 次調査区まで伸びており、1 辺約 60 m の隅丸方形の範囲に広がる (図版Ⅳ－ 3 の 5　道路の上側にみえる黒い木の列が近世～近代墓の南端を示す)。昭和 20 年頃から 36 次調査区南側に位置する 22 次調査区近辺に火葬場が設けられた。その火葬場にあがる道の分岐点が A 区東端にあり、その分

岐点近くから近代の瓦がまとまって出土した。お堂など小さな建物があったと考えられる。他には近世～近代墓の下から経塚古墳の周溝が、またＧ区との境界部分では経塚古墳の周溝底面で古代の鍛冶炉と鉄滓などの遺物が出土している。

Ｂ区の調査　経塚古墳とその頂部に分布する古代末頃の配石遺構については報告済みであるので、今回は墳丘北西側に位置する近代墓について報告する。Ｂ区の近代墓は桑原集落から山手に抜ける小道によりＡ区の近世～近代墓と分かれているが、Ｂ区の墓壙掘方や近世甕棺はＡ区の墓群とほぼ同様の形態を呈しており、Ａ区近世墓との差はみられない。ただ副葬品はＡ区墓群のほとんどが副葬品を持たず、偶に出土しても盃１点やキセルの吸口などであるのに対し、Ｂ群は数珠や水晶玉、磁器碗などを副葬しており、Ａ区墓群とは差が見られた。当初この副葬品の違いについては良く判らなかったが、Ｂ区のＢ201 甕棺墓から名前を彫り込んだ蓋石（木蓋の抑え）が出土し、また、Ｂ区現代墓の囲いに使用されていた花崗岩の切石に同一人物の名前と身元を彫り込んだ墓石が転用されていたことから、Ｂ区近代墓群の性格が判明した。墓石に刻まれた斎藤氏は江戸時代を通して元岡村の領主であった一族でる。斎藤氏は江戸時代には福岡城下に居を構えていたが、明治になって元岡村に居を移しており、第２次大戦後まで元岡村に居住していた。江戸時代の墓は福岡城下の菩提寺などにあると考えられることから、このＢ区墓群は明治時代以降の家族墓と思われる。

Ｃ区の調査　Ａ区の北側、Ｂ区の西側に位置し、標高は７ｍ前後を測る。耕作土直下で花崗岩の盤になり、水田造成の際にかなり削られている。全体の表土剥ぎを行ったが、遺構は確認できなかった。

Ｄ区の調査　Ｂ区の北東側に位置し、標高は８ｍを測る。経塚古墳の墳丘北端にあたる。経塚古墳の周溝が北側まで回っていたとすると、周溝北端が巡るはずであるが、近現代に大きく削平されて植樹されたため、木の根の痕跡ばかりで遺構は検出できなかった。表土から須恵器器台や埴輪片が出土したが、近年に古墳墳丘から崩落したものと考えられる。

Ｅ区の調査　Ｃ区の北東側に位置し、標高５ｍを測る。水田面造成時にＣ区との境を削って平坦面を作り出している。調査区は東西 80 ｍ、南北 20 ｍを測るが、遺構が検出されたのは北西隅のみで、東半部分と南側の大半は近代の造成でできた平坦面であり、遺構は確認できなかった。西北部で７世紀末～８世紀前半の竪穴式住居と掘立柱建物群が出土した。丘陵落ち際の斜面を削った狭い平坦地に築かれた集落であるが、鉄滓や羽口などの遺物と共に炭化物や焼土、炉壁などが出土しており、鉄生産に関わったものと考えられる。

Ｆ区の調査　Ｄ区の東側に位置し、標高４ｍを測る。以前は養鶏場の一部であり、現状は平坦に造成されている。表土の風化からみて、全体が大きく削平されている。遺構は確認できなかった。

Ｇ区の調査　Ｂ区の南側に位置し、標高 10 ｍを測る。表土剥ぎの段階で削平により遺構は無いものと思われたが、Ａ区との境界部分で経塚の周溝がわずかに残っていた。底面に地山の花崗岩が赤変した炉が２基みられ、鉄滓や８世紀頃の遺物が出土したため、古代に経塚古墳周溝底面の平地を利用して製鉄を行っていたことが判明した。

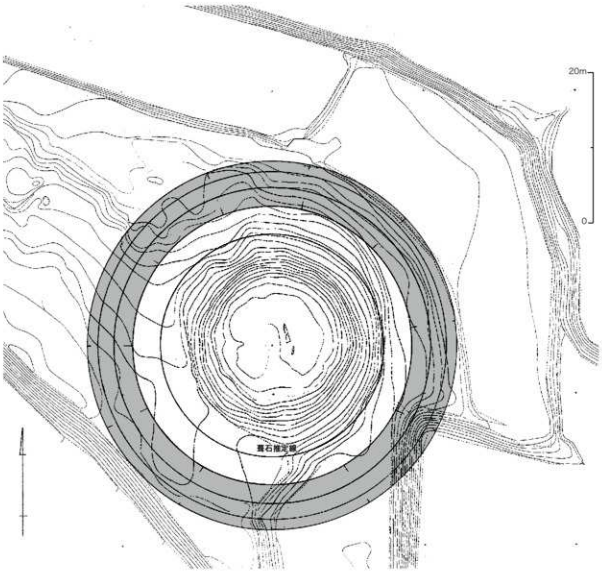
Ⅱ．調査の報告

１．Ａ区の調査

調査開始時には、南側の道路造成工事の際の廃土がＡ区全体を 80㎝程の厚さで被っており、近世～近現代墓地の基壇はほとんど埋もれて見えない状態であった。また、Ａ・Ｂ区間の道路も完全に埋まった状態で福岡市の土地公社が作成した地図（Ⅳ－３図）でも一続きの丘陵として描かれている。

Ⅳ－4　A区全体図（1/200）

Ⅳ－5　A区遺構番号図（1/200）　※遺構番号の頭のAは省略



Ⅳ－６　Ａ区経塚周溝範囲図（1/500）

古墳時代の遺構

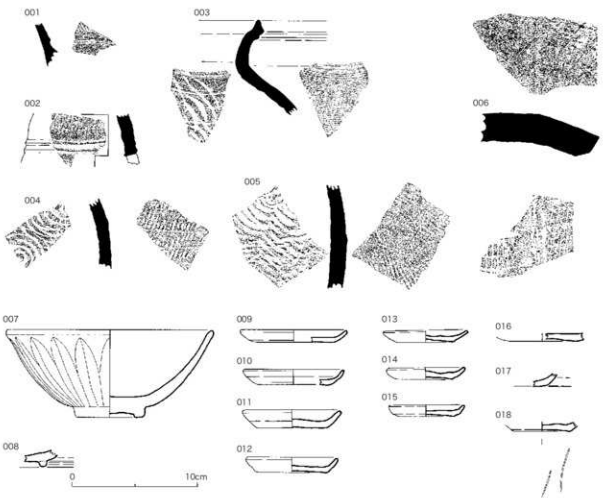
経塚古墳墳丘

経塚古墳は当初から保存になる可能性が高かったことから、葺石を壊さないようにするため、墳丘自体にはほとんどトレンチを入れていない。頂部に設定した小トレンチと、南側道路に削られた壁面の土層観察から、墳丘全体が赤褐色土による盛土で築かれていることが判明した。この赤褐色土は36次の丘陵を形成している花崗岩が風化したもので、かなり赤味が強い。頂部の狭いトレンチの観察では、ほとんど他の土を含まないため分層は不可能であった。B区近代墓により削られた壁面土層では墳丘の下に旧表土が残っており、墳丘は現状で3.6 m程盛土していることが判明した。盛土の範囲はやや楕円を呈しており、長径30 m弱を測る。葺石の範囲ははほぼ盛土の範囲と重なっており、葺石下端部付近に黒色の旧表土が帯状に巡るのがみえる。B区近代墓地に削られた断面の土層（図版Ⅳ－３の４）では旧表土から下に掘り込みがあることから、墳丘築造以前の遺構が存在することが判明した。

経塚古墳周溝

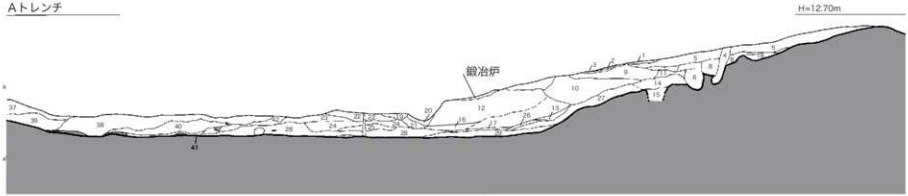
調査開始時に経塚古墳の南側裾部にトレンチを入れたところ、36 次と 50 次の間の道路造成以前に使われていた道路が埋没しているのを確認した。この道路は古墳の墳端に沿っていたため、周溝を拡張して道路を築いた可能性が考えられ、周溝自体は完全に破壊されたものと思われた。しかし、A 区の表土を取り除いたところ、A 区の北側壁面に溝らしき土層が確認されたため、周溝の存在と範囲を確認することと近世墓群下の古い遺構を探すことを目的として、A 区全体に 9 本のトレンチを設定した。その結果、丘陵を削った平坦面と考えていた A 区のほとんど全域が盛土であることが判明した。第Ⅳ－ 4 図では周溝外縁の推定線を入れた他、盛土の範囲をアミで表している。盛土は周溝外縁の西側に 30 m近く広がるが、南側の A トレンチ付近ではほとんど広がらない。西側の盛土部分は経塚古墳墳丘の盛土の際の土取りで掘り下げられたと考られるが、丘陵尾根にあたり高くなっている A トレンチ付近ではなく、墳丘南西側のやや低地を削り平坦にしているのは、古墳築造のための作業スペースを得るためであろうか。周溝最下層からは炉と一緒に 7 世紀末～ 8 世紀初頭の遺物と鉄滓が出土した。12 次調査などでは 7 ～ 8 世紀頃の大規模な製鉄関連遺構が出土しているが、ここ 36 次でも周溝底部の平坦面で鉄製産を行っていたことが判明した。その際に周溝を外側に拡張して平坦面を広げた可能性も考えられるが、ほとんどは古墳築造時に伴う掘り下げと考えている。

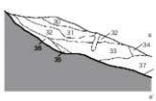
盛土は道路を挟んだ南側の 50 次調査では確認されておらず、墓の時期も 36 次の様な 18 世紀前



Ⅳ－7　A 区古墳時代～古代出土遺物（1/3）

Aトレンチ





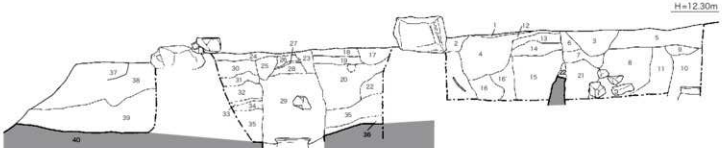
1　赤褐色土
2　赤褐色土
3　灰褐色土　砂少量含む
4　褐色土　木の根による攪乱
5　茶褐色土　5 cmほどの角礫を含む　近世墓盛土
6　褐色土　赤褐色ブロック（径1 cm）をやや層理状に含む
7　赤褐色土
8　褐色土　赤褐色土ブロック（5 mm）をわずかに含む　近世陶磁片含む
9　暗褐色土　1 cm?赤褐色ブロックと2 mm?白色砂をいずれも少量含む
10　褐色土　黄褐色土が主で、暗黄褐色粘質土と赤褐色土のブロックを含む
11　茶褐色土
12　黒褐色土　暗茶褐色土が主で、黒褐色土ブロックを含む
13　暗黄赤褐色粘質土
14　赤褐色土
15　暗褐色土
16　暗黄褐色粘質土
17　褐色土　炭化物片少量含む
18　暗黄褐色土
19　暗灰褐色粘質土
20　赤茶褐色土　灰色土含む　溝にたまった泥状
21　灰色土　赤褐色土含む　砂礫含む
22　暗茶褐色土
23　灰色細砂と茶褐色土の薄い互層　雨による堆積
24　暗褐色土　やや粘性を帯びる
25　暗褐色土　赤褐色土ブロックをわずかに含む
26　暗黄褐色粘質土
27　暗赤褐色土　地山土が少し汚れている
28　淡赤土　褐色土含む　古代
29　灰色粘質土　古代
30　暗茶褐色土
31　黒褐色土　礫をわずかに含む　近世陶磁片含む
32　暗褐色土
33　黒褐色土　黒色土ブロックを全体に含む　溝の堆積か
34　茶褐色土　近世柱穴か
35　赤褐色土
36　暗褐色土　炭化物と赤褐色土ブロックを全体的に含む
37　暗褐色土
38　黒褐色土　やや粘性を帯びる　溝の堆積か
39　暗褐色土　黄褐色土ブロックを含む
40　茶褐色土　灰色砂粒と赤褐色土ブロックを全体的に含む
41　灰色砂　水成堆積
42　暗茶褐色土　40層と似る

※古代7～8世紀頃墳丘を削って周溝を広げ、そこで製鉄などの作業を行っている。その後上が堆積した後、28層の上面から焼土坑が複数掘り込まれている。　5～10層や30・31層は近世陶磁を含み近世墓に伴う盛土である。

0　2m

Ⅳ－8　A区トレンチ土層図1（1/60）

Cトレンチ



Cトレンチ
1　暗茶褐色土
2　暗茶褐色土　近世墓掘方
3　茶褐色砂質土　赤褐色土の小ブロックを多く含む
4　茶褐色土　小礫・炭化物・赤褐色土を全体的に含む　近世墓掘方
5　暗赤褐色土　赤褐色土ブロックを主とし、茶褐色土と灰色土のブロックを多量に含む　近世盛土
6　茶褐色砂質土
7　赤褐色粘質土　地山の上が若干ずれている　盛土か
8　暗茶褐色土　赤褐色土ブロックと小礫を含む　近世土坑
9　暗赤褐色土　赤色粘質土ブロックを含む
10　暗赤褐色土　細かな赤褐色粘質土ブロックと茶褐色土の粒を含む　近世畝粗基理土
11　赤色粘質土ブロック（1～5㎝）を多量に含み、その間に灰色土ブロックや茶褐色土を層理状に含む　近世の盛土か
12　茶褐色土　白色細砂含む
13　暗赤褐色土　白色細砂含む
14　暗褐色土　1～2㎝の赤褐色土を含む
15　暗赤褐色土　赤褐色粘質土（1～10㎝）を多量に含む　やや層理的　間に茶褐色土や灰色土ブロックを含む　近世墓掘方
16　茶褐色土　赤褐色土ブロック（2～3㎝）を含む　木の根による攪乱か　16' 16層よりしまり強い
17　暗赤褐色土　炭化物含む　木の根多い
18　暗赤褐色土　白色細砂を含む　近世盛土
19　暗茶褐色土　2～3㎝の礫砂を多量に含む　赤褐色土小ブロックをわずかに含む
20　茶褐色土　赤褐色土ブロックを多量に含む　灰色土粒を全体的に含む。近世墓掘方
21　暗赤褐色土　細かな赤褐色粘質土を主とする　黄色土ブロック（未風化の地山ブロック）と灰色土ブロックを含む
22　暗茶褐色土　層の下ずは赤色土ブロックを左下がりの層理状に含む
23　暗褐色土　赤褐色土ブロックをわずかに含む
24　茶褐色土　白色細砂を多量に含む　近世盛土
25　暗褐色土　赤色粘土、灰色土ブロック、茶褐色土ブロックを含む
26　暗黄褐色粘質土
27　暗黄褐色粘質土　少し赤味おびる
28　暗黄褐色粘質土
29　暗赤褐色土　赤褐色土を主とし、灰色土ブロック（1～3㎝）を多量に含む　近世畝粗基掘方
30　赤褐色土　盛土
31　暗褐色土　粗砂多く含む
32　茶褐色土　小礫をわずかに含む　層下に灰色土粒子を含む
33　粗色土ブロック
34　茶褐色土　層上平に灰色土粒を含む
35　暗褐色粘質土　36層との境に層状の暗赤色土ブロックを含む　表土化中の土壌が溝の中に崩落したものである　古墳周溝
36　褐色土　古墳周溝内埋土
37　暗茶褐色土　細砂多く含む
38　暗褐色土　赤褐色土小ブロック含む　左下がりの層状を呈す
39　暗赤褐色土、暗赤褐色土のブロックで水平堆積である　白色細砂を多量に含む
40　赤色土　地山

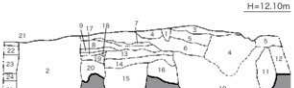
D-1 トレンチ

D-1 トレンチ
1　暗褐色土　近世畝粗基掘方
2　暗褐色土　白色砂を多量に含む　近世墓掘方
3　褐色土　白色砂多量に含む　小礫含む
4　褐色土　茶褐色土ブロック（1㎝）と白色砂を含む
5　暗黄褐色土　白色砂を多く含み、炭化物片含む　近世墓掘方
6　暗赤褐色土　地山土のブロック
7　暗茶褐色土　木の根による攪乱
8　暗茶褐色土　白色砂、礫を多量に含む　近世畝粗基掘方
9　赤褐色土　地山土のブロック　近世墓掘方
10　暗赤褐色土　白色砂を多量に含む　近代盛土
11　暗赤褐色土　近代盛土
12　赤褐色土　近世墓掘方
13　暗赤褐色土　近世盛土
14　暗褐色土　白色細砂を多く含む　近世盛土（一時的に表土化）
15　黒褐色土　白色砂を多く含む　旧表土
16　暗赤褐色土　白色砂を多量に含む　近世盛土
17　黒褐色土　白色砂を多量に含む　近世盛土（一時的に表土化）
18　暗褐色土
19　暗黄褐色土　地盤　層の上部が表土化
20　暗茶褐色土
21　暗黄褐色土　地盤が風化して一部が表土化しつつある

N－9　A区トレンチ土層図2（1/60）

D-2 トレンチ

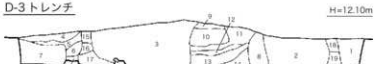
H=12.10m



D-2 トレンチ
1　暗褐色土　柱穴状遺構掘方
2　褐色土　層のほぼ暗褐色ブロックを多く含む　近世墓掘方
3　明茶褐色土　白色砂を多量に含む　近世盛土
4　茶褐色土　赤褐色土ブロックと炭化物を多く含む　近世盛土
5　黒褐色砂質土　白色砂を多く含む　近世盛土（表土化）
6　黒褐色砂質土　白色砂を多く含む　炭化物少量含む　近世盛土（表土化）
7　赤褐色土　盛土
8　暗褐色砂質土　近世盛土（表土化）
9　褐色砂質土
10　茶褐色土　近世墓掘方
11　赤茶褐色土　褐色土と赤色土のブロックを含む　盛土か
12　黒褐色土　炭化物多量に含む　近世墓掘方
13　暗褐色土　赤色土ブロック含む
14　暗褐色土　黄褐色土小ブロックをわずかに含む　近世盛土（一時的に表土化）
15　暗灰褐色土　茶褐色土ブロックを多く含む　近世墓？掘方
16　暗褐色土　やや粘質を帯びる　一部表土化
17　暗茶褐色土　少し表土化が進む？
18　暗茶褐色土
19　茶褐色土　赤色土ブロックを含む。近世盛土
20　暗褐色土　暗黄褐色土ブロック含む　表土化
21　茶褐色砂質土　白色砂を多く含む
22　暗赤褐色土　盛土
23　暗灰褐色土　旧表土
24　暗黄褐色土
25　黄褐色土

D-3 トレンチ

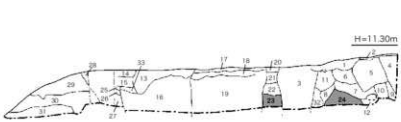
H=12.10m



D-3 トレンチ
1　暗赤褐色土　褐色土ブロック含む
2　暗赤褐色土　近世墓掘方
3　赤褐色土　近世墓掘方
4　褐色砂質土　粗砂を多く含む　盛土
5　赤褐色土　盛土？
6　暗赤褐色土
7　暗赤褐色土　白色砂をわずかに含む
8　暗赤褐色土　上半は白色砂を多く含む　下半は褐色土ブロックを含む
9　赤褐色砂質土　白色砂を多量に含む　盛土
10　赤褐色砂質土
11　赤褐色土　盛土
12　白色細砂
13　暗茶褐色土　14層との境に炭化物層を挟む　白色砂と暗赤褐色土ブロックを含む
14　暗赤褐色土　赤褐色土ブロックを多く含む
15　赤褐色土　15～17で基礎掘方
16　暗赤褐色土　炭化物片含む
17　暗赤褐色土　白色砂を多量に含む
18　暗褐色土　旧表土
19　暗黄褐色土
20　暗褐色土　旧表土

F トレンチ

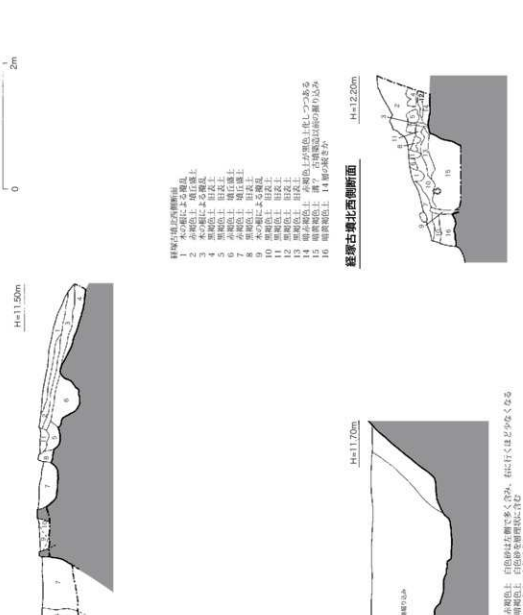
H=11.30m



Fトレンチ
1　暗赤褐色土　白色砂を多く含む
2　暗赤褐色土　茶褐色ブロックを含む
3　赤褐色土、暗黄褐色土、灰褐色土が互層をなす　近世～近代墓掘方
4　暗赤褐色土　地山の赤褐色土をブロックで多量に含み、その間に褐色土を含む
5　暗褐色土　褐色土ブロックを含む　近世掘り込み
6　褐色土
7　暗褐色土
8　暗褐色土　旧表土？
9　暗褐色土　褐色土ブロックを含む
10　暗黄褐色土
11　茶褐色土　細かな赤褐色土と白色砂を含む
12　暗灰褐色粘質土
13　褐色砂質土　細砂と粗砂を多量に含む
14　茶褐色土　細砂と粗砂を多量に含む　盛土か
15　暗褐色土　白色細砂含む
16　褐色土　赤褐色土、茶褐色土、暗黄褐色土のブロックが層状に堆積　近世～近代墓掘方
17　褐色土　白色細砂を多量に含む　盛土
18　暗黄褐色土　白色細砂・粗砂を含む　盛土？
19　茶褐色土　赤褐色ブロック（1～2 cm）や褐色土ブロックをやや層上に含む　近世墓掘方
20　褐色土　白色細砂含む　盛土
21　褐色土　赤褐色土ブロック、白色細砂を層上に含む
22　暗褐色土　旧表土
23　暗黄褐色土　地山
24　暗黄褐色土　地山
25　褐色土　赤褐色土の小ブロックを含む
26　褐色土
27　暗褐色土　旧表土
28　黒褐色土　赤褐色土ブロック含む　近世遺構埋土
29　黒褐色土　粗砂を全体に含む　表土
30　暗褐色土　29層が乗上される前の旧表土
31　暗黄褐色土　地山
32　暗褐色土　赤褐色土の粒を全体に含む
33　黒褐色粘質土

0　2m

IV－10　A区トレンチ土層図3（1/60）



Ⅳ－11　A区トレンチ土層図４（1/60）

半まで遡るものは見られない。A区に盛る土を得るため山側の50次調査区を削り、その結果できた平坦面が最終的に墓域として整備されたものと思われる。

トレンチ土層　Aトレンチ土層(Ⅳ－8図)のアミ掛け部分は花崗岩の地山で経塚古墳の周溝掘方に近いものと思われる。底面直上の28層から古代の遺物や鉄滓が出土し、底面や12層上面で炉が確認されており、7世紀末から8世紀頃に周溝を拡張して平坦面を築き、小鍛治などが行われていたと考えられる。　Cトレンチ土層(Ⅳ－9図)は保存が決まった近世墓の台座を破壊しないことと近世土壙掘方のため分かりにくいが、35･36層は溝の底面近い堆積で、北側道路断面で確認できた周溝断面との比較からも、この2層が古墳時代の周溝と考えられる。AトレンチやDトレンチでは最下層付近で7世紀末～8世紀の遺物が出土するが、ここでは出土しない。古代の鉄生産関連の遺構は周溝全体を削って平坦面を造るような大規模なものではなかったのであろうか。

近世墓以前の遺構　A区全面に近世から昭和30年代までの墓域が広がる。残された台座の数の多さからは集落全体の集団墓と考えられるが、墓として使われ始めた年代は不明である。

調査区南側の道路造成時の廃土がA区の上に80cmほど被っていたが、その中から古代末から中世頃の遺物が多く出土した。須恵質の平瓦片など古代末まで遡る遺物の中に、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類の完形品が含まれている。青磁碗など貿易陶磁の完形品は今津の勝福寺西側に広がる『今津古墓』などで出土しているが、近隣では元岡・桑原遺跡群第18次調査で遺物や掘立柱建物がまとまって出土しており、ここ36次は18次などと関連した中世墓の副葬品である可能性を考えたい。

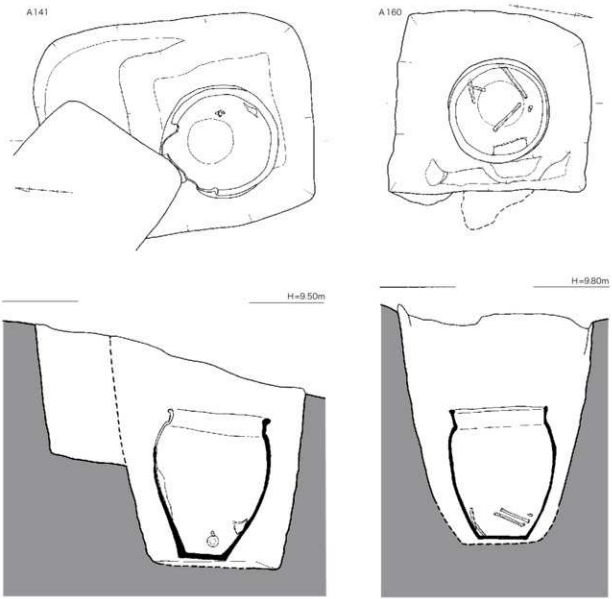
『元岡・桑原遺跡群11』で記述したように、経塚古墳の頂部には石室天井石を利用したと考えられている大型の板石が2枚建てられており、この立石は戦国時代に水崎城で戦死した武将の墓として、近年まで信仰の対象となっていた。立石の周囲の墳頂部全面には10～40cm前後の礫を並べた配石遺構が40基程分布している。この配石遺構群は板石の東側と西側では構造が異なる。保存となったため十分な調査ができなかったが、トレンチをいれた2基では下部構造などは確認できなかった。現時点では土壙墓や祭祀に関連する敷石の可能性をあげておきたい。配石遺構の石の隙間からは土器小片が少数出土しているが、その中で時期が分かる最も古いものとしては11世紀後半頃の白磁片が出土していることから、すくなくともその時期までは遡るものと考えられ、A区で古代の須恵質瓦などが出土していることを考えると、墳丘の周囲には古代の建物やそれに伴う古代墓が存在した可能性が高いものと思われる。

A区盛土に設定したトレンチで古代～中世の遺構を確認するため土層観察を行ったが、トレンチ底面は近世後半の甕棺墓や土壙墓の掘方によりほとんど地山が見えない状態で、古代～中世に属する確実な遺構は確認できなかった。しかし、盛土の西端近くでは近世の土壙墓と掘方の形状が異なり、平面形が長方形を呈す土壙墓が数基出土しているが、そのうちのA150から出土した土師皿は遺存状態が悪いため断言はできないものの中世まで遡る可能性が考えられる。

ただ古代墓が存在するにしても、その後に続く中世後半の遺物が現時点では全く見られないことを考えると、中世前半で廃絶したものと考えられる。

近世墓

近世墓の造営が始まった時期は現在のところ不明である。盛土部分に入れた試掘トレンチで土層観察を行ったところ、現地表面(盛土上面)と地山の面から掘り込んだ墓壙を確認した他、途中1～2面の掘り込み面を確認した。保存のため墓壙は掘り下げなかったので埋葬主体が不明なものもあるが、甕棺の掘り込みは現地表面か、もしくは地表面の1面下からの掘り込みに限られ、最下層の地山の

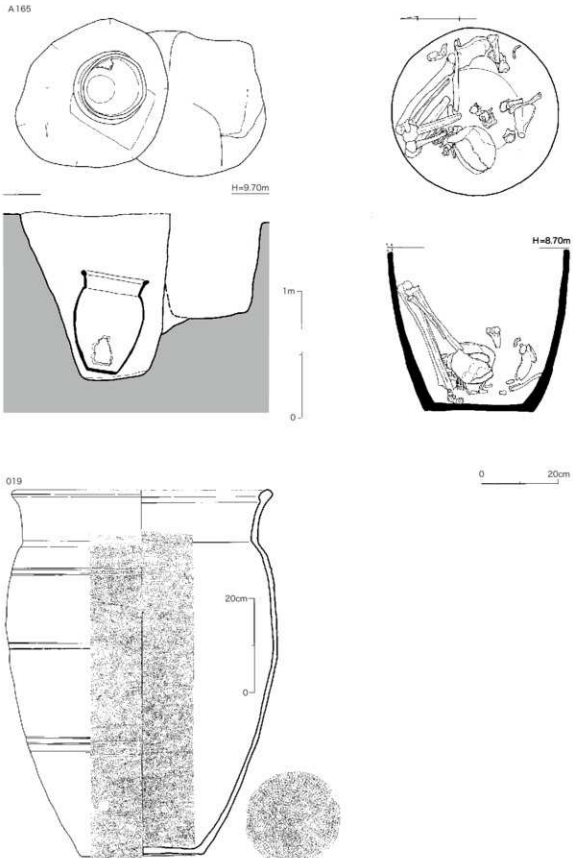


Ⅳ－12　A 141・A 160 実測図（1/20）

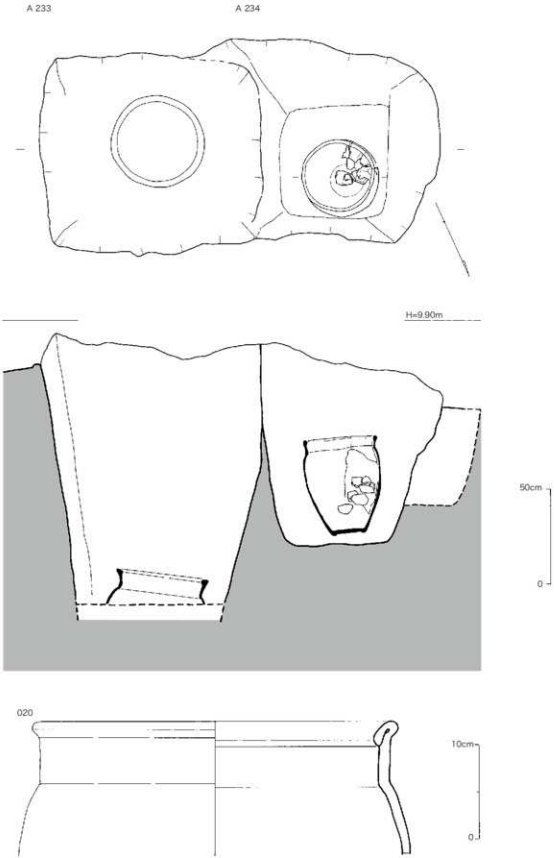
面から掘り下げた墓壙では甕棺を使用したものは無かった。土層は部分的に緩く傾斜する堆積とその上に水平堆積が被る部分があり、これはゆるやかな山型を呈す堆積が、低い土饅頭型形の盛土 (が崩れて埋まりかけている) を表し、上の水平堆積は崩れた土饅頭の上に土を盛って整地を行い、平坦面を作り出し、新たに埋葬を始めたのを示すと思われ、その整地を繰り返す事によって、古墳築造によって掘り下げられた周溝が、古墳築造以前とほぼ同じ高さまで嵩上げされたと考えられる。

試掘トレンチ内の観察では、盛土の中・下層で検出した墓壙では石の墓標や基壇は出土していない。石製の墓標を使用するようになって、各家の墓域の固定化などがすすんだ結果、盛土による埋葬面の嵩上げが中止されたものと思われる。

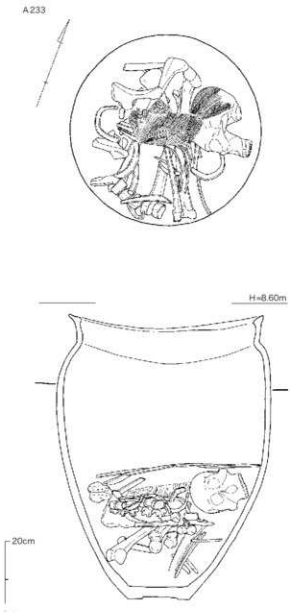
近世墓が今の高さまで盛土されて石製墓標が使用され始めた時期であるが、残存している墓石で最も古いものは享保 15 年 (1730 年) で、その後は宝暦 (1751 ～ 1763 年) があることから、遅くとも 18 世紀中頃までには盛土が終了して石製墓標の使用が始まったことが判る。このことから盛土下の墓壙は 18 世紀前半やもしくは 17 世紀後半頃までは遡るものと思われる。



Ⅳ－13　A 165 実測図（1/30・1/10・1/8）



Ⅳ－14　A 233・A 234 実測図（1/20・1/4）



Ⅳ－15　A233 人骨出土状況（1/10）

近世墓の構造には　地上構造物と地下構造物があり、地上構造物としては

1．墓標 (墓石や基壇、土饅頭タイプの盛土)、2．付属施設 (板碑、木製卒塔婆など) があり、地下構造物には埋葬施設 (土壙、木棺、近世甕棺、火葬骨壺など）がある。

1). 地上構造物　墓石とその墓石を乗せる台座が出土した。墓石の出土は少ない。残された台座から近現代の墓は北面しているのに対し、近世以前の台座はほぼ全てが西側を向く。

(1)　墓石

a). 加工石　切石で戒名などの彫り込みがある墓石はほぼ撤去されており、原位置を留めたものはない。そのほとんどは場外に持ち出されている。若干残されたもので年代が判るもののほとんどは昭和のものであったが、近世に遡るものが 5 基あったので報告する。

1　享保 15 年墓石　1730 年で最も古い墓石である。墓石は高さ 80㎝、幅 50㎝、厚さは推定で 40㎝弱を測る。円礫で正面中央を一段下げて平坦に削る。文字は 3 行で右側から『享保十五年』中央に『法名　釈尼妙□』(□は門か)、左に『□三月一二日』と刻む。裏面に文字があるかどうかは不明である。

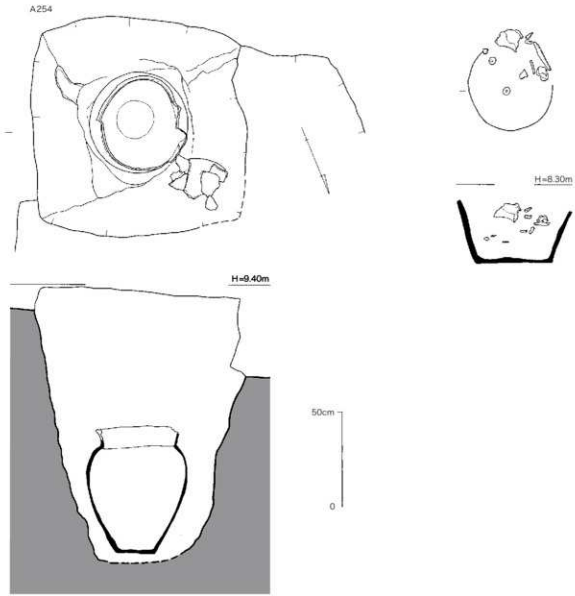
2　宝暦墓石 (図版Ⅳ－ 7 の 2)　横倒しで墓の台座として使われていた。文字が不鮮明なため、何年かは不明で 1751 ～ 1763 年のいずれかにあたる。中央に『釈妙□信女』と刻む。

3　享和 3 年墓石 (図版Ⅳ－ 7　3 と 4)　1803 年の年号をもつ。上端が丸みを持ち、正面は縁を残して一段掘り下げてから『三亭義要信士』の戒名、右側面に『享保三癸亥年』、左側面に『一二月朔日』、裏面に『中村權三』の名を彫り込んでいる。

4　文政 8 年墓石 (図版Ⅳ－ 7　5)　1825 年の年号をもつ。形態は享和 3 年のものとほぼ同じである。正面に『妙宴信女』の戒名、側面に『文政八□酉年十月四日』を彫り込む。

5　嘉永 7 年墓石 (図版Ⅳ－ 7　6)　1854 年の年号をもつ。花崗岩の円礫に『嘉永七寅九月念六日　宗貞助　母』の彫り込みがみられる。

墓石には切石で直方体にしたものと、平坦面を削り出した割石や円礫を使用したものがある。直方体で上端を丸く仕上げたものが主流であるが、昭和の年号を刻んだ墓石でも円礫から切石まで様々な形態が残されており、個人や家族の嗜好で決められたものと思われる。



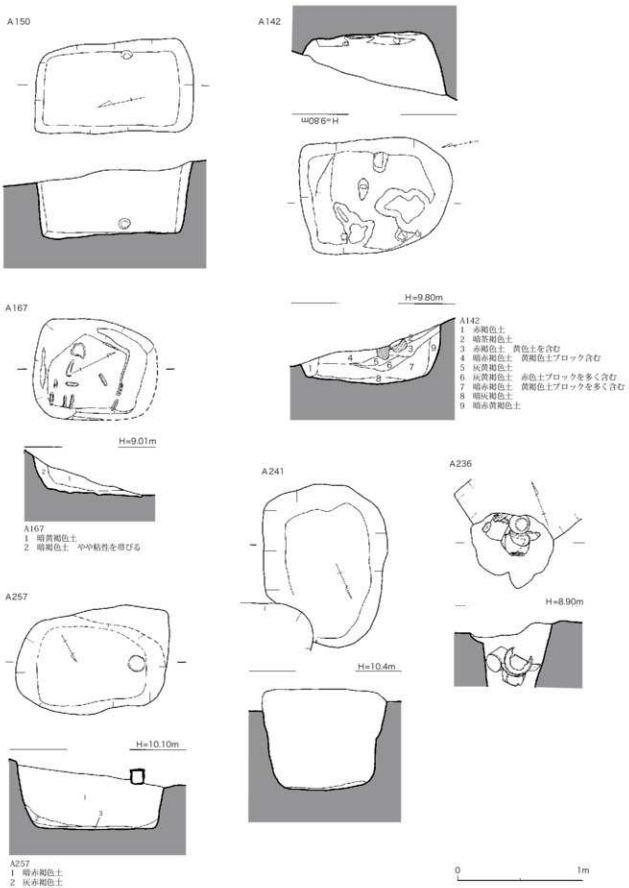
Ⅳ－16　A 254 実測図（1/20・1/10）

b). 自然石 (Ⅳ－31･32 図と図版Ⅳ - 8・図版Ⅳ－9の1～4)　自然石を使用し、文字などの彫り込みのない墓石がA区ほぼ中央から西側のD-2トレンチの南側を中心に分布する。大型のものはA122を中心に径6m程の範囲内にまとまっており、ある特定集団の墓と考えられる。

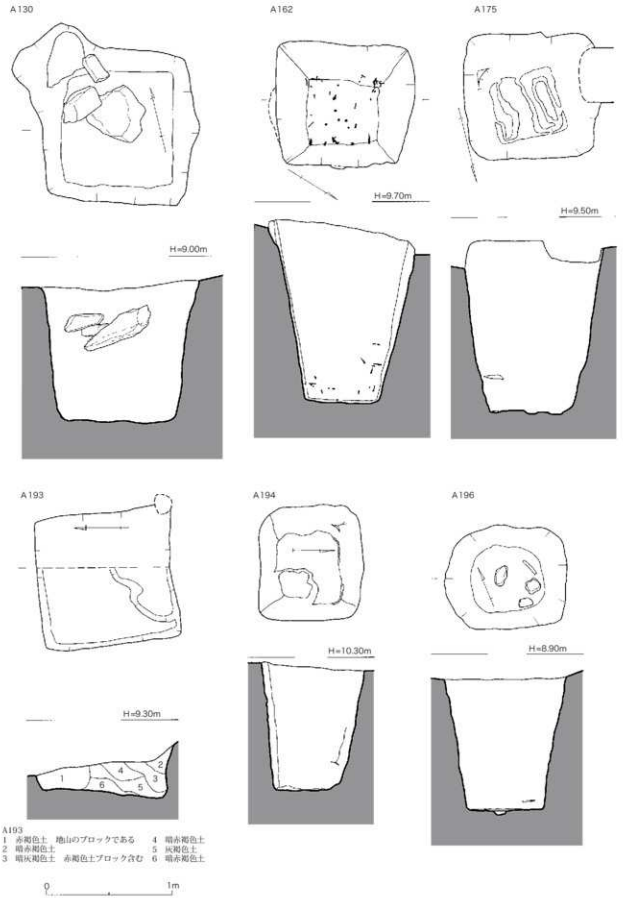
⑵. 台座

石製台座には様々なタイプが見られる。

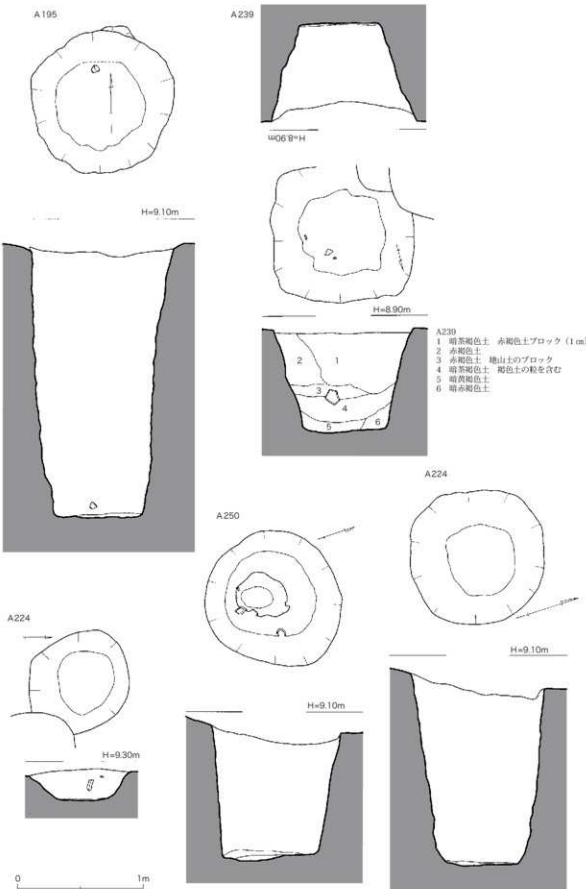
石組の墓はA区全体に造られていたと考えられるが、西側や東端部では台座の多くが撤去されて残っていない。中央部北側も道路に近いところは破壊が著しい。台座が良く残っているのはBトレンチからD1～3トレンチの間のA区東側から中央南側の範囲で、狭い通路とそれに沿って造られた墓の形態が良く判る。平面図で見ると、5～7m前後の方形の区画らしきものがあり、それぞれの区画は主軸が若干異なると思われるものの、台座が完全に残っていないため断定はできない。台座が残っている範囲は面積にするとA区の半分強で、残された台座は130基前後を数える。面積からの



Ⅳ－17　A区土壙墓1（1/30・A236は1/10）



Ⅳ－18　A区土壙墓２（1/30）



Ⅳ－19　A区土壙墓３（1/30）

単純計算でいくと、本来は 300 基近い墓石が存在していたと考えられる。

台座には A. 長方形基壇、B 長方体の切石を組んだもの、C 方形切石に墓石をのせるもの、D-1 切石ではない一枚石を使用したもの、D-2 切石ではない石を組み合わせたもの、E その他がみられる。

A　長方形基壇 (Ⅳ－ 20 図)　A035・A009 は 1 m を超える範囲を石で囲っており、個人の墓とは考えにくい石製の基壇である。A035 は 51 次調査も含めた近世墓地のほぼ中心に位置している。A009 はその 10 m ほど北側に並ぶように位置している。板碑などを建てた祭祀関連の基壇の可能性も考えられる。A242 は基壇の可能性もあるが、やや窪地に立地する無記名墓石群の背後に位置していることから、石垣の可能性が高いと思われる。

B　小型の切石を組んだもの (Ⅳ－ 21・22 図) A028・A038・A050 などは長方体の切石で墓石を囲んで台座としたもので、現代でも良くみられる形態である。墓標を囲む切石が一重の物や二重の物があり、ほとんどが 1 辺 1 m 弱であるが、二重の台座には 1 m を超えるものも見られる。前面に花立て等が付くものと付かない物がある。C ～ D トレンチ間に多くみられる。

C　方形切石 (Ⅳ－ 22・23・24 図)　方形切石を中央に置いて墓石を乗せるタイプで、切石単体の物と、他の石と組み合わせるものがある。単体は数は少なく A041 の様に花立てを掘り込むものも見られる。切石は一辺 50㎝前後のものが多い。2 段のものがあるが、上面に乗せる石は下段と同じ程度のものと 8 ㎝ほどの薄い板石を使用したものがある。石の表面は研磨しているが、下面や上面の石と接する部分は摩擦で動きにくくするためか、鑿の痕跡を残す。A201 は上の墓石が横転した状態で残っていた『文政八年墓石』であることは鑿痕跡等から判明しており、19 世紀前半に作られていたことがわかる。

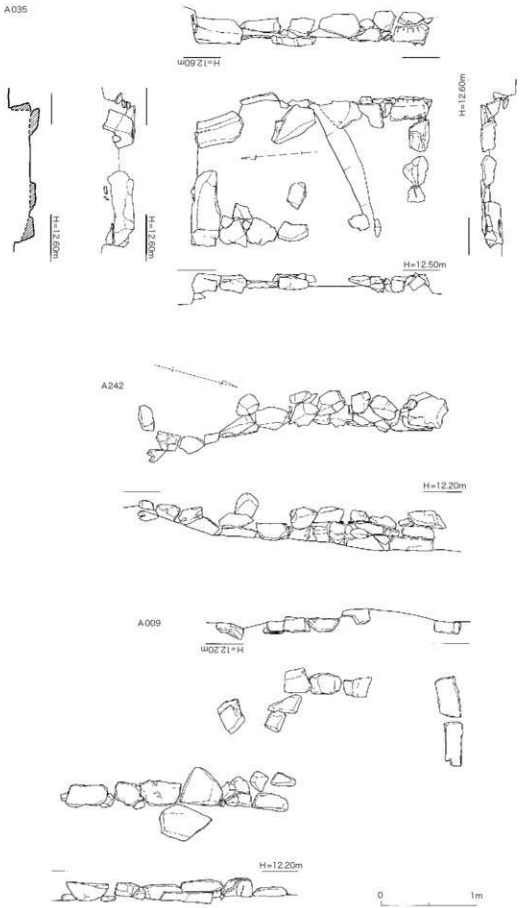
D-1　切石ではない石を一枚で基壇として使用したものである (Ⅳ－ 26・28 図)。長径 50 ～ 70㎝程の角礫が多く使用されているが、少数ではあるが円礫も使われている。上面は平坦で面取りを行っている石もあるが、切石のように全体を加工してはいない。上に小型の石がのるものも見られる。

D-2　切石でない石を中心に置いて墓石の台座として、その周囲に他の石を配したものである。(Ⅳ－ 25 図 A044・A049・A191、Ⅳ－ 27 図 A058・A066、Ⅳ－ 29 図 A111・A011) これも角礫を主としており長径は 50 ～ 70㎝程度が多い。円礫が少数見られるのも D-1 と同じである。A111 は周囲に石を配する形ではなく、台座の安定のため下に礫を咬ませたものである。A111 は上に墓石をはめ込むための窪みが見られるが、この形状をとるものは非常に少なく、後はⅣ－ 25 図の A071 で見られる程度である。

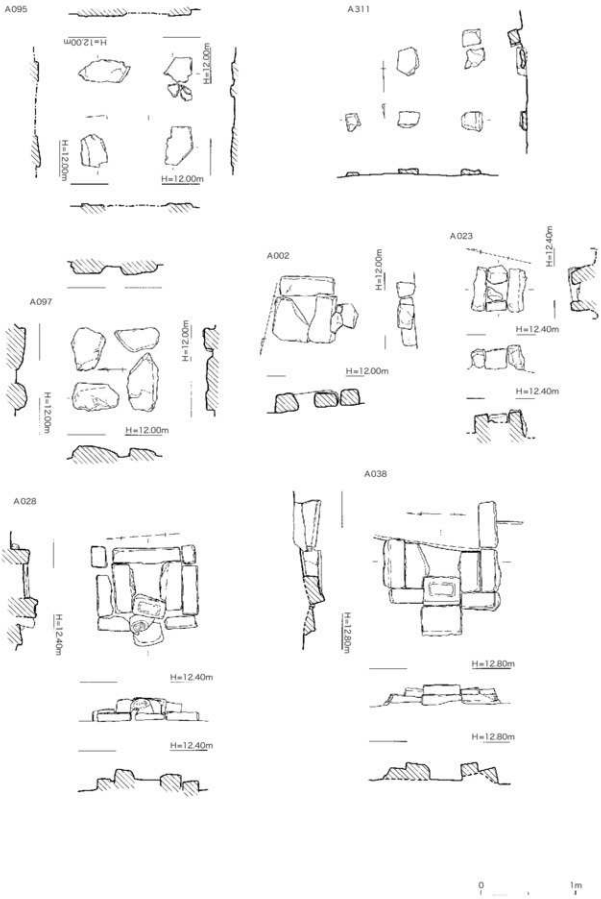
A 区では多くの墓標が出土しているが、その中では中央にまとまって分布する自然石の墓石が特徴的である。当初近世墓群の中でも古い形態かと思われたが、全体が盛土により嵩上げされていることや、他の台座と同様に 5 m 前後で 1 つのまとまりがあることから、一集団の墓群であると考えられる。ただ、他の近世墓の台座がほぼ西向きに立てられているのに対し、平坦面が西を向かないものがあるなど、他の集団の墓との差は大きいと思われる。

2). 土饅頭型盛土　前述したように土饅頭形の墓標は、盛土内ではその可能性がある土層を確認したが、現地表面の墓としては造られていない。調査区の西端の A287(図版Ⅳ－ 6 の 7) のように方形の低い盛土上に握拳大よりやや大きめの石を積んだものもある。

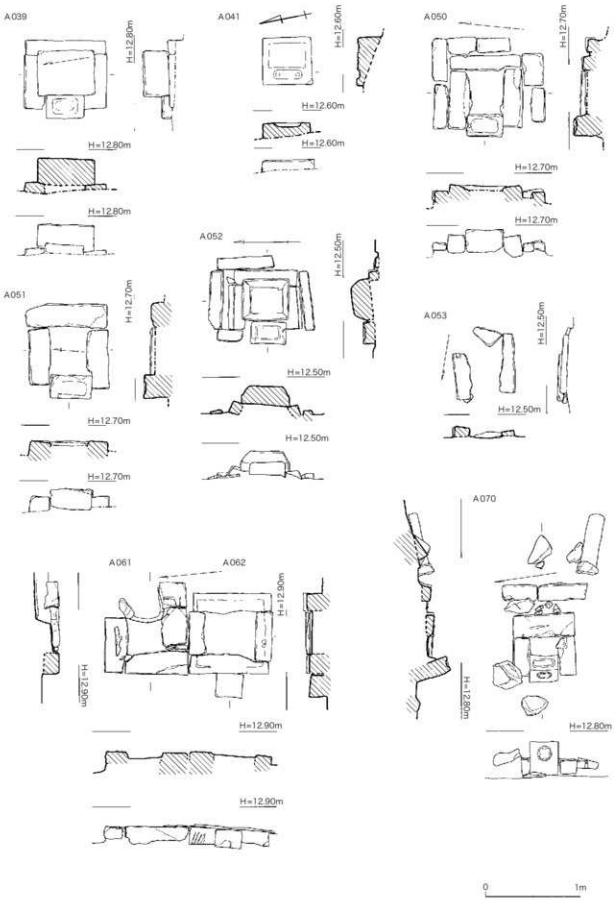
2. 板碑は出土していないが、墓石と共に廃棄された可能性もある。調査区内では砂岩製で同一個体と思われる仏像の頭部と胴部が離れて出土した (Ⅳ－ 33 図)。



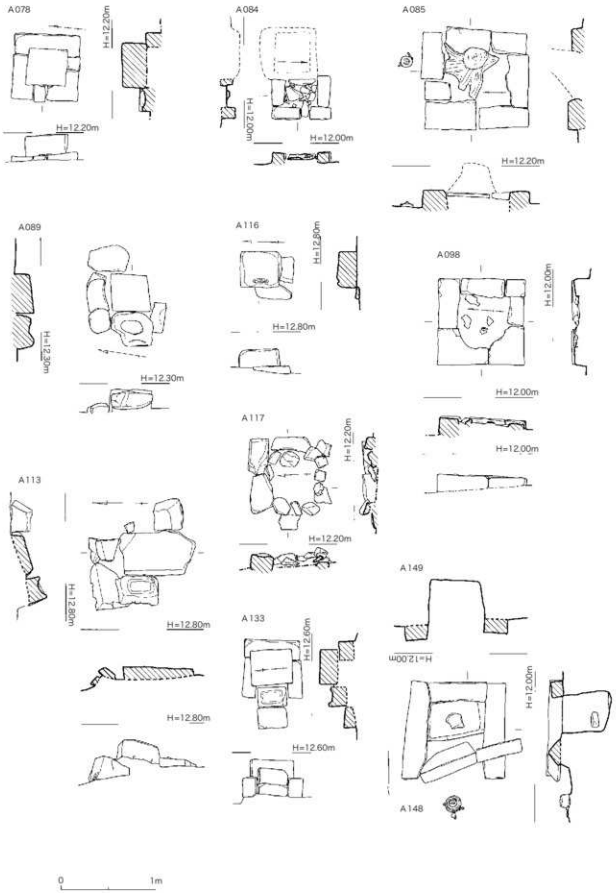
Ⅳ－20　A区近世墓１（1/40）



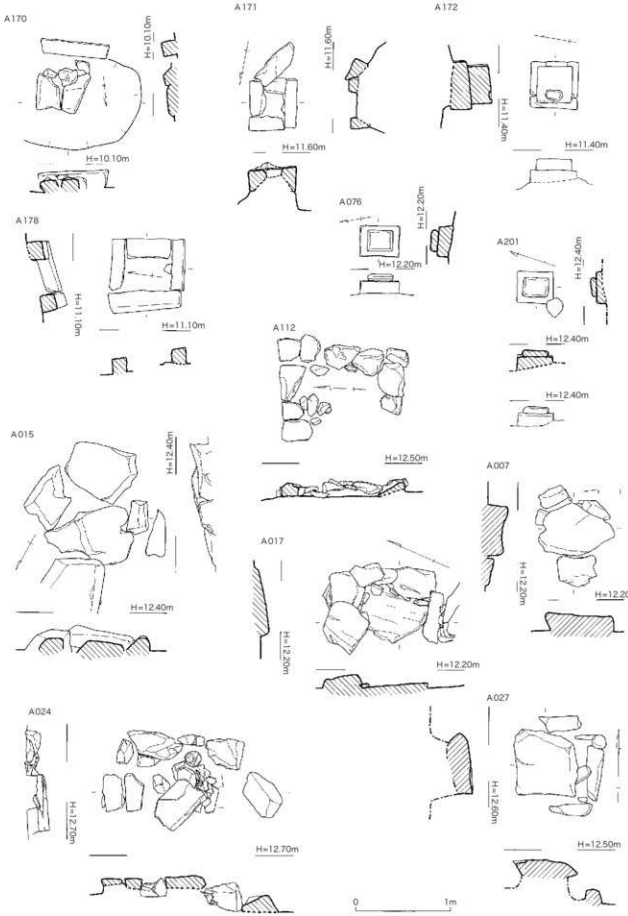
Ⅳ－21　A区近世墓２（1/40）



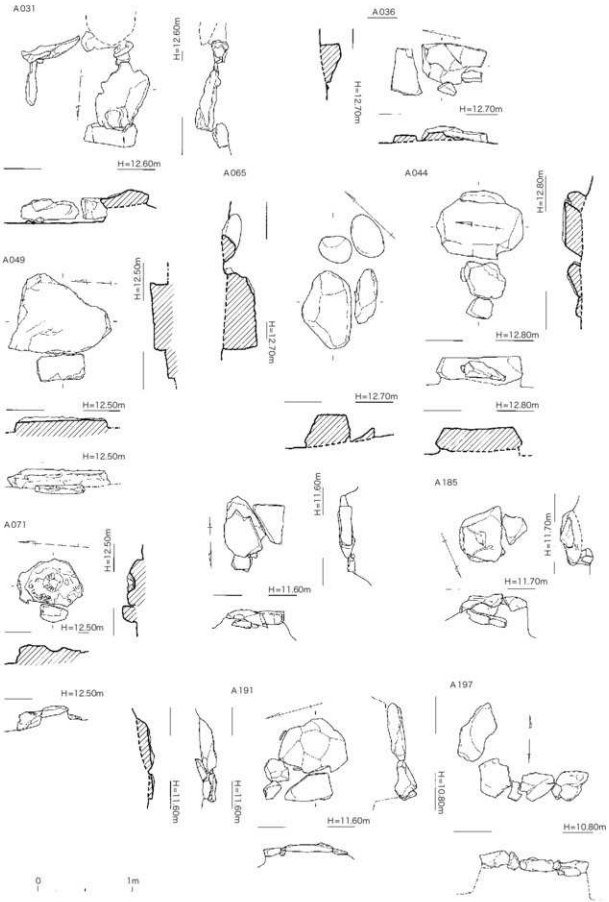
Ⅳ－22　A区近世墓３（1/40）



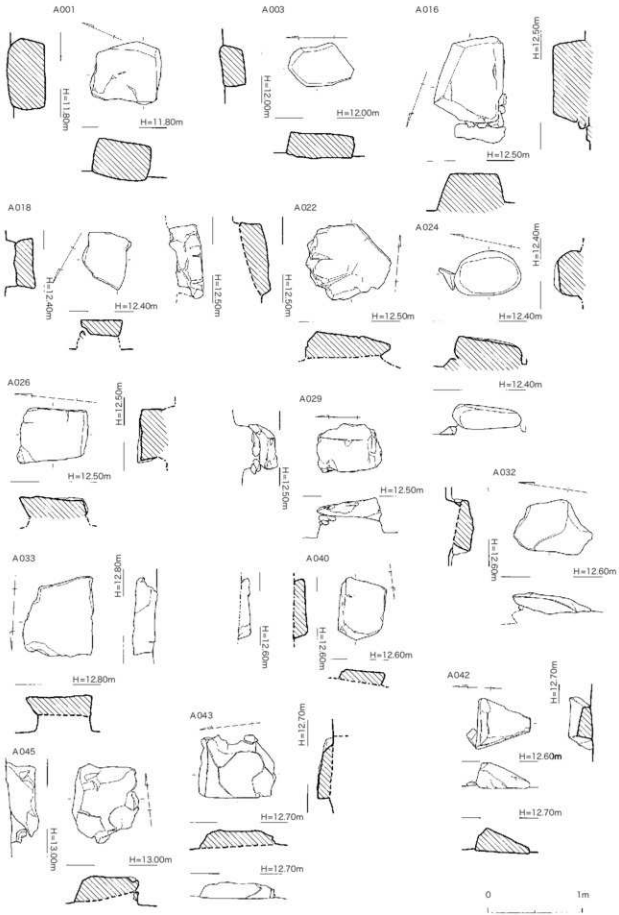
Ⅳ－23　A区近世墓4（1/40）



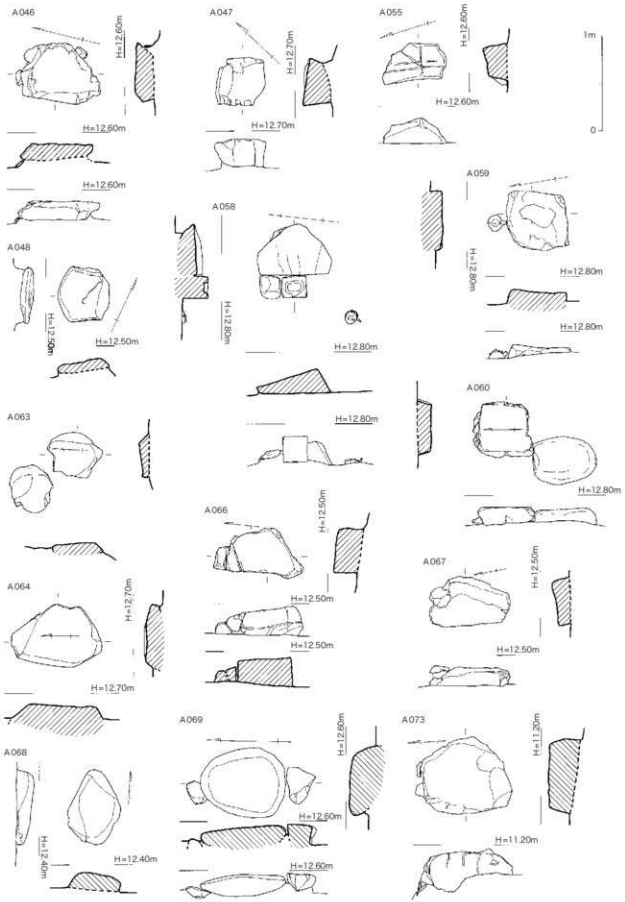
Ⅳ－24　A区近世墓5（1/40）



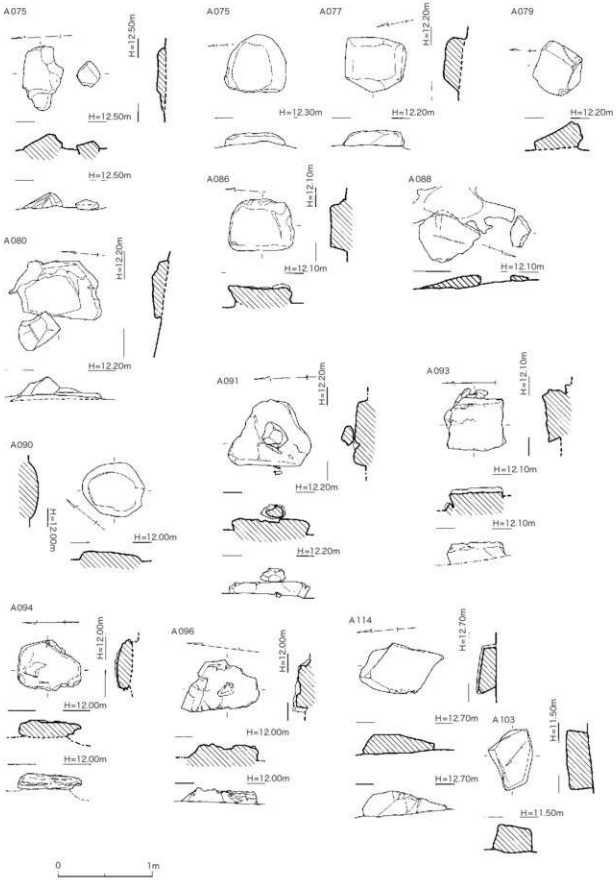
Ⅳ－25　A区近世墓6（1/40）



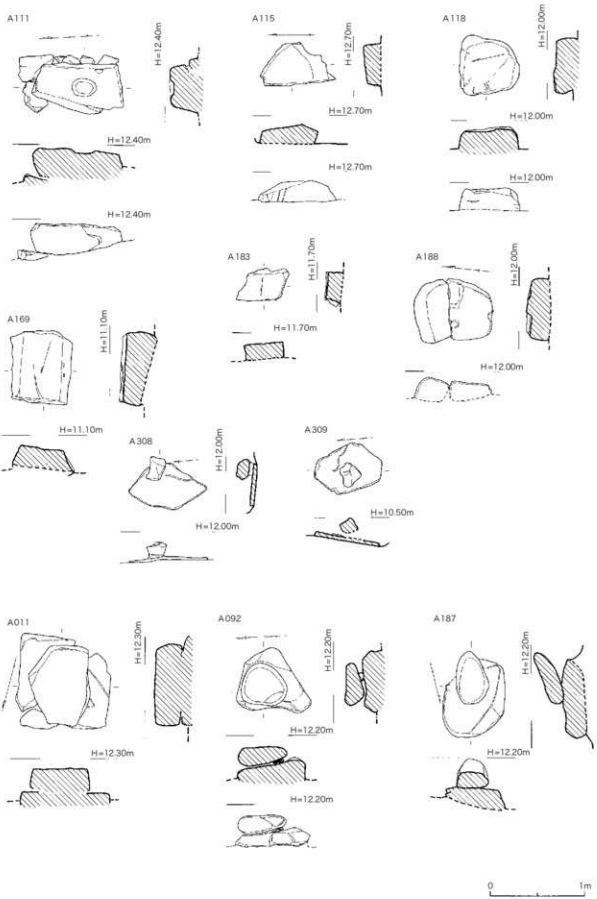
Ⅳ－26　A区近世墓7（1/40）



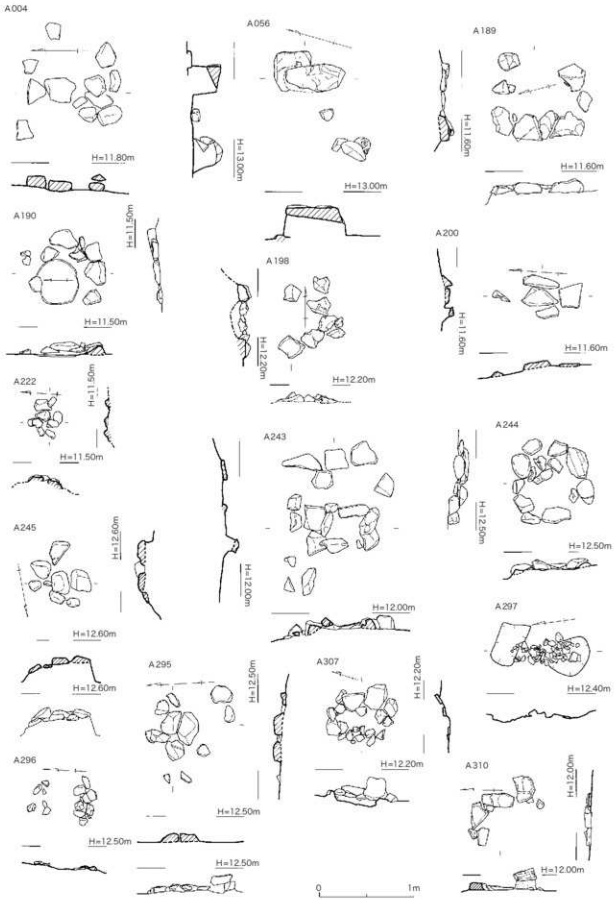
Ⅳ－27　A区近世墓8（1/40）



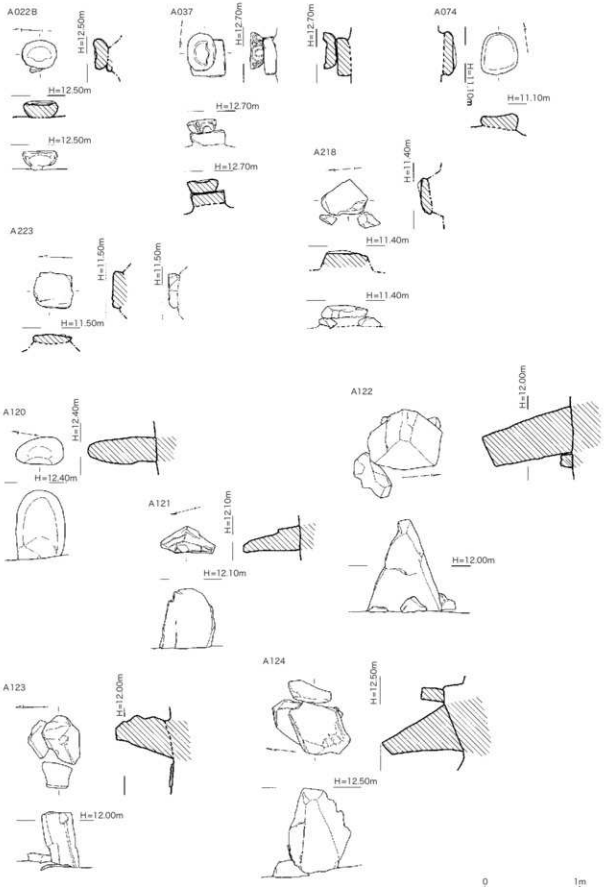
Ⅳ－28　A区近世墓9（1/40）



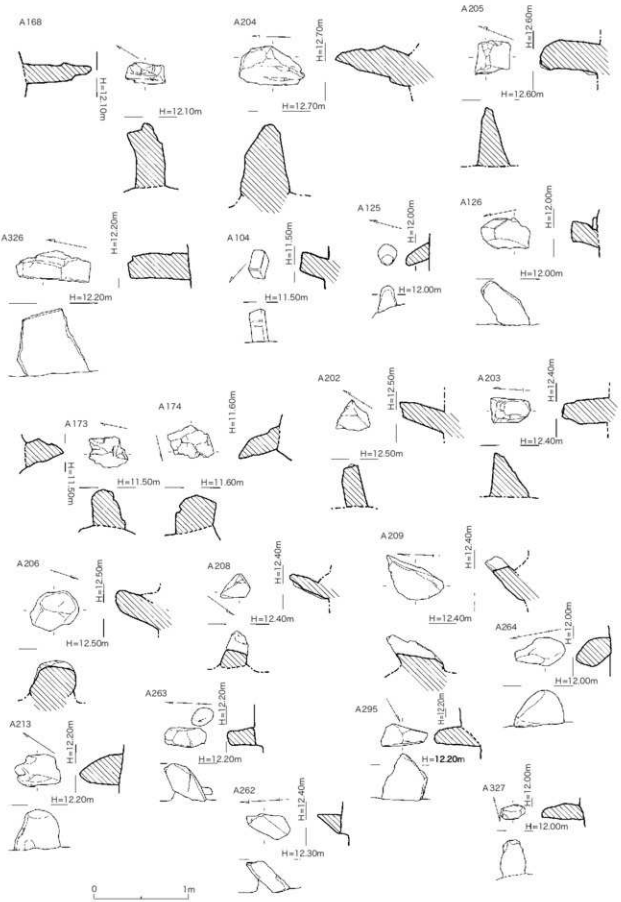
Ⅳ－29　A区近世墓10（1/40）



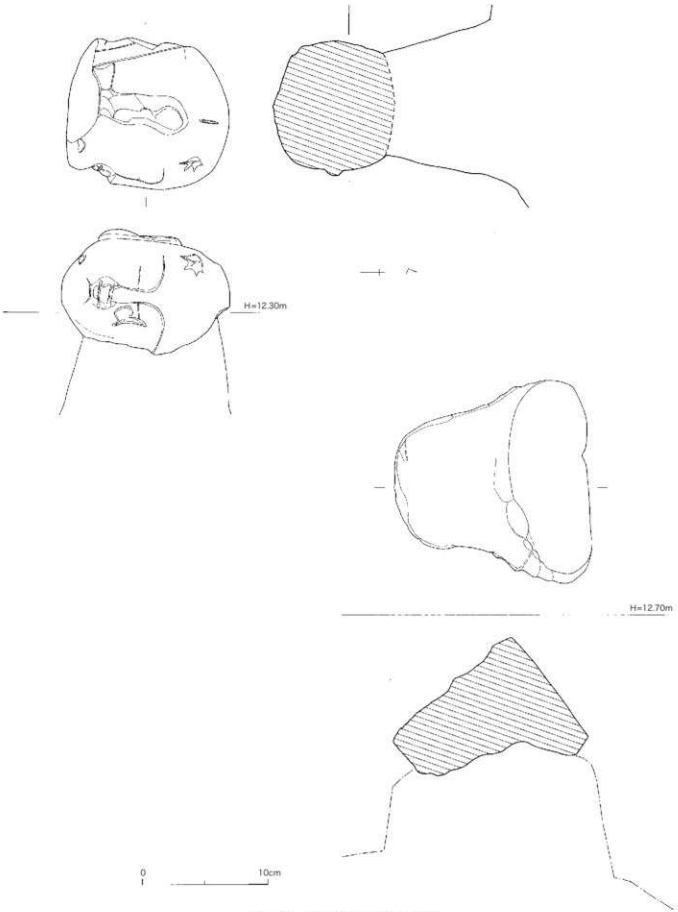
Ⅳ－30　A区近世墓11（1/40）



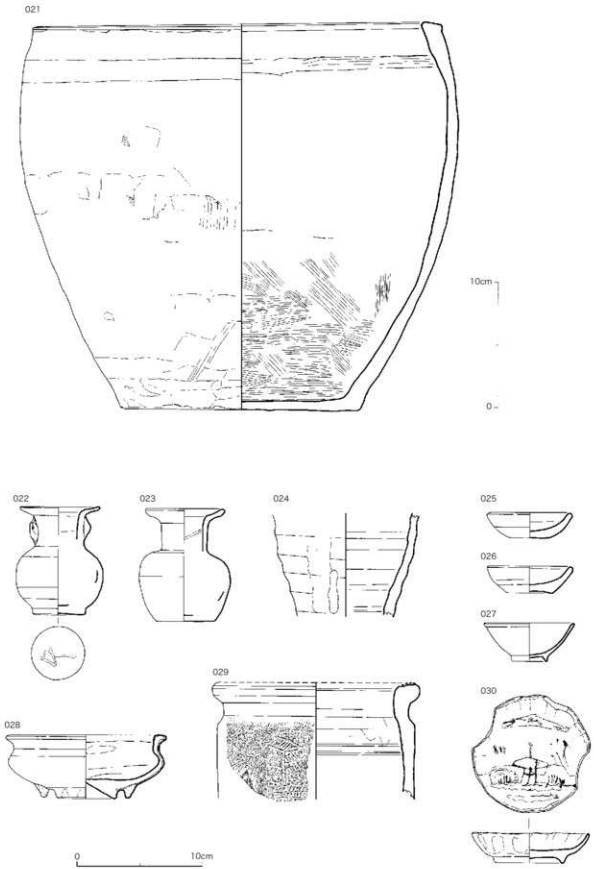
Ⅳ－31　A区近世墓12（1/40）



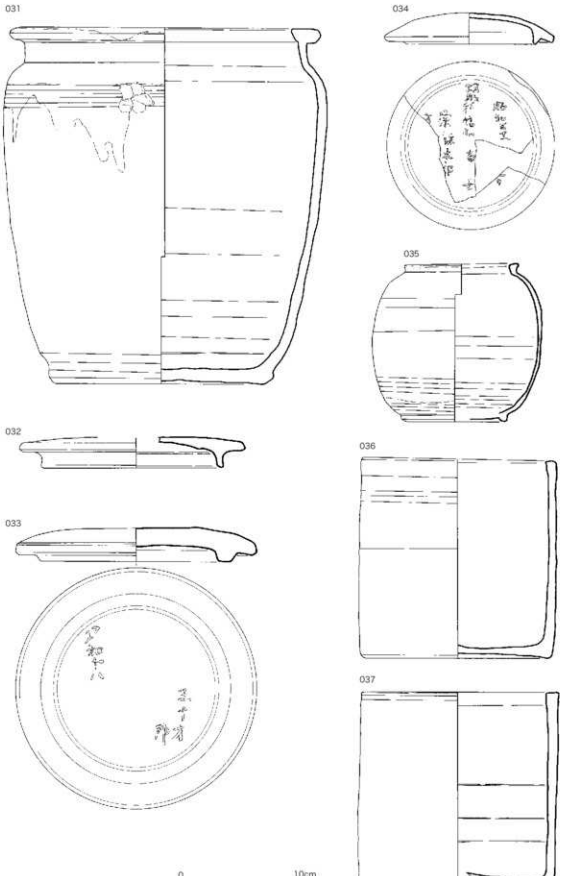
Ⅳ－32　A区近世墓13（1/40）



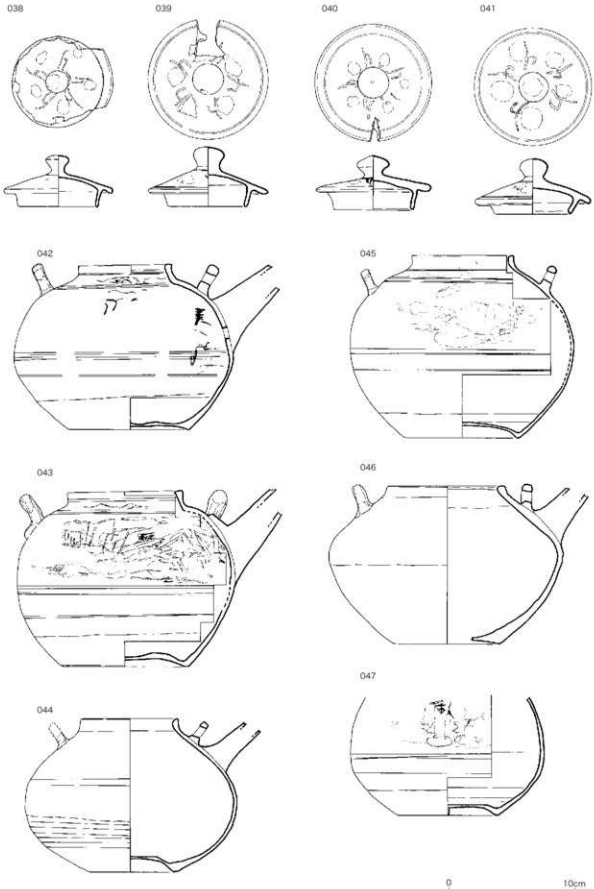
Ⅳ－33　A区石仏出土状況（1/3）



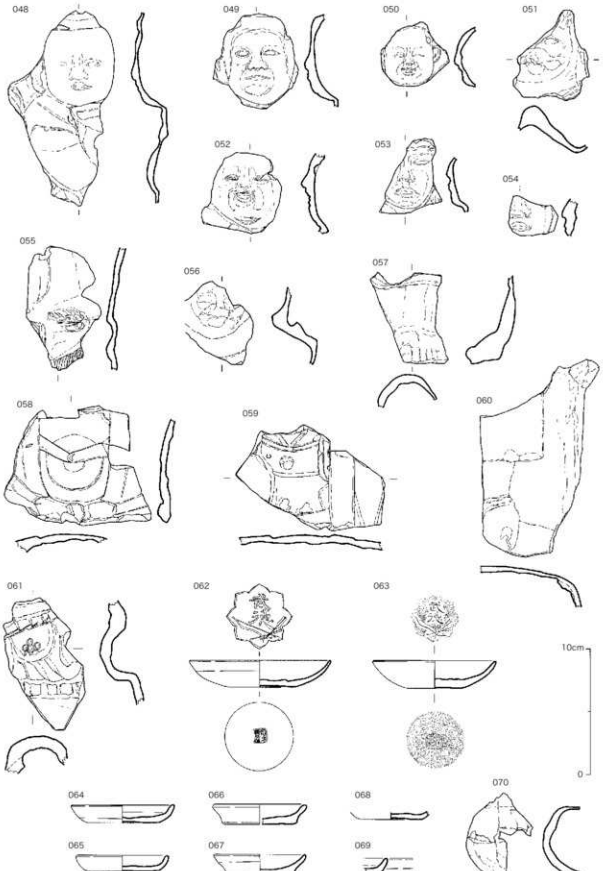
Ⅳ－34　A区近世墓出土遺物1（1/3）



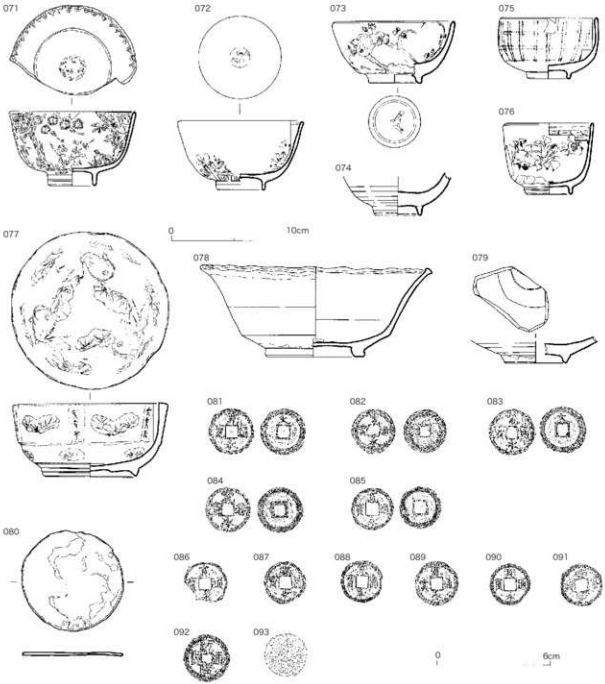
Ⅳ－35　A区近世墓出土遺物2（1/3）



Ⅳ－36　A区近世墓出土遺物３（1/3）



Ⅳ－37　A区近世墓出土遺物4（1/3）



Ⅳ－38　A区近世墓出土遺物５（1/3・1/2）

2).地下構造物　埋葬形態としてａ．土壙墓　ｂ．木棺墓　ｃ．近世甕棺墓　ｄ．火葬墓を確認した。ａの土壙墓とｂの木棺墓は木棺の痕跡が残らないため区別が困難である。

a.土壙墓（Ⅳ－17図）　古代末～中世や近世墓の初期は土壙墓が主流であったものと思われる。A150、A257、A241は土壙墓の可能性が高い。A257の上に見られる火葬骨壺は上からの掘り込みでA257とは別の遺構である。A150は主軸がほぼ南北を向き、長径125㎝、短径74㎝、深さ55㎝を測る。副葬品は土師皿が一枚出土した。古代末まで遡る可能性があると考えられる。A257、A241は遺物が出土しておらず時期は不明であるA142やA167は土層や底面の痕跡から木棺を使用した可能性が高い。

Ⅳ－39　B区近代墓全体図（1/100）

b. 木棺墓 (Ⅳ－18･19) これらの多くは木棺墓の可能性がある。A162は埋土から鉄釘が多く出土した。

これらは近世甕棺墓の墓壙を切っており、近代初頭に肥前系陶器甕を棺として使用するのを止めて、土壙墓や木棺墓に変わったことが判る。

c. 近世甕棺 (Ⅳ－12~16)　肥前系陶器甕を使用する。墓壙は1.5 mから深い物では3 m近い物もある。平面形は長方形が多い。副葬品が出土したのは極少数で、出土した物は盃1個やボタン1点、キセルの吸口、銭などがある。経塚周溝内下層の掘り込みでは陶器甕を棺として使用した例はなく、棺として使用され始めたのは早くても18世紀中頃～後半と思われる。その後明治時代初めまで使用された。

d. 火葬墓　桑原村史によると昭和20年頃から火葬が始まっており、調査区全体から火葬蔵骨器が出土した。火葬骨をいれた壺はⅣ－35図の031~037などがある。ほとんどは素焼きであるが031は陶器製で珍しい。032~034は蓋で033･034は内側に墨書が見られる。033は昭和18年と記されており、火葬としては初期のものである。A236(図Ⅳ－17) から火葬骨壺がまとまって出土した。改葬時に廃棄したものと思われる。その他火葬骨に伴う可能性があるものとして薬缶が多く出土している (図版Ⅳ－11の4)。薬缶は陶器製 (Ⅳ－36図038~047) とホーロー製があり、ホーロー製は腐食のため細片化して取り上げができなかった。薬缶は墓への供物や死産した胎児を入れて埋納した可能性が考えられる。1点のみであるが、薬缶状の胴部で注口がない土器内から、胎児と思われる骨が出土している。その他の出土遺物 (Ⅳ－37･38図　048~093) 048~061は素焼きの人形である。淡橙色を呈す。胎土は砂を含まず、焼成は良好である。表面採取例が多いが、墓壙内や盛土上層からも出土している。多く見られるのは人物像で顔は丸顔で力強く、胴体は陣羽織の様な物を羽織っている。武将像か。062から069は土師皿である。062･063は表面採取である。070は土鈴である。071～079は陶磁器製の碗・皿である。いずれも表面採取したものである。080は銅鏡でA区西側の表土中から出土した。081～093は銅銭である。

2．B区の調査

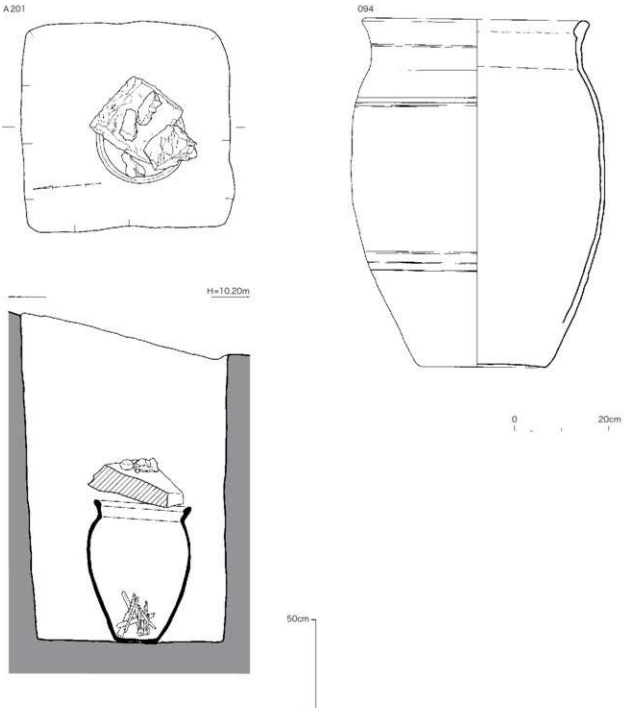
B区の遺構としては経塚古墳墳丘と北西側裾部の近代墓がある。

古墳時代の遺構

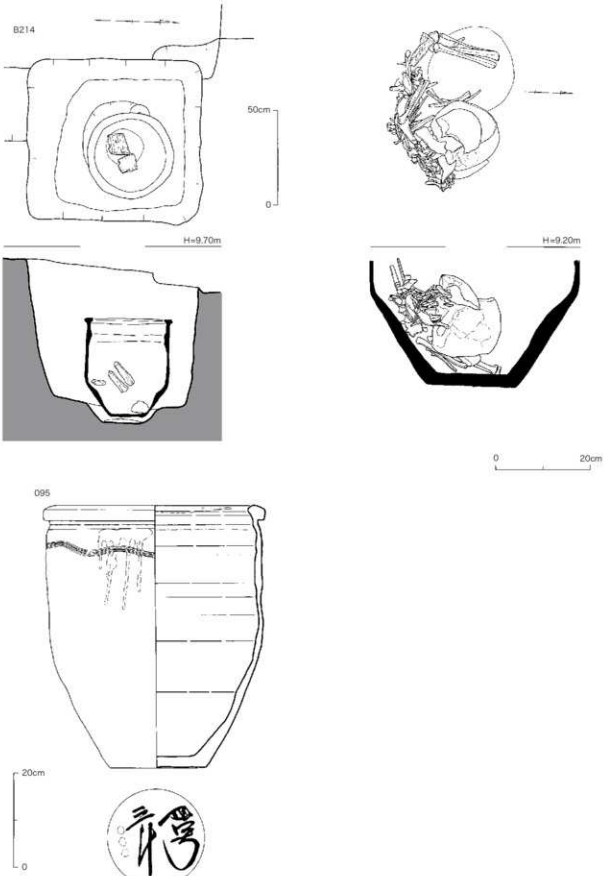
経塚古墳については『元岡・桑原遺跡群11』で報告したので、ここでは詳細は略す。経塚古墳は墳丘の径が30 m弱の円墳である。墳丘は現状で高さ3.5 m程盛土している。墳丘は幅1 mのテラスを1段持つ2段築造で全面に葺石を貼る。葺石は円礫・角礫を使用しているが、使用している礫の材質は安山岩や変成岩、凝灰岩など、葺石の区画線毎にかなり異なった様相を示しており、区画毎に葺石石材の供給地が異なるのではないかと考えられる。石材の供給を被葬者の影響下にある各地域に割り振ったため、その担当地域で採取できる石材の違いを表している可能性も考えられるのではないだろうか。

近代墓 (Ⅳ－39図)

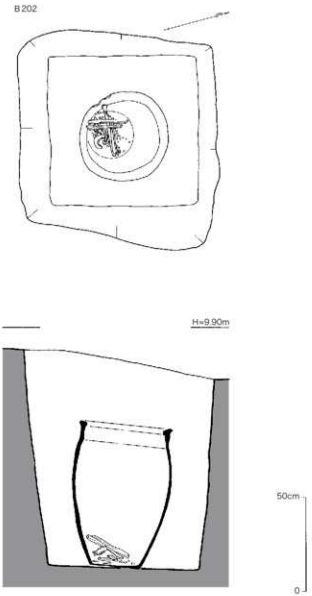
B区の近代墓はA区の近現代墓と細い道を挟んで対峙する。この小道は元々、桑原の集落から続く道で、水崎山に登る道や塩除古墳がある丘陵の裾部を通って瑞梅寺川側へ続く道であったと思われる。しかし調査開始当初は、道が埋没しておりA区とつながっていたため、一体の墓域としてとらえていた。墓壙掘方の規模や棺として使用されている肥前系陶器甕もほぼA区と同じものを使用している。調査中に確認した墓壙掘方は16基で、保存が決まる前に実際に掘り下げたのは9基である。9基のうち、甕棺が4基 (B201･202･214･217) で土壙墓 (木棺墓) が5基 (B203･211･208･209･216) で



Ⅳ－40　B 201 実測図（1/20・1/8）



Ⅳ－41　B 214 実測図（1/20・1/8）



Ⅳ－42　B 202 実測図（1/20）

ある。甕棺と土壙墓（木棺墓）が混じるのはＡ区と同様で、Ａ区では土壙墓（木棺墓）が甕棺墓を切っているため、Ｂ区でも同様に早くても明治 20 年代以降に甕棺墓から土壙墓（木棺墓）に変わったと考えられる。

B201（Ⅳ－40）　掘方は方形を呈し、一辺は 1.1 m、深さ 1.7m、甕は口径 48 ㎝、器高 73㎝を測る。甕棺の上に被葬者の姓名を彫り込んだ蓋石（木蓋の抑えに使用か）が出土し、また、現代墓の囲いに使用されていた花崗岩の柱の中に同一人物の名前を彫り込んだ墓石が再利用されていたことから、Ｂ区墓群の性格が判明した。刻まれた齊藤氏に関しては前述したとおりである。刻まれた文字は墓壙内から出土した石に『福岡県士族　斎藤齋八郎』と記され、墓石は正面に名前を刻み、側面には２行に分けて『明治□二年一月三日病死　主税之二男也行歳廿三年二ヶ月』（□は廿か）と刻まれていた。骨の残りは悪く四肢骨などはある程度残っていたが、頭蓋骨や椎骨は確認できなかった。

B202（Ⅳ－42）　掘方はほぼ方形を呈し、一辺 1.05m、深さ 113㎝、甕棺は口径 46㎝、器高 75㎝を測る。骨の遺存状態は悪く、下顎の一部と上腕骨、尺骨、橈骨が出土した。副葬品は数珠に使われていた水晶玉と材質不明の黒色の小玉、それに銅銭が２枚出土した。

B214（Ⅳ－41）掘方は長方形を呈し、一辺 95 × 85㎝、深さ 82㎝を測る。甕は口径 47㎝、器高 56 ㎝と小型で、底面に墨書がある。墨書は実測図に載せた『三斗四号』と読める容量を記したものと、図では点線で示した小文字が三文字あり、それは薄くて判読できない。埋葬されていたのは５～７歳前後と思われる子供である。骨は黒色化しているが遺存状態は良好である。膝を抱えた状態で埋葬されており、頭蓋骨は下に落ちている。副葬品は棺外から磁器碗が１点出土した。

Ｂ区近現代墓は経塚古墳の北西側裾部を削って、南北 11 m、東西約 10 mの方形区画を築いて墓域としている。明治以降に墓域として整備したと考えられるが、戦後に土地所有者が変わるとその家族を葬った現代墓が作られるようになる。墓はその時点で大きく改変されており、明治時代の墓の地上構造物は現況を留めず、現代墓の周囲を囲む石材として再利用された。戦後の土地所有者の墓は石

組み内に骨壺をいれ上に墓石を載せる現代でもよく見られるタイプで、地下に掘り込みを持たず、コンクリートで固めた石組みが一部残存していたのみである。

B区の近代墓は16基確認した。経塚の墳丘を削った南側には近代墓の墓壙掘り込みは無く、墓壙は方形区画北半部の、本来は経塚古墳の周溝が存在した部分に集中する。南側は戦後、地主が交替した以降に造成された可能性があり、明治に齋藤家の墓が営まれ始めた時期には経塚古墳の周溝が残っていたものと思われる。

3.E区の調査

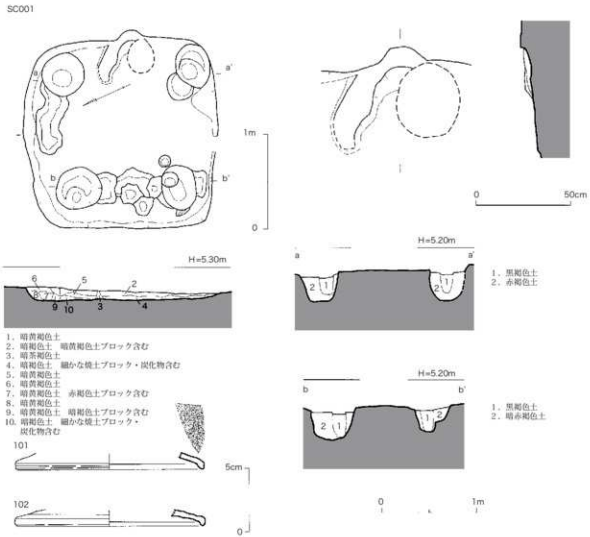
C区の北側に位置し、丘陵が東北に向かって傾斜する斜面を一部削って平坦面を作り出している。標高は5mを測り、下の水田とは高低差2mを測る。

E区の平坦面は調査次に東西80m、南北20mあったが、この平坦面は近代以降に拡張されたもので、元々は東西25m、南北8m程の平坦面である。平坦面北西側にまとまって8世紀頃の竪穴式住居3軒と柱穴群が出土した。柱穴群は北側が削られているためか、掘立柱建物は3棟しか建てることができなかった。検出した遺構は古代の遺構のみである。近世には畑として利用されており、近代に拡張する前に平坦面の周囲を巡っていた排水用の溝などが出土した。

1）竪穴式住居

ＳＣ００１(Ⅳ－43図）E区中央に位置し、主軸をＮ－67°－Ｗにとる。平面形は隅丸方形を呈し、一辺の長さは約2m、床面までの深さは14cmを測る。住居内床面直上には厚さ3～4cmほどの貼床と床面の汚れと思われる暗褐色土がほぼ水平に堆積している。埋土は暗黄褐色土を主としており、これは住居周辺の地山の土である。主柱は4本柱で、柱穴は四隅の角近くに位置する。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、長径は46～49cm、深さは28～34cmを測る。4本とも柱痕跡が残っており、径は16～18cmを測る。東壁中央に竈が付き、煙出し部分が12cmほど外側に突き出す。竈袖部は上側を削平されて裾部のみの遺存であり、また、向かって右側の袖部は掘立柱建物の柱穴により破壊されたため、わずかな痕跡のみ確認できた。竈は推定で幅70cm強を測る。袖部裾は幅20cm前後で「ハ」の字状に開く。竈内側は全体的に焼けて赤変しており、底面は中央が緩やかに窪む。壁溝は竈の下と北壁西側の二カ所にだけ掘られており、竈はその壁溝を暗灰褐色粘質土で埋めて築いているが、袖も含めて構築材の粘土には焼土ブロックと炭化物を含んでおり、少なくとも1回は作り替えが行われたと思われる。床面下の掘方は全面に広がらず、北西隅と南西隅の柱穴間のみに掘られている。溝状を呈するが、底面は凹凸が多い。埋土中から須恵器坏蓋が出土した。8世紀前半と考えられる。出土遺物（Ⅳ－43図101・102)。101・102は須恵器坏蓋である。101は復元口径15cmを測り、灰色を呈す。胎土中に黒色粒を少量含む。外面は回転ヘラケズリの上に一部擦痕が見られる。102は復元口径約15cmを測る。青灰色を呈し、胎土中に白色砂を少量含む。

ＳＣ００２(Ⅳ－45図）　E区中央北端に位置し主軸をＮ－93°－Ｗにとる。平面形は方形を呈し、一辺の長さは約2.6m、床面までの深さは37cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、南東隅と北東隅が2～3cm低い。主柱は4本柱で壁から20～40cmほど離れている。北東側の柱は竈の袖に接しており、柱穴掘方の上に竈の袖がのる。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、長径は43～52cm、深さは47～59cmを測る。柱痕跡は南東隅を除く3本に残っており、径は13～18cm、主柱穴間は芯々で1.3～1.5mを測る。東壁中央に竈が付き、煙出しが23cmほど外側に突き出る。袖部の遺存状態は良好である。竈は奥行きが70cm、幅が94cmを測る。竈は底面にも粘土を貼って住居床面より6cmほ

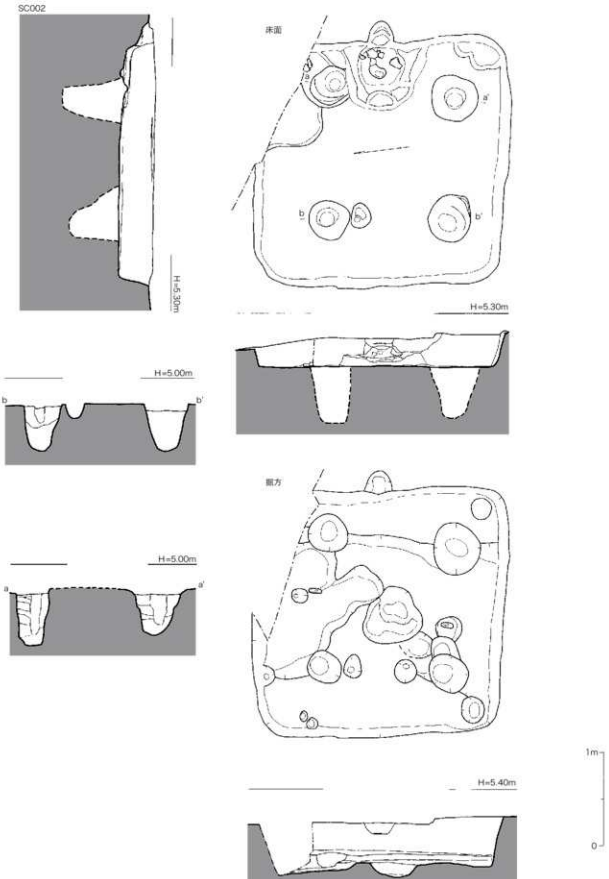


Ⅳ－43　E区 SC001 実測図（1/40・1/20・1/3）

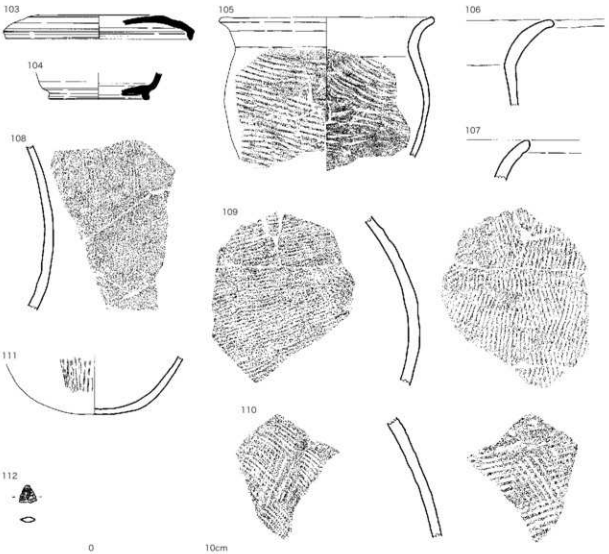
ど高くしており、底面中央に径 15cmの支脚の抜き痕が残る。外壁に接する部分で幅 80cmを測り、一度外側に脹らんでから焚き口に向かってすすぼまる。平面形は楕円形を呈す。焚き口の幅は 14cmを測る。袖部内面と支脚周辺が赤変している。竈は上部が崩壊しているが、支脚が抜かれていることから、建物を廃棄する際に、人為的に竈を壊す祭祀を行ったと推定される。壁溝は確認できなかった。住居床面下の掘方は東西の主柱穴間を 5cm程度掘り下げているが、掘方底面は中央部から南北両側へ緩やかに低くなっており、住居床面中央の水気を壁際に流すための工夫と思われる。床面中央から西側にかけて柱穴状の掘方が 7 個ほどあるが、これはＳＣ 002 に伴うものか、それ以前の掘立柱建物の柱穴なのかは不明である。出土遺物（Ⅳ－ 46 図　103 ～ 112）。103 は須恵器坏蓋、104 は須恵器高台付坏である。105 ～ 111 は土師器甕である。105 は内外面に並行タタキと当具痕が残る。106 は内面胴部はヘラケズリを施す。108 の外面はハケ目、109 と 110 の外面は並行タタキで内面は当具痕が残る。112 は石鏃の先端である。

ＳＣ０１３(Ⅳ－ 47 図)　Ｅ区中央北端に位置し、主軸はほぼ東西方向をむく。遺構の北側が段造成により失われているが、平面形は方形と推定される。一辺の長さは約 2 m、床面までの深さ

Ⅳ－44　E区全体図（1/100）

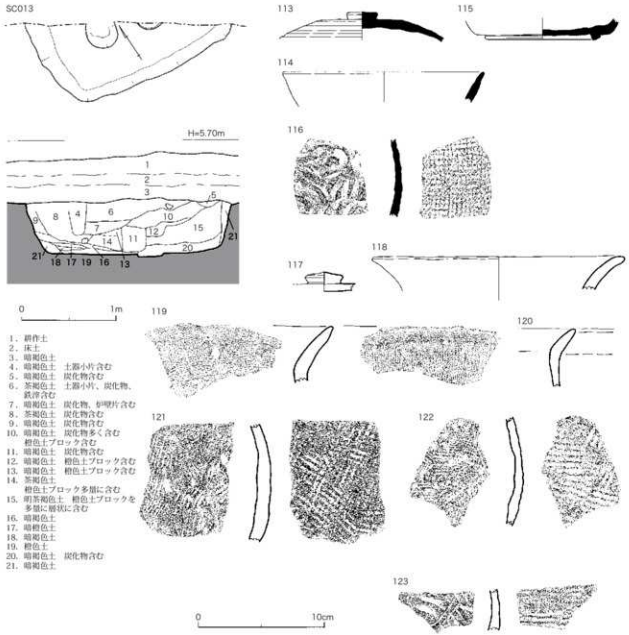


Ⅳ－45　E区 SC002 実測図（1/40）



Ⅳ－46　E区 SC002 遺物実測図（1/3）

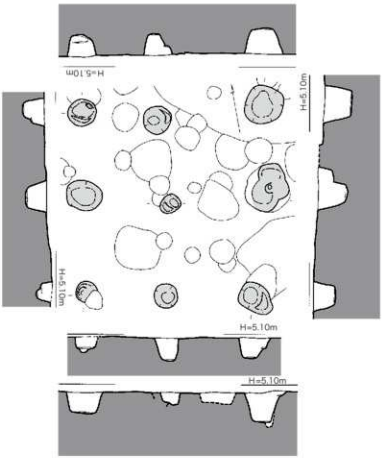
は 50㎝を測る。土層観察では、床面直上に厚さ 10㎝程の暗褐色土がみられる（Ⅳ－47 図土層図 19･20･21 層）。貼床と思われる。東端で壁面に沿って立ち上がる 21 層を壁面を覆う板壁の痕跡とすると、住居廃絶後は板壁が残った状態でそれほど時間をおかずに埋没しており、人為的な埋め戻しが行われたものと思われる。住居廃絶の際には竈の支脚を抜く祭祀や屋根の撤去などは行うものの、壁を覆う板材などは抜かずに放置したことが判る。土層図の 4 層や 6･ 7 層、8 層、10･11･12 層はそれぞれ住居埋没後に掘られた土坑や柱穴である。このうち 6･7 層や 8 層の掘り込みからは鉄滓が多く出土し、その他に少量ではあるが炭化物や炉壁片も出土しているため、住居埋没後はＥ区もしくは丘陵の上側に位置するＡ区やＣ区で鉄生産が行われていたことが判る。SC013 も SC001 や SC002 と同様 4 本柱であった可能性が高いが、出土したのは南西隅の 1 個だけで、径 33㎝、深さ 36㎝を測る。柱痕跡も残っており、径 12㎝を測る。東壁側はほとんど残存していないので竈等は未検出である。また床面下の掘方も残存していた範囲内では確認できなかった。埋土中から 8 世紀の須恵器などが出土した。出土遺物（Ⅳ－47 図　113 ～ 123）。113 は須恵器坏蓋である。淡灰色を呈す。外面上半はヘラ削りを施す。胎土中に砂粒を少量含む。114 は須恵器坏口縁で復元口径は約 15㎝を測る。暗灰色を呈す。胎土中に細砂を少量含む。115 は須恵器高台付坏の底部である。淡灰

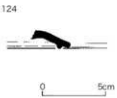


Ⅳ－47　E区 SC013 実測図（1/40・1/3）

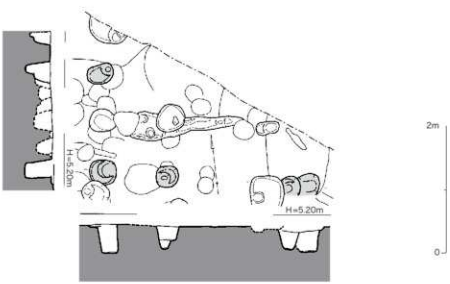
色を呈す。116は須恵器甕胴部である。灰色を呈し、外面は細かな格子タタキ、内面は青灰波紋状の当具痕が残る。胎土中に白色細砂を少量含む。117は土師器坏蓋の摘みである。明黄褐色を呈す。須恵器模倣土器である。118～120は土師器甕口縁である。118は復元口径20cmを測る。色調は黄褐色を呈す。胎土中に1～2mm程の白色砂を含む。119は淡赤褐色を呈し、口縁端は横ナデで、外面頸部は縦ハケ、内面頸部横ハケ、括れから下の肩部は縦方向のケズリを施す。120は淡褐色を呈し、調整は不明である。121～123は土師器甕の胴部である。121は淡褐色を呈し、外面は並行タタキ、内面は細く並行な当具痕が残る。胎土中に砂を多く含む。122は明黄褐色を呈す。外面は平行タタキ、内面は細く並行な当具痕が残る。胎土中に細砂を多く含む。123は明黄赤褐色を呈し、外面は平行タタキ、内面は青海波紋と思われる当具痕が残る。胎土中に細砂を多く含む。前述したように住居内には後世の掘り込みがあるが、調査時には気づかず一緒に取り上げてしまった。SC001と主軸がほぼ同じであることから、同時期と考えると、住居の時期は8世紀前半と考えられる。

SB01

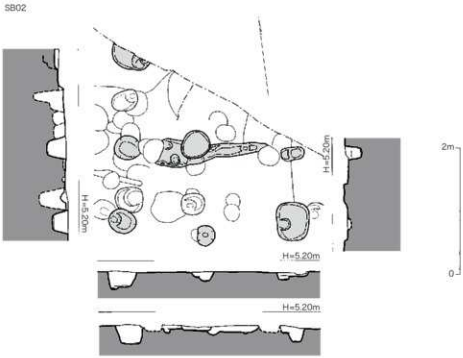


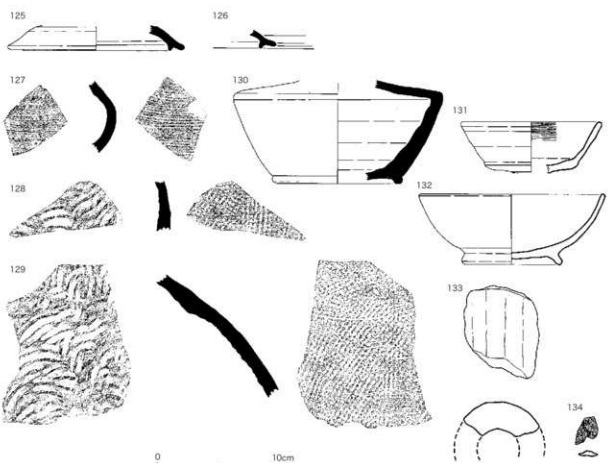


SB03



Ⅳ－48　E区SB01・SB03実測図（1/60・1/3）





Ⅳ－49　E区 SB02・E区出土遺物実測図（1/60・1/3）

2）掘立柱建物　E区北西側には柱穴がまとまっており、そこで掘立柱建物を３棟検出した。

ＳＢ０１(Ⅳ-48図）　E区中央に位置する２×２間の総柱建物で、主軸をＮ－10°－Ｅにとる。柱穴の平面形は円形もしくはいびつな楕円形で、径33～72㎝、深さ19～49㎝を測る。柱痕跡は残っていなかった。梁間は全長2.9ｍを測る。桁行きは南側で2.7ｍ、北側は少し開き気味で2.9ｍを測る。柱間は芯々で1.15～1.7ｍを測る。SP007から124の須恵器坏蓋片が出土した。

ＳＢ０２(Ⅳ－４９図）　SB03と重なりSB01の1.5ｍ東側にほぼ並立する。遺構の北側が削平されているため北側に延びる可能性もあるが、現状では２×２間の総柱建物で、主軸をＮ－7°－Ｅにとる。柱穴の平面形は楕円形で、長径は36～61㎝、深さ12～29㎝を測る。柱痕跡は残っていない。梁間は全長2.7ｍ、桁行きは全長2.6ｍを測る。柱間は芯々で1.1～1.5ｍを測る。南北柱列の中央柱間を結ぶ東西方向の溝状の掘り込みがあり、長さ２ｍ、最大幅45㎝、深さ２～8㎝を測る。溝状の掘り込みは中央の柱穴に切られている。柱穴から遺物は出土していない。

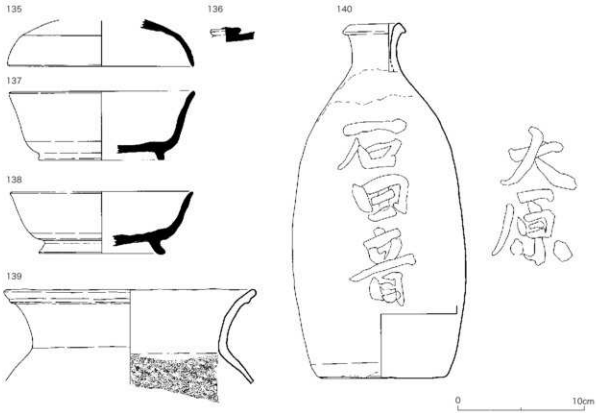
ＳＢ０３(Ⅳ－48図）　E区北西側に位置し、SB01の東側に位置する。SB02とほぼ重なっており、SB02に切られる。北東隅が削平されており、全体の規模は不明である。現状では東西に長い１×２間の建物であるが、本来は２×３間の建物と思われる。主軸はＮ－79°－Ｗを測る。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で径34～43㎝、深さ34～49㎝を測る。柱痕跡は残っていない。梁間は不明、桁行は全長3.2ｍを測る。柱間は芯々で0.9～2.2ｍを測る。柱間の差が大きいのは、南側桁行きで柱穴が１個分足りないからである。遺物は出土していない。

3）その他の出土遺物（Ⅳ－49図　125～134）

今回報告しない遺構や遺構検出時に出土した遺物である。125・126は須恵器坏蓋である。125はSP009から出土し、復元口径は11.6㎝を測る。淡灰色を呈し、外面上半は回転ヘラケズリ、口縁端から内面は回転ナデを施す。胎土中に砂粒を少量含む。126はSP019から出土した。灰色を呈す。調整は上面天井側が回転ヘラケズリで、残りは回転ナデである。127は表土剥ぎの際に出土した須恵器の短径壺もしくは甕の肩部である。外面はカキ目、内面は横ナデを施す。128・129は須恵器甕胴部である。128は表採で、129はSP015から出土した。128・129とも外面は細かな格子タタキ、内面は青海波紋である。両方とも胎土中に細砂を含む。130はSP018から出土した須恵器壺もしくは平瓶である。復元胴部最大径は16.5㎝を測る。灰黒色を呈し、全体に回転ナデを施す。131は土師質坏でSP016から出土した。復元口径11.2㎝を測る。明黄赤褐色を呈し、外面は横ナデ、内面は細かなハケ目を施す。内底部下半は表面が剥離しており不明である。132はSP016から出土した黒色土器A類椀である。復元口径は14.6㎝、器高5.5㎝を測る。133はSP014から出土した羽口である。調査区全体で鉄滓片が出土しており、鉄生産関連の遺物が多い。134は黒曜石製の鏃である。

E区では竪穴式住居３軒と掘立柱建物３棟が出土した。E区は北東側に傾斜する斜面を削って小さな平坦面を造成したものであり、北側は若干削平を受けているものの、E区下の水田の試掘から、丘陵はほとんど北側に延びないことが判明しており、E区の遺構はそれほど増えないと思われる。ただE区の南側に位置するC区にも古代の遺構が存在した可能性は否定しがたい。

住居と掘立柱建物はSC001が若干方位がズレるものの、いずれも南北を意識して建てられており、８世紀前半の近い時期に存在したと思われる。竪穴式住居のうち２軒は竈を持っており、残りの１軒も持っていた可能性が高い。掘立柱建物３棟のうち２棟は調査区外に伸びるため、未確定な部分



Ⅳ-50　G区出土遺物（1/3）

が多いが SB01 と SB02 の 2 棟は 2 × 2 間の総柱建物で倉庫として使用されたと考えられる。2 棟は東西に並立しており、20 次など他の調査区で出土した倉庫群と似た様相を示すものの、建物や柱穴の規模が小さい事から、元岡・桑原遺跡で生産された鉄製品の倉庫としての利用は考え難い。ただ A 区の経塚周溝部分でも鉄滓や炉壁などが出土しており、36 次周辺で小鍛冶など鉄製品生産に関係する工房などが存在したものと思われる。

4．小結

36 次調査では 5 世紀中頃の経塚古墳と 7 世紀末～ 8 世紀前半の鉄生産に関連する竪穴式住居と掘立柱建物群、古代末～中世と考えられる京塚古墳墳頂の配石遺構と A 区盛土下の古代墓、17 世紀末から 18 世紀初頭まで遡る可能性がある近世墓が出土した。

経塚古墳では墳丘北側の表土剥ぎを行ったところ、葺石が良好な状態で出土した。大規模な丘尾切断は行わず、盛土に使用する土は墳丘南西側の A 区中央部を掘り下げて使用している。この土は花崗岩が風化した土で、赤みが強い。墳頂部や墳裾の土層観察の結果は全体が赤褐色を呈しており、分層はかなり困難である。葺石は墳丘中心を軸として 9 ～ 16°の間隔の区画線が良好な状態で確認できた (『元岡・桑原遺跡群 11』P57　Fig40)。区画線の中を埋める石材は区画ごとに安山岩や凝灰岩、変成岩など主とする石材が異なる (『元岡・桑原遺跡群 11』付図)。これは区画ごとに石材の供給地が異なる可能性があり、古墳被葬者の影響下にある各地域に石材の提供などを割り当てた結果であると考えたい。

7 世紀末～ 8 世紀前半の遺構は、A 区で経塚古墳の周溝底面の平坦地を利用して鉄製品の生産が行われていたのと、E 区で竪穴式住居が 3 軒と掘立柱建物が 3 棟、それに柱穴群が出土した。E 区では竪穴式住居が埋没した後に掘られた土坑から焼土や炉壁、炭化物、鉄滓などが出土しており、なんらかの製鉄関連遺構が存在していたと考えられる。しかし、出土した掘立柱の倉庫は 20 次調査などで出土した倉庫群に比べると規模は小さく、活動した期間も短いと考えられる。

古代末から中世に関しては、遺物は龍泉窯系青磁碗や白磁片、土師皿、須恵質瓦片など多く出土しているものの、遺構は時期を特定できるものは少ない。経塚古墳墳頂の配石遺構は石の隙間から出土した土器に 11 世紀後半の白磁片を含んでおり、古代末に遡る可能性は非常に大きいものの、トレンチでは下部構造などは出土しておらず、その性格や時期を特定することは困難である。ただ元岡・桑原遺跡群内では 18 次調査などで 11 世紀後半以降の貿易陶磁やそれに伴う遺構が出土している。豊富な貿易陶磁などの遺物の中に、磁器製の水滴など一般集落での出土が少ない遺物が含まれることを考えると、寺院や荘園などに伴う施設が元岡遺跡群内に存在したものと考えられている。また平安時代末から鎌倉時代にかけて宋との交易で栄えていた今津の誓願寺は東側に 3 ㎞しか離れておらず、経塚古墳の墳頂からは、誓願寺が位置する毘沙門山が遠望できる。36 次調査区は当時瑞梅寺川と大原川の合流点に位置しており、今津と糸島の各地を結ぶ物流の要所でもあったと考えられる。

近世墓が造営された始めた時期は不明であるが、経塚古墳の周溝部が埋め立てられ、墓石が建てられ始めたのが遅くとも 1730 年であることから、盛土下の周溝底面から掘り込んだ土壙墓はそれより遡る。時期は明確ではないが、少なくとも 18 世紀初頭までは遡るものと思われる。

最後に 36 次調査の A 区と B 区が遺跡の重要性から現状保存されることなった。調査担当者として関係者各位に感謝の意を表するものである。

図版Ⅳ－１　1. 36 次調査開始前（東から）

図版Ⅳ－１　2. 36 次全景（北から）

図版Ⅳ－２　1. 36 次全景（北から）

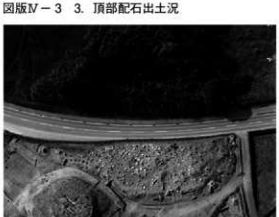
図版Ⅳ－２　2. A 区全景（北から）

図版Ⅳ－３　1.　経塚古墳全景（北から）

図版Ⅳ－３　2.　経塚古墳調査前葺石露出状況

図版Ⅳ－３　3.　頂部配石出土況

図版Ⅳ－３　4.　墳丘下旧表土



図版Ⅳ－３　5.　Ａ区近世墓域（北から）

図版Ⅳ－4　1. A区調査前風景（東から）

図版Ⅳ－4　2. A区立石出土状況（調査前）

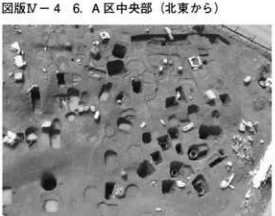
図版Ⅳ－4　3. A区表土剥ぎ（南から）

図版Ⅳ－4　4. A区（西から）

図版Ⅳ－4　5. A区西側（東から）

図版Ⅳ－4　6. A区中央部（北東から）

図版Ⅳ－4　7. A区東側（北東から）



図版Ⅳ－4　8. A区西端墓壙群（北から）

図版Ⅳ－5　1. A010（西から）

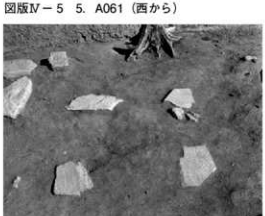
図版Ⅳ－5　2. A023（西から）

図版Ⅳ－5　3. A035（中央石組み）

図版Ⅳ－5　4. A038（西から）

図版Ⅳ－5　5. A061（西から）

図版Ⅳ－5　6. A076（西から）



図版Ⅳ－5　7. A095（西から）

図版Ⅳ－5　8. A219・A220・A211（手前から）

図版Ⅳ－6　1. A133（南から）

図版Ⅳ－6　2. A135（北から）

図版Ⅳ－6　3. A039･A040･A041（西から）

図版Ⅳ－6　4. A022（西から）

図版Ⅳ－6　5. A111（西から）

図版Ⅳ－6　6. A071（西から）

図版Ⅳ－6　7. A277（北東から）

図版Ⅳ－6　8. A037（西から）

図版Ⅳ－7　1. 宝暦墓石（A277）

図版Ⅳ－7　2. 宝暦墓石拡大

図版Ⅳ－7　3. 享和墓石1

図版Ⅳ－7　4. 享和墓石2

図版Ⅳ－7　5. 文政8年墓石出土状況

図版Ⅳ－7　6. 嘉永7年墓石

図版Ⅳ－7　7. 年代不明墓石

図版Ⅳ－7　8. 昭和2年墓石

図版Ⅳ－8　1.　立石墓遠景

図版Ⅳ－8　2.　立石墓群1（北から）

図版Ⅳ－8　3.　立石墓群2（北から）

図版Ⅳ－8　4.　立石墓群3

図版Ⅳ－8　5.　A122（西から）

図版Ⅳ－8　6.　A168（西から）

図版Ⅳ－8　7.　A204（東から）

図版Ⅳ－8　8.　A212（西から）

図版Ⅳ－9　1. A215（西から）

図版Ⅳ－9　2. A249（西から）

図版Ⅳ－9　3. A259（東から）

図版Ⅳ－9　4. 右から A271 ～ 274（南東から）

図版Ⅳ－9　5. A128（南から）

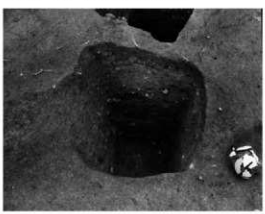
図版Ⅳ－9　6. A141（北から）

図版Ⅳ－9　7. A160（東から）

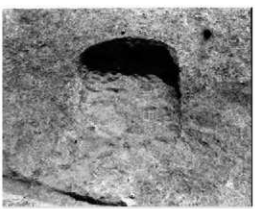
図版Ⅳ－9　8. A254（北から）

図版Ⅳ－10　1. A142（東から）

図版Ⅳ－10　2. A150（西から）

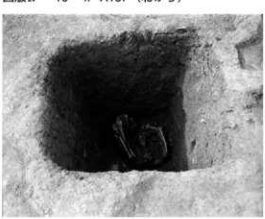


図版Ⅳ－10　3. A162（北東から）



図版Ⅳ－10　4. A167（北から）

図版Ⅳ－10　5. A193 土層（西から）



図版Ⅳ－10　6. A194（南から）

図版Ⅳ－10　7. A195（東から）

図版Ⅳ－10　8. A241（北から）

図版Ⅳ－11　1. 仏像頭部出土状況

図版Ⅳ－11　2. 火葬骨出土状況

図版Ⅳ－11　3. 火葬骨壺出土状況

図版Ⅳ－11　4. 薬缶出土状況

図版Ⅳ－11　5. G区経塚周溝底部ベルト（南から）

図版Ⅳ－12　1. Aトレンチ土層（北から）

図版Ⅳ－12　2. Cトレンチ（北西から）

図版Ⅳ－12　3. D-1トレンチ土層（北西から）

図版Ⅳ－12　4. D-3トレンチ土層（北東から）

図版Ⅳ－12　5. Fトレンチ（北西から）

図版Ⅳ－12　6. Fトレンチ（南から）

図版Ⅳ－12　7. Gトレンチ（東から）

図版Ⅳ－12　8. トレンチ設定状況（北から）

図版Ⅳ－13　1. B 区近代墓（西から）

図版Ⅳ－13　2. B 区近代墓（北から）

図版Ⅳ－13　3. B 区近代墓墓標出土状況 1

図版Ⅳ－13　4. B 区近代墓墓標出土状況 2

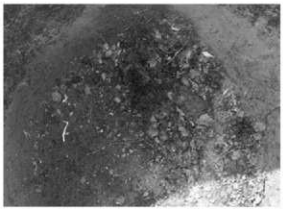
図版Ⅳ－13　5. B201 甕棺出土状況（北から）

図版Ⅳ－13　6. B201 人骨出土状況（北から）

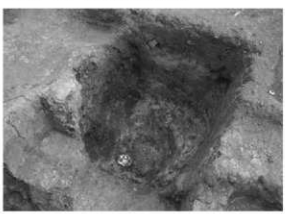
図版Ⅳ－13　7. B201 石蓋

図版Ⅳ－13　8. B203 土壙墓（西から）

図版Ⅳ－14　1. B202（南から）



図版Ⅳ－14　2. B202 数珠出土状況

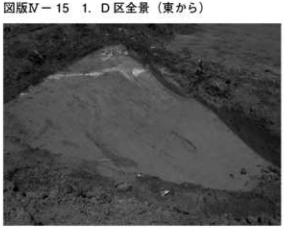


図版Ⅳ－14　3. B214 掘方（南東から）

図版Ⅳ－14　4. B214 人骨出土状況（東から）

図版Ⅳ－14　5. C 区全景（東から）

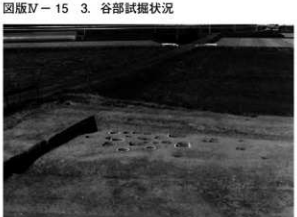
図版Ⅳ－15　1. Ｄ区全景（東から）



図版Ⅳ－15　2. Ｆ区全景（南西から）

図版Ⅳ－15　3. 谷部試掘状況

図版Ⅳ－15　4. Ｅ区全景（南東から）



図版Ⅳ－15　5. Ｅ区西端部遺構出土状況（南から）

図版Ⅳ－16　1. E区竪穴式住居群（南から）

図版Ⅳ－16　2. SC001 床面（西から）

図版Ⅳ－16　3. SC001 掘方（西から）

図版Ⅳ－16　4. SC002 床面（西から）

図版Ⅳ－16　5. SC002 掘方（西から）

図版Ⅳ－16　6. SC002 カマド

図版Ⅳ－16　7. SC002 カマド基底部（西から）

図版Ⅳ－16　8. SB01（西から）

Ⅴ 第 38 次調査の報告

1．調査の概要

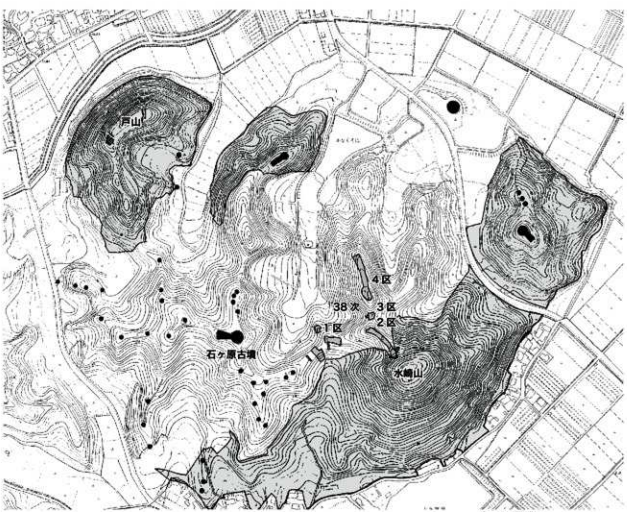
(1) 調査の経緯

元岡・桑原遺跡群の南東に位置する水崎山 (標高 95 m) は、『筑前続風土記拾遺』(以下『拾遺』) に記述がある水崎古城に比定され水崎城として知られる。また水崎山の北西 800 mには地元で戸山と呼ばれる標高 74 mの小山があり、「戸山城」として言及されている。(注)

九州大学の移転計画では、水崎城の中心的遺構については現状保存が図られ、戸山城の山頂周辺については造成計画の範囲外である。ふたつの山城の主郭は九州大学構内に保存される。(図Ⅴ - 1)

両者は単郭構造の小規模な城郭に分類され、水崎城は山上周辺以外に遺構は確認されていない。(注) 二つの山頂からは痩せた尾根が派生し、石ヶ原古墳がある頂部を経由して連続した一つの山塊を成している。平成 15 年までに石ヶ原古墳の周辺の尾根上では古墳群を調査し、その際に周囲の伐採、試掘を行ったが山城に関連する遺構は確認できなかった。水崎山から北に派生する未調査の尾根には平坦部が観察されたため、工事に先行した伐採・確認調査を第 38 次調査として実施した。

調査は 1 区を濱石、菅波が担当し平成 16 年 3 月 8 日から開始し断続的に実施した。2 区から 4 区は主に池田が担当し、第35 次調査と平行して平成 16 年 10 月 15 日から同 17 年 1 月 17 日まで行った。



図Ⅴ－1　第 38 次調査地点位置図 (1/7000)

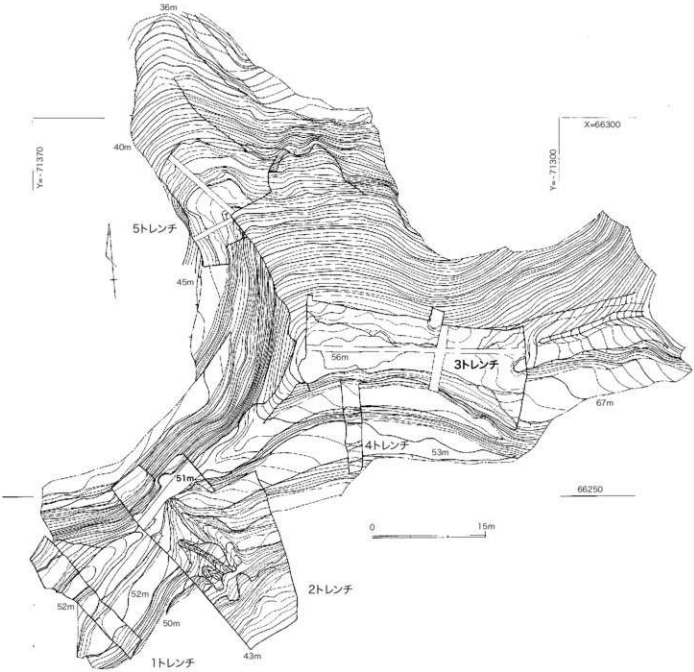
図Ⅴ－２　第 38 次調査地点全体図 (1/2000)

(2) 歴史的背景と現状

水崎城については、永享年間 (1429 － 1441) 頃と考えられる大友親綱感状 (改正原田付録) に水崎城衆中が水崎城で大友氏側として奮戦したことが知られ、水崎城が水崎の地に築かれた城郭とされている。さらに永正 4 (1507) 年、享禄 4 (1531) 年にもこの地で合戦があったと考えられる記録がある。(注)『拾遺』では水崎古城と題して「水崎人家の南にある丸山也。山上に平地有。縁有て回れり」とし、この城に関係すると思われる事項を簡単に記している。現在の水崎の人家の南側は干拓地であり、集落の北に位置する水崎山が上記の文献の水崎城と今日考えられている。その山頂には現状で平地があり、一部くぼ地がみられる。測量も含め調査には至っていない。山頂からは急な斜面となり、これまでも指摘されているように頂部の平坦地以外の造成を表面観察では確認できていない。斜面では竪堀状の痕跡も確認していない。派生する尾根の谷部には尾根近くまで耕作に伴う段造成がおよび、地形の改変も大きい。

(3) 調査の方法

上記の現状から遺構の存在を予想できる箇所はなく、尾根上と鞍部の傾斜が緩やかな部分 4 箇所について発掘調査を行い、1 区から 4 区とした。図Ⅴ－２で密な等高線の範囲が新たな測量範囲で、枠内が調査区である。1 区は伐採の後に平板による現況測量を行い、平坦地を中心に 4 つのトレンチを設け人力による掘削を行った。2 区から 4 区は伐採の後に航空測量・写真撮影、頂部での重機による試掘、頂部を中心とした重機による表土剥ぎの後に人力による掘削を行った。検出した遺構は 1 区で溝状のくぼみ、2 区では尾根を横断する溝、3 区では溝状のくぼみと土坑、4 区では土坑 2 基である。



図Ⅴ－３　１区全体図 (1/500)

２．１区の調査

水崎山から北西に延びた尾根が西に派生し、鞍部を経て元岡古墳群Ｎ群 (第 29 次調査) に続く。この鞍部付近を１区とし、測量後に５箇所のトレンチを設定した。(図Ⅴ－３)

１トレンチ　鞍部西側の尾根平坦部を横断するトレンチである。厚さ２０㎝から３０㎝ほどの表土を除去すると地山となり、遺構は確認できなかった。

出土遺物　３は近世の染め付け片で内面に平行線が描かれる。他に石斧の破片と考えられる頁岩の剥片が１点出土している。

２トレンチ　鞍部の南側斜面に溝状のくぼみがあり、ここを中心に設定した。下部では耕作に伴う造成が行われている。30 から 100㎝ほどの表土と造成土を除去して地山に達した。全体に谷地形をなし、鞍部中央から南側斜面に溝状の遺構がみられる。また、その西側にも浅い溝が見られる。溝状遺構は尾根頂部付近の壁の立ち上がりは明確で、頂部で幅 90㎝、深さ 50㎝ほどを測り、断面は丸

みを帯びたＶ字状である。頂部から４、５ｍほどの立ち上がりは明確だが、下部ほどなだらかな谷状となる。北側斜面には続かない。また遺物は出土していない。

出土遺物（図Ｖ－４）１、２と５から11は２トレンチ出土の遺物である。１は須恵器で古代の坏と考えられる。２、５は近世染め付けの碗で、見込みには圏線と手書きの文様を描く。６、７は陶器の碗。６は褐釉を施し、外面下部は露胎、内面は輪状に掻き取る。７は外面に褐釉を施し下部は露胎で、削り痕がみられる。８は陶器の甕片で外面には浅い平行叩き、内面には明瞭な当て具痕が残る。器面はくすんだ灰橙色である。９、10は陶器のすり鉢である。９は口縁部のみ薄い茶色を呈し、磨り目は浅い。10は内外面にガラス質の強い釉を施し磨り目が深い。11は細粒砂岩の礫で、擦痕や面状の部分があるため取り上げたが用途不明である。１以外は近世から近代のもので、他にも磁器、陶器片があるが同様である。

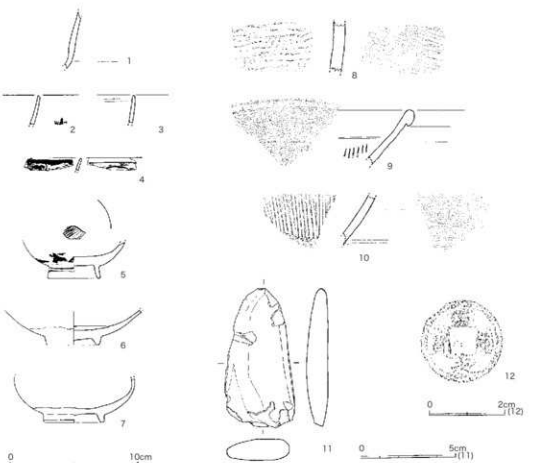
３トレンチ　尾根が分岐する標高56ｍを測る平坦部に設定した。目立った遺構はなく、北側の落ち際に礫が広がり、その径３ｍほどの範囲に焼土塊が散乱する。焼土塊は５㎝大ほどで砂粒を多く含む。

出土遺物　12は銅銭で寛永通宝である。他に表土から若干の近世以降の陶器、磁器片が出土した。

４トレンチ　３トレンチの南側の段造成が見られる斜面に設定した。表土を除去し削平と盛り土の状況が確認できた。近年の造成と考えられる。遺物は出土していない。

５トレンチ　３トレンチの頂部から北西に派生する尾根上で、傾斜が緩やかな部分に設定した。10から30㎝ほどの表土を除去した地山面はやはり緩傾斜となる。遺構は確認できなかった。

出土遺物　４は近世の染め付け碗と考えられる小片である。他に磁器の小片が３点出土している。

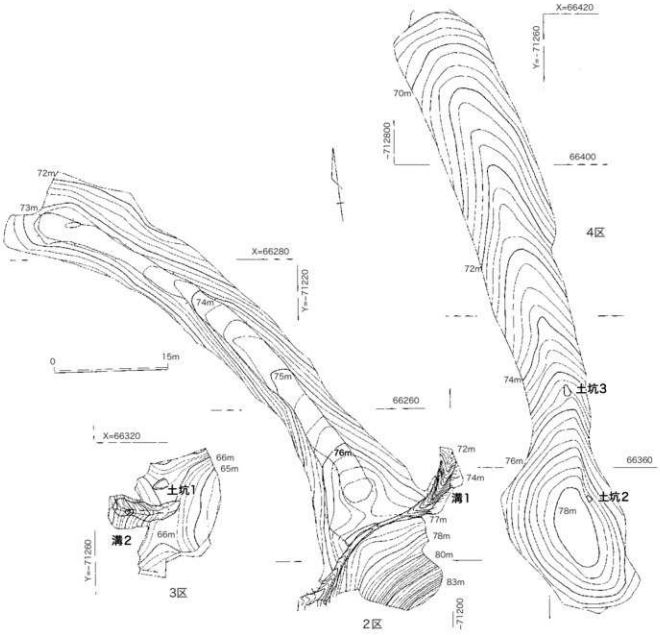


図Ｖ－４　１区出土遺物(1/3、1/2、1/1)

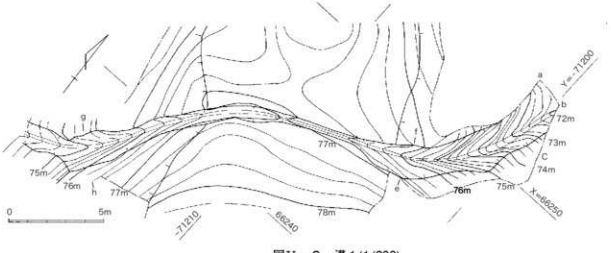
３．２区の調査

水崎山の北側斜面の傾斜が弱まり、平坦な尾根状を呈す箇所に調査区を設定した。東西両側は急な斜面となる。調査区の標高は水崎山斜面の 83.5 mから下と尾根平坦部の 77 mから 73 mである。頂部で行った試掘では、20cmから 30cmの表土下で花崗岩の地山となり、明確な遺構を確認することができなかった。このため重機で頂部を中心に可能な範囲で表土を除去したのち人力での遺構検出を行った。その結果、水崎山斜面からの尾根基部で尾根を横断する溝を検出した。その他に遺構は検出できなかった。調査面積は 748㎡である。(図Ⅴ - 5)

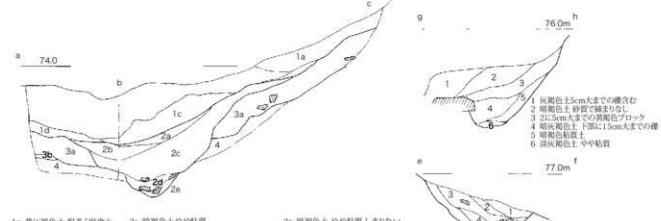
溝 1 (図Ⅴ－６・７)　尾根を横断する延長 29 mを確認した。遺物は出土していない。西側斜面では平坦部から延長 10 mほどを確認し、耕作に伴う造成により削平を受けて途切れる。上端は広い箇所で幅 1.8 m、深さ 90cm、底幅 40cmほどを測り断面逆Ｖ字形に近い。覆土は灰茶褐色の粘質土である。



図Ⅴ－５　２・３・４地点全体図 (1/500)



図Ⅴ－6　溝１(1/200)



図Ⅴ－7　溝１土層図(1/60)

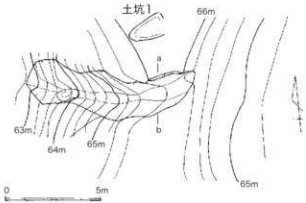
平坦部よりの断面北側には10cm前後の角礫が溜まった部分がある。平坦部では溝の延長９ｍほどで、上端の幅45cmから75cm、深さ10cmから25cm、底幅10cmを測る。削平を考慮しても浅い。東側斜面は孤を描きながら北東に延びる。調査区の東端で幅2.5ｍ、深さ160cm、底幅10cmほどを測る。断面および底の傾斜は急で断面Ｖ字形を呈す。東側は調査区外の保存緑地に伸びる。

４．３区の調査

２区から北に延びる尾根の鞍部に調査区を設定した。標高66ｍを測り、２区平坦部の北端との比高差は７ｍで急な斜面である。試掘の後に平坦部を中心に20cm前後の表土を剥ぎ、花崗岩の風化土上面で焼土坑、溝状遺構を検出した。調査面積は80㎡である。

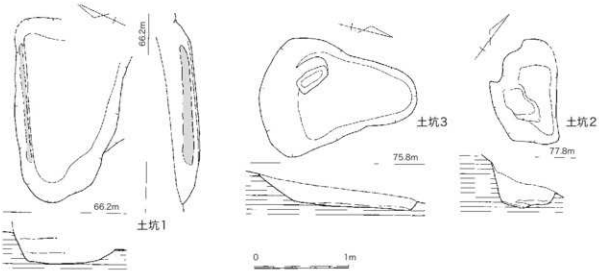
溝２(図Ⅴ－８・９)　尾根の頂部から西側に９ｍを確認した。東西端とも斜面へ途切れる。上端幅２ｍから2.5ｍ、深さ75cm、底幅60cmを測り、断面は浅いＵ字形を呈す。２区の溝１ほど顕著な掘り込みではない。覆土は小礫混じりのやや粘質の土で遺物は出土していない。

土坑１(図Ⅴ－10)　溝２の北２ｍに位置する。西側の短辺が狭まる不整長方形を呈し、東側の一部は造成により撹乱を受ける。長軸190cm、最大幅125cm、深さ35cmを測る。覆土は黄茶褐色土でや



図Ⅴ－8　溝2(1/200)

図Ⅴ－9　溝2土層図(1/60)



図Ⅴ－10　3・4区土坑(1/40)

や粘質があり、底付近は炭粒が混じる。北側の壁が焼けている。遺物は土師器の小片が出土したが図化していない。土師皿片と考えられる。

5．4区の調査

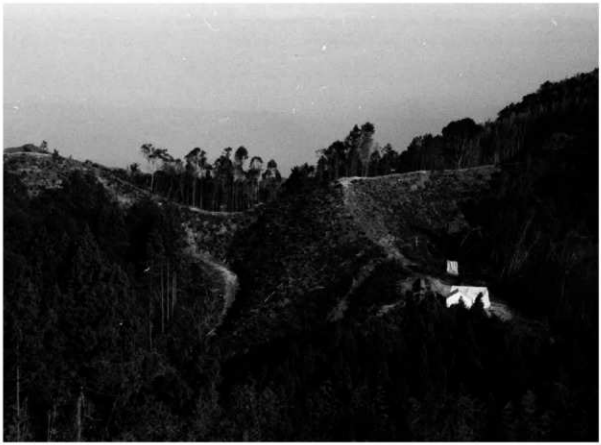
3の北に延びる尾根頂部に設定した。3区から12mの比高差で標高78.3mの小頂部となり、そこから尾根は緩やかに下がり、傾斜が強まる標高69m付近までを調査区とした。厚さ25cmほどの表土を除去し、花崗岩風化土の面で2基の土坑を検出した。遺物は出土していない。調査面積は747㎡である。

土坑2(図Ⅴ－10)　調査区南側の頂部東斜面で検出した不整形の土坑で、長さ100cm、幅70cm、深さ40cmを測る。黄茶色の締まりがない土が覆土で自然による可能性がある。

土坑3(図Ⅴ－10)　尾根上の標高75mで検出した。不整形を呈し長軸170cm、最大幅125cm、深さ30cmを測る。南側の壁が焼けて薄く赤みを帯び、覆土下部には炭粒を多く含む。焼土坑である。

注)

1988「水崎」『角川日本地名大辞典40福岡県』
中西義昌 1999「天正中・後期における筑前国志摩郡城郭の様相」服部英雄編『地域資料行書4筑前国怡土庄故地現地調査速報』
山崎龍雄 2000「福岡市内の中近世城館」『香椎B遺跡』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集



図版Ｖ－１　３８次調査遠景（北西から）

図版Ｖ－２　１区全景（北から）

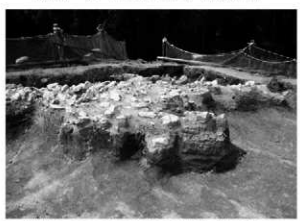
図版Ｖ－３　水崎山・調査地点遠景（北西から）

図版Ｖ－７　１区から２区（南西から）

図版Ｖ－４　１区全景（北東から）

図版Ｖ－８　１区５トレンチ（南東から）

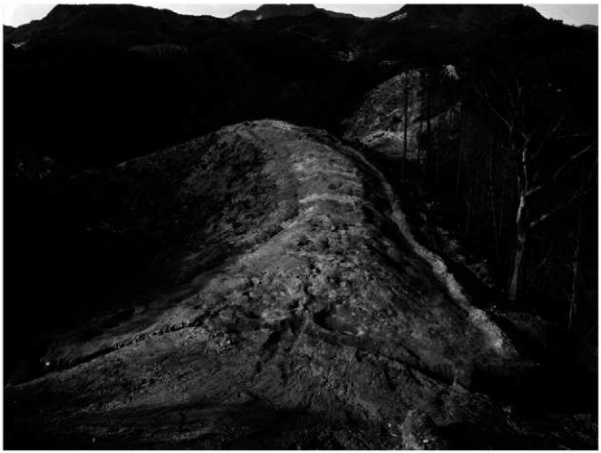
図版Ｖ－５　１区２トレンチ溝状部断面（南東から）



図版Ｖ－９　１区３トレンチ礫群（南東から）

図版Ｖ－６　１区２トレンチ南半（東から）

図版Ｖ－10　２区溝１頂部（北東から）



図版Ⅴ－11　２区全景（南から）

図版Ⅴ－12　２区溝１（東から）

図版Ⅴ－14　２区溝１土層（東から）

図版Ⅴ－13　２区溝１（西から）

図版Ⅴ－15　２区溝１西側斜面（西から）

図版Ⅴ－16　２区溝１（西から）

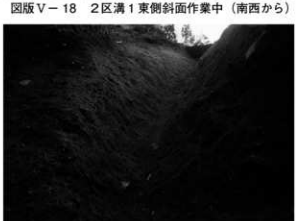
図版Ⅴ－20　２区溝１東側斜面土層（南西から）

図版Ⅴ－17　２区溝１東側斜面（北東から）

図版Ⅴ－21　３区全景（南から）

図版Ⅴ－18　２区溝１東側斜面作業中（南西から）

図版Ⅴ－22 ３区溝２作業（南から）



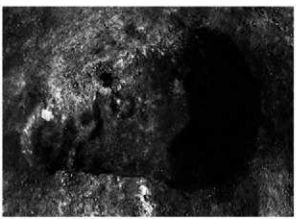
図版Ⅴ－19　２区溝１東側斜面下部（北東から）

図版Ⅴ－23　３区溝２作業（東から）

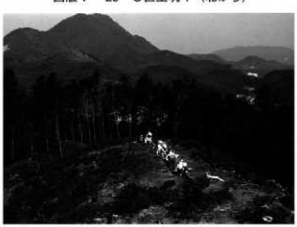
図版Ⅴ－24　３区溝２（西から）

図版Ⅴ－28　４区北端頂部・土坑２（北から）

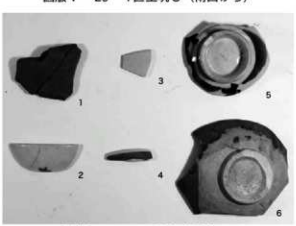
図版Ⅴ－25　３区土坑１（北から）



図版Ⅴ－29　４区土坑３（南西から）

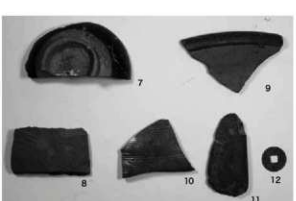


図版Ⅴ－26　４区試掘（南から）



図版Ⅴ－30　１区出土遺物１

図版Ⅴ－27　４区全景（南から）



図版Ⅴ－31　１区出土遺物２

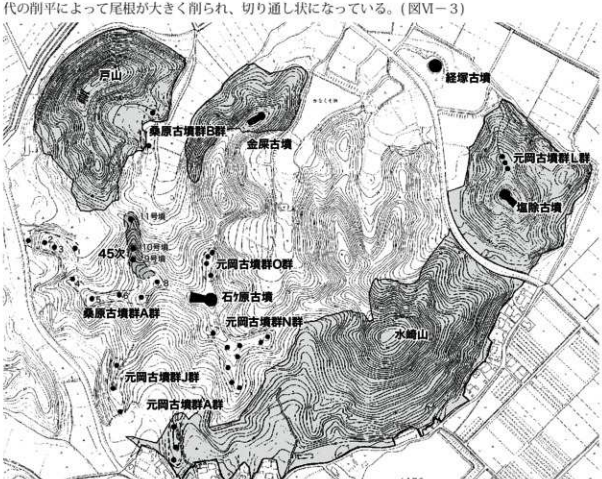
Ⅵ 第 45 次調査の報告

1．調査の概要

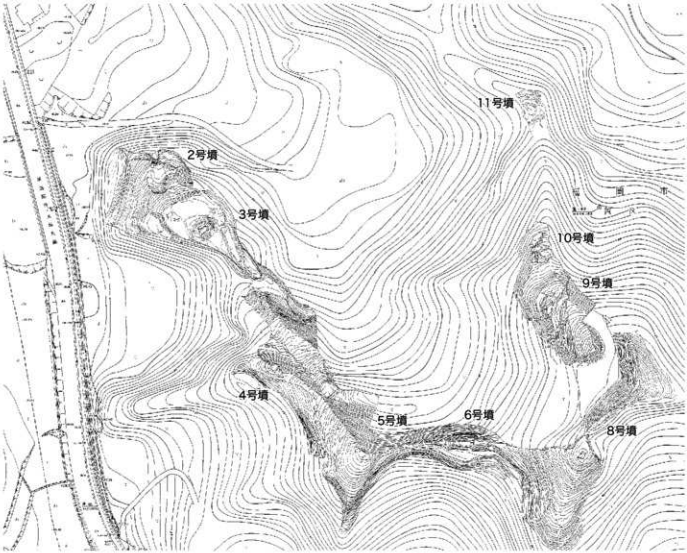
調査の経緯　平成 7 年度末に開始した九州大学移転に伴う元岡・桑原遺跡群の埋蔵文化財調査は、丘陵地で古墳等が確認できた部分と平地部分について試掘・伐採終了後に調査を行ってきた。平成 15 年度までに 38 次におよぶ発掘調査を実施し、福岡市土地開発公社の造成予定地内でそれまでに遺跡が確認できた箇所の調査は終了を迎えつつあった。残る山稜部については、樹木が茂ったままの状態で踏査を行っていたため、17 年度は伐採が終了した部分をそのつど重機による試掘を実施し、遺跡を確認した箇所から順次調査を実施する体制で臨んだ。7 月には今回の 45 次調査を行った尾根上で溝状の遺構・土師器を確認し、造成工程の都合で他に先立って古墳 (11 号墳) の調査を 7 月 20 日から 7 月 27 日に行った。その後、伐採が終了した箇所の試掘を継続し、同じ尾根上で須恵器が出土して古墳の存在が予想された。墳丘を確認できなかったために重機で表土を除去し、古墳 2 基を確認した。引き続いて調査を 9 月 1 日に開始し 11 月 22 日に終了した。

これらの古墳は標高 72 m の頂部から北に派生する尾根上に位置する。この頂部から西に延びる尾根上には桑原古墳群 A 群が点在し、第 18・25 次調査で古墳 8 基が調査されている。今回確認した 3 基も A 群に含め、南から 9 から 11 号墳とした。(図Ⅵ－ 1)

古墳が立地する尾根は、両側面が急な斜面で痩せており、さらに耕作等による造成で段造成の跡が見られる。特に 11 号墳付近の造成は著しく、全壊した古墳もあると考えられる。8 号墳の北側は近代の削平によって尾根が大きく削られ、切り通し状になっている。(図Ⅵ－ 3)



図Ⅵ－ 1　第 45 次調査地点位置図 (1/7500)



図Ⅵ－２ 桑原古墳群Ａ群全体図 (1/1500)

また９号墳に近接して丘陵を横断する溝を検出した。出土した遺物は９号墳に伴うものが多いが後世の遺構と考えられる。出土遺物については９号墳の項で、遺構については最後に触れている。

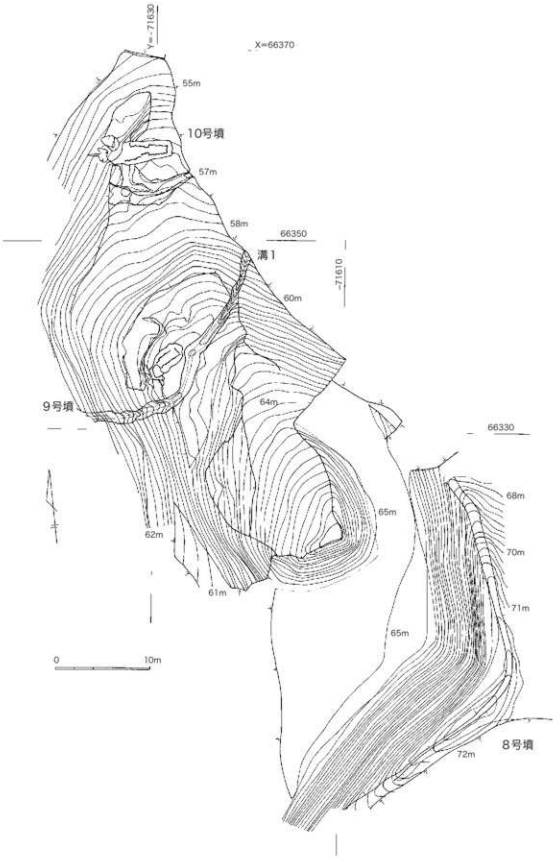
２．９号墳

（１）立地と現況 (図Ⅵ - ４)

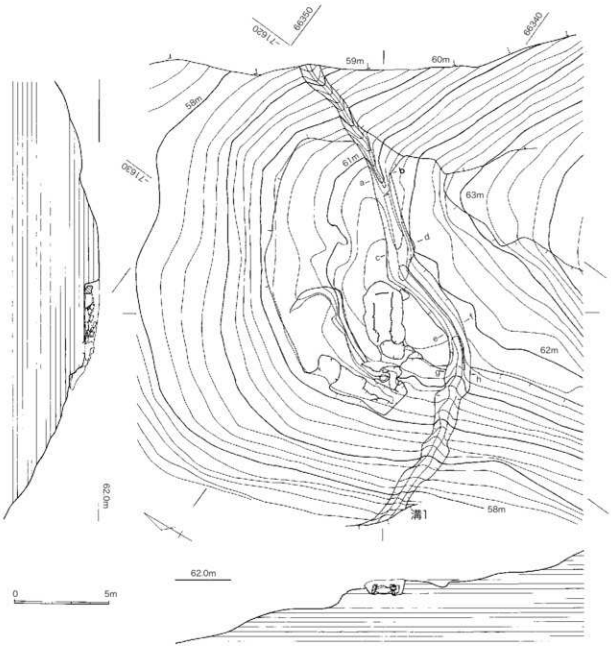
９号墳は尾根頂部のやや西より、標高 62 mに位置する古墳である。尾根頂部の８号墳とは 50 m ほど離れ、標高差は 10 mほどである。調査前は尾根筋には雑木、東側斜面は杉、西側は竹林であった。墳丘は残存せず、表土除去時に出土した石材の周囲を手掘りで表土掘削を行い、南西方向に開口する横穴石室を検出した。石室の遺存は悪く、石材の抜き取りおよび周辺の削平が行われている。また、石室の南側に幅 1.5 mほどの溝を検出したが、位置的に周溝ではない。周囲の平坦面は後世の削平が加わっていると考えられるが、古墳築造時に緩傾斜部分を選び、地山成形を行っていると考えられる。

（２）墳丘 (図Ⅵ－４)

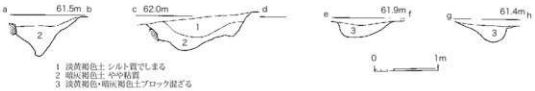
墳丘盛土は失われ、周溝は確認できなかった。地山成形によると考えられる平坦面は、北側に幅１mほどの平坦部が残るが攪乱により削平を受けており、元の規模はやや広がると考えられる。南側は後世の溝で攪乱されているが幅２mの平坦面が想定できる。径６m前後の円墳であったものと考えられる。



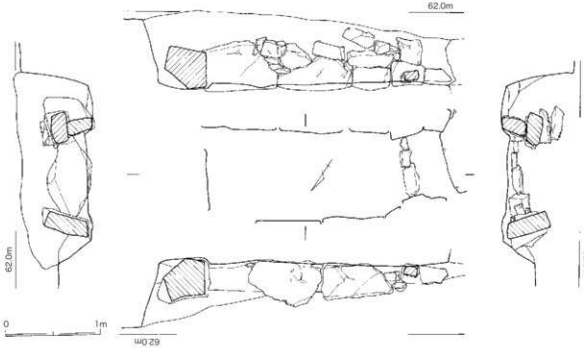
図Ⅵ－3 第45次調査地点南側全体図(1/400)



図Ⅵ－４　９号墳全体図 (1/200)



図Ⅵ－５ 溝土層図 (1/60)

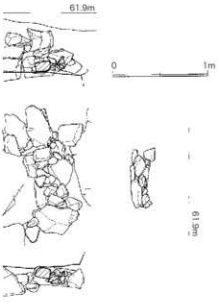


図Ⅵ－６　９号墳石室 (1/40)

（３）横穴式石室（図Ⅵ－６・７・８）

９号墳の埋葬施設は主軸をＮ－ 120°－Ｗにとり、西側斜面に開口する単室の横穴式石室である。石室上部はほとんど失われ、腰石が北西隅を除いて残存している。羨道部には撹乱があり、側壁１個分のみが残存している。墓道部分にも撹乱がある。石室の残存長は右壁で 2.25 m、左壁で 2.5 mである。石材は花崗岩を主体とする。

石室堀方　堀方は平坦面のやや西よりを掘削した長さ 3.35 m、幅 2.05 mの平面不整長方形で、羨道・墓道部分の堀方に続いている。奥壁と左側壁は堀方いっぱいに置かれ、右側壁はやや余裕がある。堀方の基底面はほぼ平坦である。また奥壁・右側壁の石材構築部は溝状にくぼんでいる。

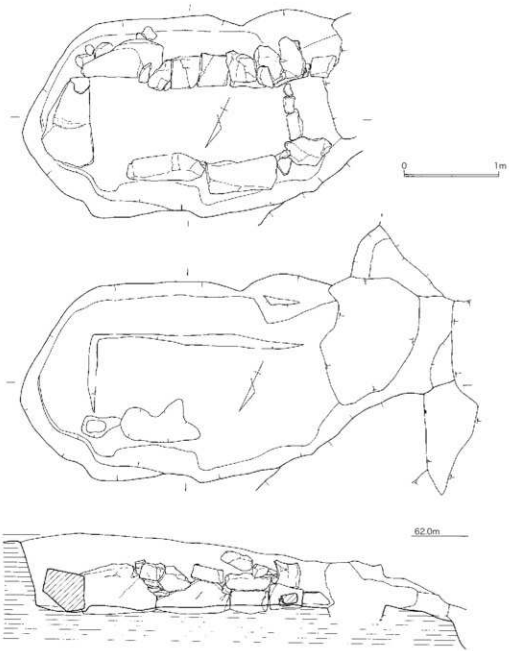


図Ⅵ－７　９号墳閉塞石 (1/40)

玄室　奥推定幅１m、前幅 0.77 m、左壁推定長 2.05 m、右壁長 1.92 mと奥壁側がやや広い長方形の平面形を呈する。右側壁に２段目が残存する以外は腰石のみが残っている。奥壁は高さ 46㎝、幅 96㎝の腰石で、左側壁もほぼ同規模の腰石を据える。これに対し右側壁は奥の１つを除いて小型の石材を用いている。玄門部は玄室から連続して狭まり、仕切石に相当する部分には高さ 13㎝、幅 14㎝、長さ 34㎝の角礫を最大とする３個の礫を配している。敷石はなかった。

羨道　腰石は両側面とも高さ 20㎝程と小振りとなる。仕切石からの延長 35㎝を確認したが、撹乱により全長は不明である。また、閉塞石として５から 10㎝大の礫が使用されている。

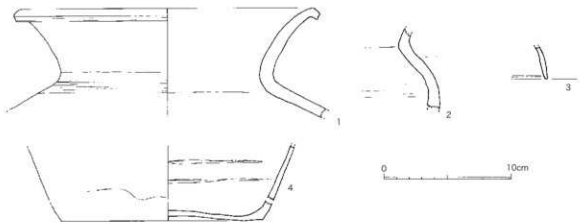
墓道　羨道部の撹乱の西側に幅 103㎝の墓道の堀方が残る。床面は外側へ下がり、さらに撹乱に切られ、確認できた延長は 50㎝である。



図Ⅵ－８　９号墳石室俯瞰、堀方 (1/40)

（４）出土遺物 (図Ⅵ - ９)

主に溝１・墓道から出土し、石室の埋土からはほとんどない。器形が分かるものを図示した。１から３は須恵器である。１は甕の口縁部から頸部で 1/6 弱からの復元口径は 23cmである。墓道と溝１の破片が接合した。２は壷の肩部で２㎜大の砂粒が目立つ。３は坏蓋で内面に浅い段がめぐり、器面は灰茶色である。４は朝鮮時代の陶器で平底の底部である。器壁は薄く若干の上げ底である。底部外面は露胎で茶色を呈し、内面は薄く淡緑色の釉がかかる。同一個体と考えられる胴部片の外面には淡い灰黄褐色の釉を施し、内面は灰色で沈線状の調整痕が見られる。さらに上部の破片であろうか内面に輪状の細かなろくろ痕があるものがある。同一個体の破片は溝１の平坦部西側と西側斜面から出土している。図示した他に、須恵器の甕の破片、土師器片が少量出土している。



図Ⅵ－９　９号墳出土土器 (1/3)

３．10 号墳

（1）立地と現況 (図Ⅵ－ 10)

10 号墳は標高 57 mの尾根筋頂部に位置し、9 号墳とは斜距離で 11.5 m離れ、標高は 5 mほどの差がある。尾根の傾斜がやや緩やかな部分に築かれた古墳で、石室周囲は平坦で、東側は造成崖面となる。墳丘は残存せず、表土除去時に石室石材を確認することで南西方向に開口する横穴石室を検出した。石室の南側には周溝が巡る。

石室は天井部の石材は抜き取られ、周辺は削平が行われていると考えられる。周囲は古墳築造または削平による若干の平坦部を成すが、元からの緩傾斜部分を選んだものと考えられる。

（2）墳丘 (図Ⅵ－ 10)

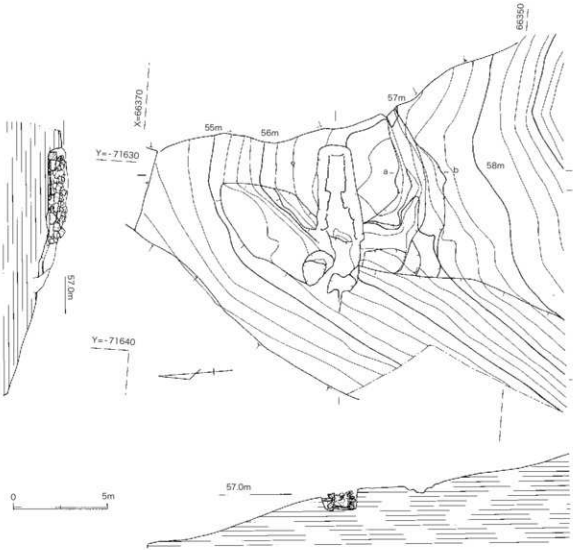
表土を除去した時点で地山に達し、墳丘盛り土を確認することはできなかった。石室南側には周溝との間に 2.5 mほどの平坦面が見られる。後世の削平を受けている可能性があるが、地山成形面に近いと考えている。

周溝は石室南側に尾根を横断して掘られている。土層断面図に見られるように幅 2.3 m、深さ 60 ㎝ほどの規模で、西側は広がり平面形は不明瞭となる。開口部付近では上端の平面形が石室の主軸と直角方向に伸びている。周溝の底から石室の主軸までの距離から径 8 mほどの円墳と考えられる。

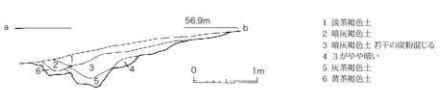
（3）横穴式石室 (図Ⅵ－ 12 ～ 14)

10 号墳の埋葬施設は主軸をN － 88°－Wにとり、西側斜面に開口する単室の横穴式石室である。石室上部は失われているが、堀方の高さから下は残存している。図版Ⅵ－ 17・18 のように羨道部の天井石や側壁で原位置を動いたものがあった。それらについては図に示していない。墓道部分には攪乱がある。石室の全長は右壁 4.4 m、左壁残存長 3.9 mである。石材は花崗岩を主体とする。

石室堀方　堀方は平坦面のやや北西寄りを掘削し、羨道部部分は幅が広がり、斜面に向かって開いている。玄室部は幅 1.9 mの平面長方形状で、前庭部は幅 2.5 mほどである。腰石は堀方いっぱいに置かれ、左側壁はやや余裕がある部分がある。堀方の基底面はほぼ平坦で、左奥の腰石 3 個を据えた箇所は部分的に掘りくぼめている。羨道部には不整円形のくぼみがあり、開口部から墓道に向かって緩やかに下がる。

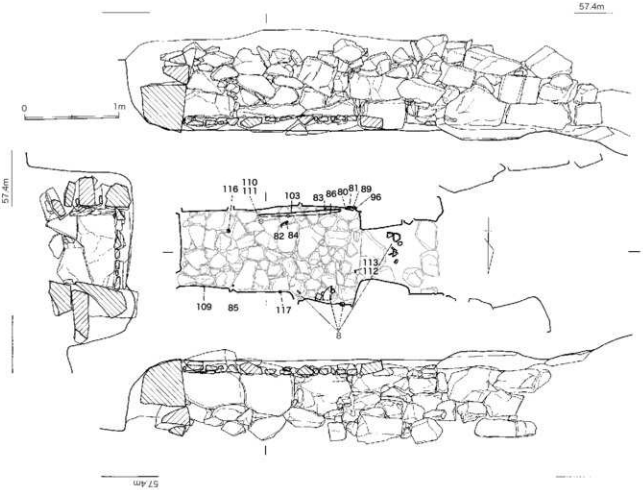


図Ⅵ－10　10号墳全体図(1/200)



図Ⅵ－11　10号墳周溝土層(1/60)

玄室　奥幅78cm、前壁幅103cm、左壁長185cm、右壁長190cmと奥壁側が狭い平面長方形を呈す。奥壁の腰石は高さ60cm、幅80cmと側壁より大きく、その上に高さ30cm大の角石を積み、高さ75cmが残存する。左側壁は奥の1石が奥壁とほぼ同じ高さである他は、高さ25cm、奥から幅75、60cmの二つの横長の石を配す。右側壁は高さ約60cm、幅約60cmほどの大きさの揃った3つの石を内側に向けている。2段目から上は左右両側面とも図Ⅵ－14の石室俯瞰図に見られるように縦長の礫の短い面を石室内に向けて重ねている。内面から見ると20から40cm大の角石を重ね、段と呼ぶには



図Ⅵ－12　10号墳石室1(1/40)

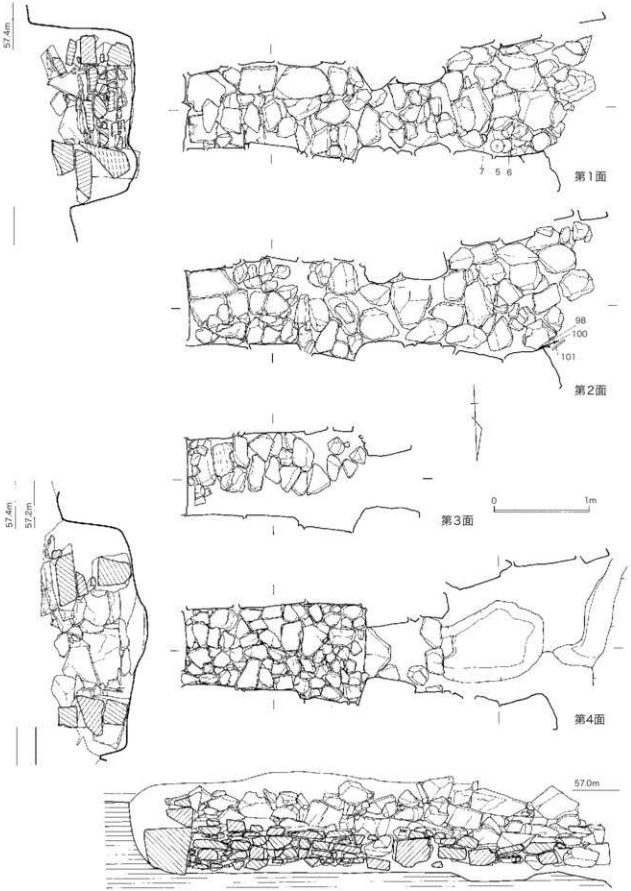
高さが揃わず、やや雑然とした感がある。玄門部は両袖で、高さ30cmほどの左側壁の腰石と同規模の石を配する。袖幅は左右とも25cmほどである。床面は不確実な部分もあるが4面を確認した。

第1面　標高56.6 m付近のほぼ奥壁の腰石の高さで玄室全面に敷石を確認した。右側には50から60cm大の大型の礫を配し、他は20から30cm大の礫が主体である。面としてはやや高低差があり左側が5cm前後低い。中央にはこの面の上に4個の20cm大の角礫が並んでいる。羨道との境は不明瞭である。(図版Ⅵ－19)

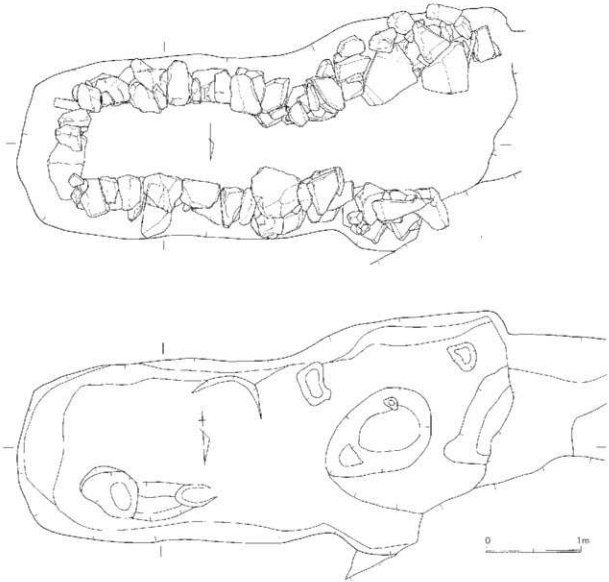
第2面　第1面の敷石の直下で礫が面をなす。第1面からは10から15cmほど低い。右奥に大型の礫を配する他は20から40cm大の礫を敷く。中央奥半分には20cm大の礫が並ぶように配され、周囲を埋めたような配置である。玄門側半分には横方向に礫の長軸を向け、羨道部との差異がある。

第3面　第2面より10cm前後下の高さで右側2/3の範囲にのみに礫を敷いている。玄門側の礫は疎らで、奥の敷き詰めた範囲は60 × 130cmの長方形の範囲である。周囲は第四面のままで屍床として構築した可能性もある。

第4面　第3面の敷石直下の標高56.3 mで検出した。30から40cm大の礫もあるが、15から20cm大の小さめの礫が多く、上面よりも密に敷き詰めた感がある。この面上の右側壁に沿って鉄刀などの副葬品が出土している。



図Ⅵ－13　10号墳石室２(1/40)



図Ⅵ－14　10号墳石室俯瞰・堀方 (1/40)

羨道　仕切石間の羨道部は墓道側がやや開き気味だがほぼ平行し、前庭部は大きく開く。側壁は幅60cm、高さ25から40cmの礫を腰石とし、右側壁は玄室から連続した様子である。左側壁の最も西側は削平を受けて失われている。床は全面にやや雑に礫を敷いており、3面を確認した。

第1面は玄室の第1面の図に示した。後半部は玄室とほぼ同じ高さで、前半部は下がる。全体が同じ面かは不確実である。30から40cm前後の礫が多く、面が水平でないものがある。前半部左側壁の際に須恵器の蓋が正置した状態で出土している。後半部には15cm大の小振りの礫が見られ、閉塞石の可能性がある。

第2面の後半部は玄室の第2面より5cm前後高く、30から40cm大の大きめの礫を配す。前半部は30cm大の礫を配し、中央部は長軸を横方向、側壁沿いには縦方向に配す傾向がある。

第3面は仕切石のみで敷石はない。前半部には浅いくぼみが見られる。玄室の第3、4面に対応する。第1仕切石は30cm大の礫2個を配し、第2仕切石は1個で仕切る。羨道幅は玄門部で53cm、第1仕切石部分で77cm、左側壁が切れる部分で136cmである。仕切石の外側の距離が80cmで羨道部の延長となる。前庭部は右側壁が直線距離で190cm。左側壁は105cmが残存する。

図Ⅵ－15　10号墳周溝・墓道遺物出土状況 (1/50)

墓道　羨道端部から 2.6 mは右側斜面を掘り込み、墓道の延長が確認できる。左側は攪乱があり、傾斜により掘り込みがない。覆土には若干の炭を含み、須恵器を中心とした土器が出土している。

（4）遺物

出土状況（図Ⅵ－ 12、13、15）

石室内は羨道第 1 面、玄室第 4 面で原位置を留めて出土したものがあるが、それ以外は埋土に少量入るくらいである。前庭部では第 1 面左側壁沿いで須恵器の蓋 5、6 が正置した状態で出土した。原位置に近いと考えている。第 2 面左壁沿いでは鉄鑿 100、鉄刀 98、101 が出土した。98、101 は折れており玄室から掻き出されたものと考えられる。

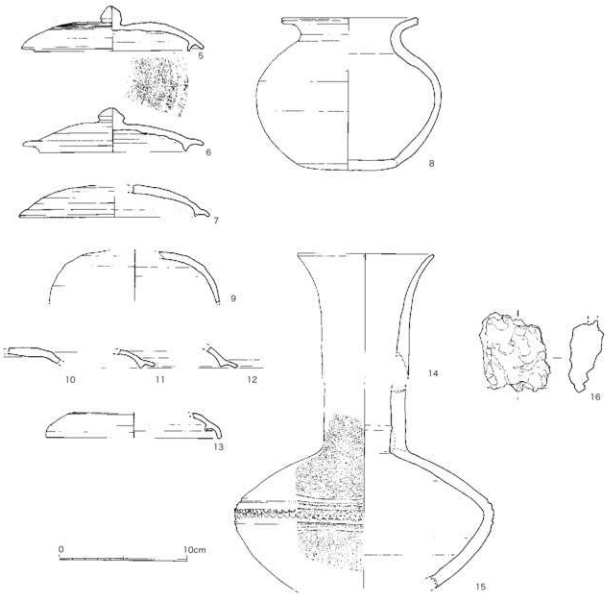
玄室では第 4 面で鉄刀と須恵器、鉄鏃、金環、玉類が出土した。鉄刀 103 は右側壁に沿って鋒を奥に向けて床に接し、柄は 5cmほど浮く。この周囲で鉄鏃が出土している。敷石の間に入り込んだ金環 117、棗玉 112・113 もある。また、須恵器壷 8 は玄室左側壁際と仕切石間で出土した破片が接合した。第 4 面の覆土はふるいにかけ、玉、鉄製品を採集した。このほかの面では覆土中から須恵器の小片が少量出土したが原位置を保つものではない。

墓道からは少量の須恵器が破片で出土し、周溝出土の破片と接合するものが多い。周溝からは須恵器を中心とした土器が多く出土した。ほとんどの遺物は地山から 20、30cmほど浮いた状態で出土し、破片である。図Ⅵ－ 15 上は主に甕、同下はそのほかの器種の接合した破片の位置を示した。大まかなグループで取り上げを行ったため、線が示す位置はおよその場所である。特に甕は破片が広範囲に広がるものがある。坏身 18・19、20・21 はセットで地山に近い位置に正置した状態で出土している。

土器（図Ⅵ－ 16 ～ 20）

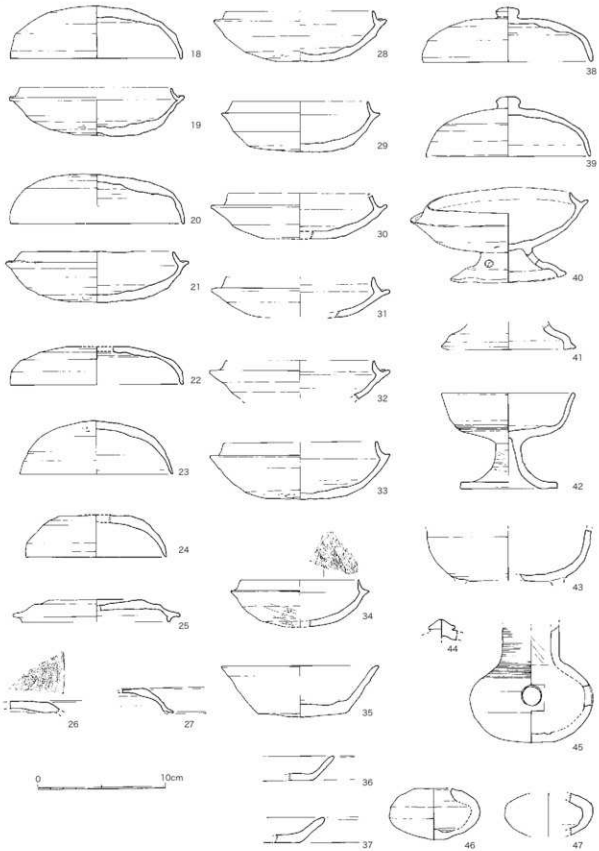
5、6 は前庭部第 1 面出土で最終埋葬時に近い時期を示すと考えられる。須恵器の蓋で両者とも口縁部の一部を欠く。5 は内面天井部隅にヘラ記号が彫られる。外面天井部には掻き目が見られ、内外面くすんだ茶色である。6 の外面には回転削り、内面にはナデ痕が残る。灰色である。7 は焼きがあまく器面は荒れ、淡灰褐色である。8 は玄室第 4 面出土の須恵器の壷で口縁部は一部のみ残存する。口縁部内面と外面肩部に自然釉がかかる。9 から 16 は墓道とその周辺からの出土である。9 から 13 は須恵器の蓋である。9 は前庭部の破片と接合した。焼きがあまく淡茶色で、天井部の 2/3 弱が残存する。14 は周溝、15 は墓道出土で接合はしないが同一個体と考えられる。須恵器の長頸壷で器壁が厚い。最大径部に沈線を施し、その間にヘラ描きで波状文を描く。肩部から胴部は掻き目を密に施し、底部近くはヘラ削りである。16 は製鉄炉の炉壁で内面はガラス化し暗灰色である。

18 から 75 は周溝出土の須恵器などで、須恵器以外や一部石室埋土出土のものはその旨記載した。18・19、20・21 はそれぞれ身蓋のセットで正置した状態で床面に近い位置から出土した。初葬時に近い遺物と考えられる。19、21 は完形だが、18、20 は一部を欠いている。22 から 27 は坏の蓋である。22 は小片からの復元で口径は不確実。胎土に 3 mm大の砂粒が目立つ。23 は焼きがあまく淡橙色で、天井部は残るが口縁部は一部のみの残存である。24 は外面天井部の手持ちのヘラ削りが粗い。口縁部は一部のみ残る。25 は 1/4 強の破片で 1mm大の砂粒が目立つ。26 は外面に浅いヘラ記号を描く。27 は返りを欠く。28 から 34 は坏身である。28 は完形で口径 11.7cmである。29 は帯状に底部が残り口縁部は一部のみ残存する。内外面とも茶褐色である。30 は 1/4 を欠きヘラ削りが粗い。31、32 は 1/2 強が接合した。32 は石室埋土と周溝出土破片が接合した。33 は小破片に割れていたが、接合で口縁部 1/4 を欠く以外を復元した。34 は 1/6 弱からの復元で径は不確実。内面は茶色である。35、36 は土師器の坏、皿である。35 の器面は荒れ、帯状に残存する。ヘラ切り底で口径 12.3cmである。36 は器面の荒れが著しく橙色である。37 は須恵器で胎土に砂粒が見られない。38、39 は高坏の蓋

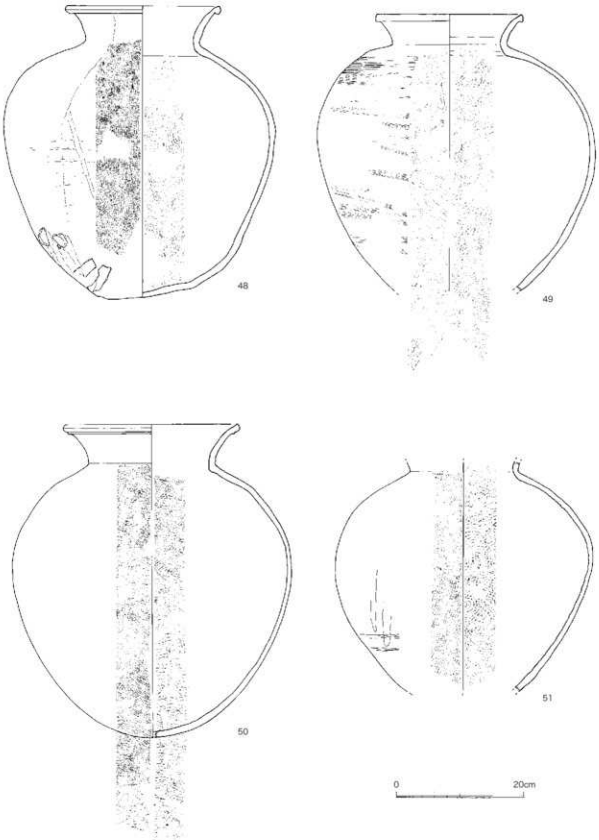


図Ⅵ－16　10号墳石室・墓道出土遺物(1/3)

で38は2/3、39は1/4が残る。39は石室埋土出土である。40から43は高坏である。40は小片に割れており、1片は石室埋土出土である。歪みが大きい。脚部に3方向から穿孔する。41は小片からの復元で穿孔の数はわからない。接合しない3片がある。45は壷で頸部は一部のみ残る。焼きがあまく器面は淡灰色で頸部から肩部に掻き目が見られる。胴最大径部に焼成後と考えられる穿孔が1つある。石室埋土出土である。46、47は土師器の小壷で46は完形品で47は1/3と小片2つが残る。器面は荒れ橙色である。48から55は甕である。48は外面平行叩きと胴下部には疎らに掻目を施す。内面には同心円状の当て具痕が残り、下半には縦方向のヘラナデを施す。上部には自然釉がかかり下部に垂れている。底付近には須恵器片が付着している。肩部より上は一周し、胴下部は2/3が残存する。器高47㎝、最大径43.8㎝である。49は外面平行叩きをナデで消し、掻目を施す。掻目は下部で疎らである。内面は弧状・同心円状の当て具痕が残り、底は平行当て具痕である。口縁部の1/2、胴部の1/3を欠く。器高44.3㎝、最大径45㎝である。50の外面は深い平行叩きで、内面



図Ⅵ－17　10号墳出土土器1(1/3)



図Ⅵ－18　10号墳出土土器2(1/6)

の当て具痕は上部は弧状、下部は幅広の平行痕が残る。内外とも底部付近はナデである。全体に 1/2 から 1/3 が残り、反転復元した。実際は歪みがある。51 は外面平行叩きで疎らに掻き目を施す。内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。胴部の 2/3 から 3/4 が残存する。最大径は 41.5cm である。52 は口縁部の 1/2 弱が残る。外面は疑似格子目叩きの後掻き目を施し、内面には同心円と弧状の２種の当て具痕が見られる。53 は外面が疑似格子目叩きの後に横ナデ、内面は平行叩きである。53 は外面平行叩きの後に掻き目を施し、内面は同心円当て具痕をナデ消している。器壁が薄く、外面暗灰色、内面灰色を呈す。底は器壁が剥がれ、砂混じり土が付着する。反転復元したが、1/4 弱の残存で頓きは不確実である。55 は外面平行叩きのあと掻き目、内面には同心円当て具痕が明瞭に残るが上部は横ナデで消す。器壁が厚い。胴部は 1/3 が残存する。56、57 は甕の口縁部。58 は生焼けの須恵器と思われる。器面の荒れが著しい。

59、60 は壷の口縁部で小片からの復元で径は不確実である。61 は壷で肩部に浅い波状文を施す。62 は壷または瓶の屈曲部で 1/3 が残存する。63 は脚部で透かしが見られる。64 は提瓶で頸部にヘラ描きの平行線を施す。頸部で 2/3 が残り、他に同一個体片がある。69、70 は平瓶である。69 は底部を削りの後ナデ、体部は不規則な浅い掻き目とナデ調整で、頸部から肩部は一部欠けるため復元的に作図した。70 は肩部と体部が接合せず、体部と底の接合も不確実である。外面には肩部から底まで平行する浅い掻き目を施している。

65 から 68、71 から 75 は土師器である。65 は甕の口縁部片で灰白色である。66・67 は鉢、68 は壷で器面は荒れて橙色である。71 から 75 は高坏で脚部は端部を欠く。71 は胎土が細かく淡黄褐色で、外面に化粧土をかけて赤茶色に仕上げる。72 から 75 は器面の荒れが著しく茶褐色である。74 は 1/4 からの復元である。76 は染め付けの皿で 1/4 からの復元である。口縁部は波状で端部は褐色である。大半の土器を図化したが、この他に須恵器甕の生焼け胴部、鹿の小片などがある。

石器・石製品 (図Ⅵ－ 20)

77、78 は滑石製の紡錘車で 77 は墓道、78 は周溝からの出土である。79 は玄武岩製の石斧の頭部と考えられる。石室覆土からの出土である。他に安山岩の剥片が 1 点出土した。

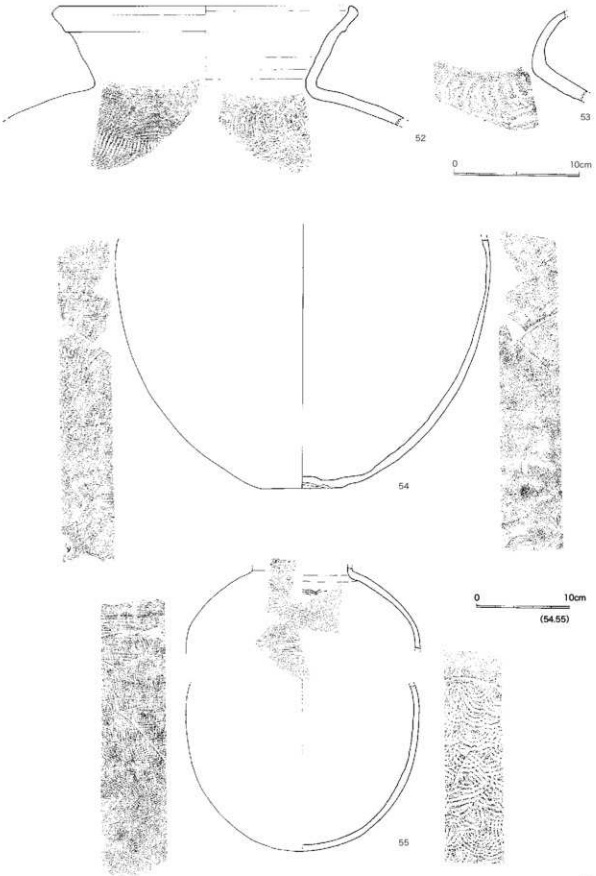
鉄製品 (図Ⅵ－ 21、22)

図Ⅵ－ 12、13 と文中で出土位置を示した以外は玄室第 4 面の覆土中からの出土である。

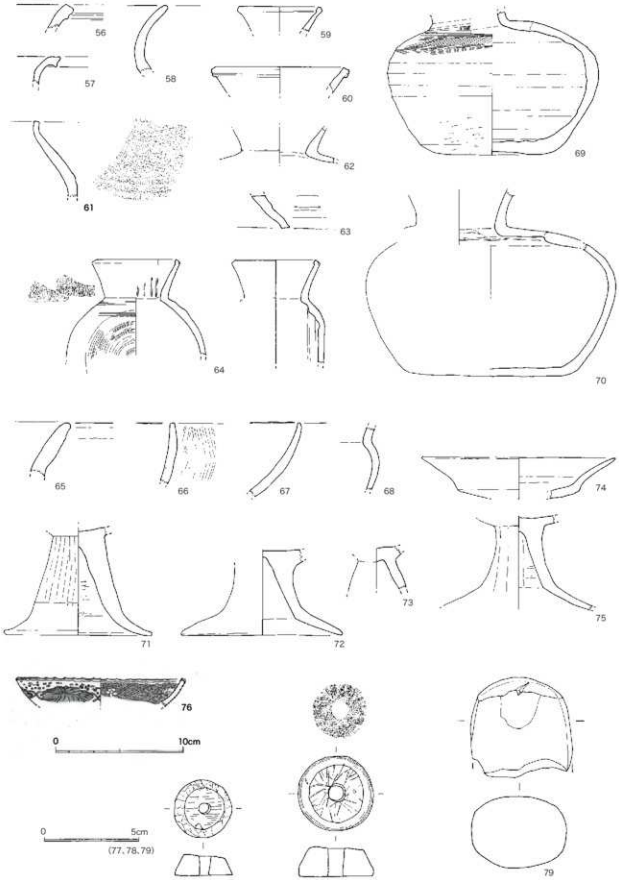
鉄鏃（図Ⅵ -21：80 ～ 97）

80 ～ 95 は長頸鏃で、80 ～ 83 が完形、84 ～ 86 は残存状況が良好な資料である。80 ～ 86 のいずれも鏃身が三角形で刃部断面は片丸造であるが、85 のみ若干片面が内湾している。鏃身関部はナデ関である。頸部は断面が正方形に近い方形を呈し、茎部との境に方形の棘関をもつ。茎部には、木質と樹皮による巻きが良好な状態で残存している。茎部の断面形は、木質の残存していない部分から上部ではほぼ正方形で下端に近づくと円形を呈することがわかった。完形品の全長は 16.6cm ～ 17.7cm で若干個体差が見られるものの、破片資料についても復元長がおおよそ完形品の数値におさまるものと考えられる。茎部の 87 ～ 95 は長頸鏃の破片資料である。87 は鏃身部のみ残存している三角形鏃で、88・90 は断面方形の頸部片である。91 は頸部と茎部にかけての部分が残存しており、頸部断面方形で方形の棘関を有する。91 ～ 95 は茎部片である。91・92 は頸部に近い部分で、93 ～ 95 は端部の資料である。

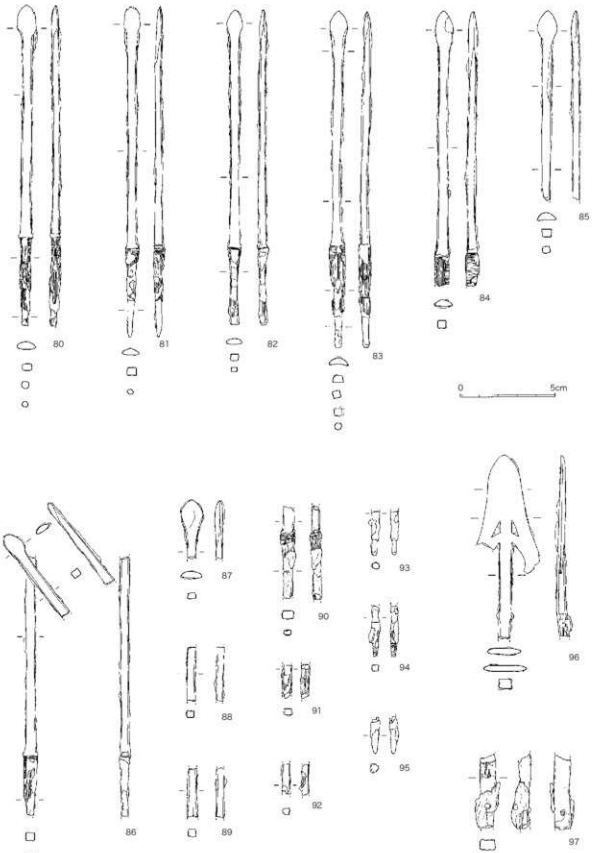
96 は三角形透孔を持つ腸抉付きの長三角形平根系鏃である。刃部断面は平造である。茎部で欠損しており、残存長は 9.65cm で鏃身部は 6.2cm をはかる。頸部・茎部形態は断面横長の長方形で幅・厚みともに変わらないが、若干丸みを帯びた棘関によって区分されている。97 は、96 同様に平根系



図Ⅵ－19　10号墳出土土器3(1/3、1/4)



図Ⅵ－20　10号墳出土土器・石器(1/3、1/2)



図Ⅵ－21　10号墳出土鉄鏃(1/2)

鏃の茎部片であると考えられる。骨片とみられる有機質が茎部を覆うように付着している。

刀子（図Ⅵ－22：99）

刀子は1点出土している。99は残存長8.5cmの刀子片である。鋒は残存しているが、欠損部の刃部の造りが小さい点から、刃部の復元を行っても8cm程度にしかならないと考える。茎には柄金具が残存している。全体的に木質が残存しており、柄・鞘共に木製であったと考えられる。

鉄刀（図Ⅵ－22：98、101～103）

鉄刀は3点出土している。98は鋒から刃部にかけて残存しており13.5cmをはかる。鋒はフクラ状で先細を呈する。101は鋒の先端部と茎尻を欠損している資料である。残存長41.4cmを測り、刃部は35.5cmである。鋒はフクラ状で、茎部の形態は不均等な両関をもつ。鉄製と思われる責金具が残存しており、また、刀身から外れた状態であるが同一個体と考えられる鍔102が欠損した状態で出土している。倒卵形の無窓鉄鍔で最大長は6.0cm、厚みは4.5mm程度をはかる。茎部に鉄鏃片が一部銹着している。

103は大型の大刀である。刀身の約3分の2あたりで折れ、刃断面に錆がまわったため接合は出来ないが鋒から茎尻まで残存しており、その復元長は86.2cmである。刀身は64.8cmでカマス状鋒、幅が3cm程度の直刀である。刀身の断面は、背が10mmと厚い。柄元は長さ4.2cmである。最大幅は2.1cmになる。柄の一部と目釘、鵐目金具が残存している。柄は木材が使用されており、木目が刀身と併行している。その上に有機質の糸が巻かれている。目釘は茎のほぼ中央に直径3.2mm、長さ2.3cmの円形のものが使用されており、鵐目金具は端部を追った筒状の金具で、孔径0.5cm、外径1.4cm、長さ2.6cmである。

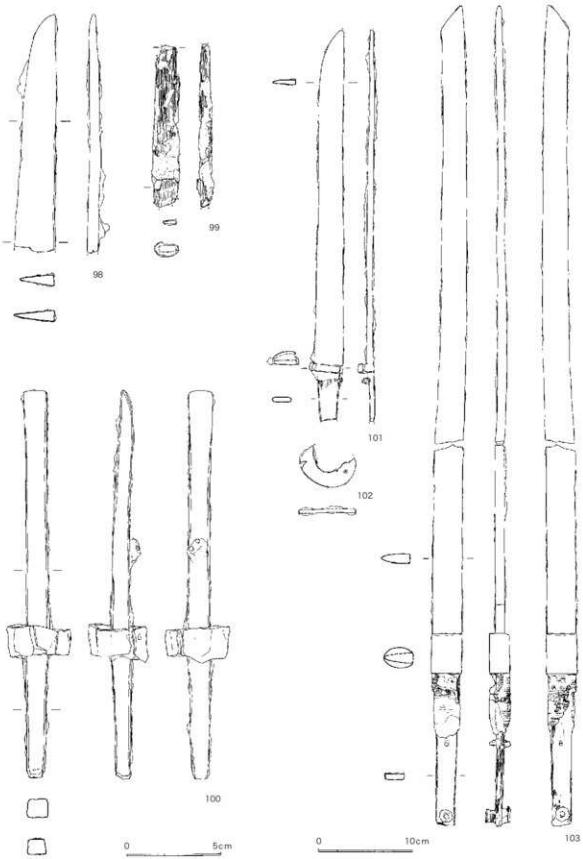
鑿（図Ⅵ－22：100）

刃部が平らな鑿である。全長20.4cmで刃部は片刃造、幅は1.2cmになる。刃部先端から13.3cmのところに最大厚1.7cmの鉄製の柄元が残存していることから、柄元の下部から有機質の柄が付けられていたことがわかる。柄が着装された部分には木目を写した錆が見られ、木柄の着柄が推定される。柄元から鑿は細くなっているため、鑿本体の頭部をたたくのではなく、柄で覆われており、手で力を入れて削るなどの作業に使用されたと考える。

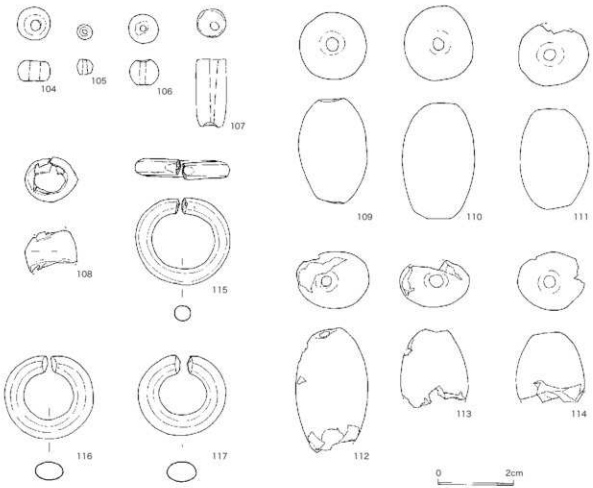
玉類（図Ⅵ－23：104～114）

図Ⅵ-12で出土位置を示した。図にないもののうち管玉107が石室覆土上部で出土した以外は玄室第4面の覆土中からの出土である。

玉類はガラス小玉、ガラス丸玉、瑪瑙製丸玉、碧玉製管玉、琥珀製棗玉、銀製球形空玉が出土している。104は緑色のガラス丸玉である。最大径0.86cm、長さ0.55cm、孔径0.3cmで、孔の部分は面取が施されており、面取り部分の径は0.55cmである。105はガラス小玉である。濃い青色を呈し、径0.4cm、長さ0.4cm、孔径0.1cmをはかる。蛍光X線による定性分析をおこなったところ、104は鉛ガラス、105はカリガラスであることが明らかになった。製作技法は気泡の状況から104は巻き付け技法、105は引き伸ばし技法を採用していると考えられる。106は瑪瑙製丸玉である。淡い橙色を主とし、一部に赤橙色が混じる。寸法は、径0.8cm、長さ0.69cm、孔径0.15cmで、面取りなどは行われておらず、扁球形である。107は碧玉製の管玉である。片面穿孔が施されている。色調は暗緑色に一部白色が混じるマーブル模様で、一部欠損が認められる。径0.8cm、残存長1.8cm、孔部径は最大0.25cm、最小は0.19cmである。108は銀製球形空玉である。黒灰色を呈し、孔が穿たれたと考えられる頂部が破損している。径1.4cm、残存高1.4cmである。109から114は琥珀製棗玉で、暗褐色を呈している。109、110は完形であるが111、112は一部欠損、113、114は半壊



図Ⅵ－22　10号墳出土太刀・鑿(1/2、1/4)



図Ⅵ－23　10 号墳出土玉類 (1/1)

している。109 は最大径 1.8cm、長さ 2.8cm、孔径 0.3cm、110 は最大径 1.9cm、長さ 3.38cm、孔径 0.3mm である。

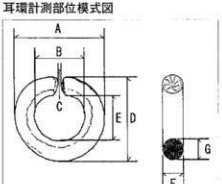
耳環（図Ⅵ－23：115 ～ 117）

耳環は 3 点出土している。115 は銅芯金板張の資料で、116・117 は銅芯銀板張金鍍金の耳環である。116・117 は断面横楕円形の厚めの銅芯が使用された資料で、115 は断面円形で 116・117 に比較すると細い耳環である。116・117 は寸法や形状が類似しており、対であると考えられる。

耳環計測表

番号	寸法 (cm)							重さ (g)
	A	B	C	D	E	F	G	
115	2.5	1.65	0.1	2.3	1.55	0.4	0.4	6.88
116	2.3	1.4	0.1	2.18	1.25	0.7	0.5	11.75
117	2.5	1.25	0.2	2.15	1.1	0.8	0.55	12.63

耳環計測部位模式図



4．11 号墳

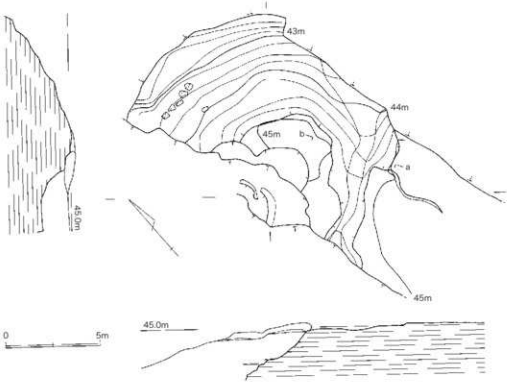
（1）立地と現況（図Ⅵ－24）

11 号墳は戸山との間の鞍部に近い標高 45 mに位置する。現況では墳丘・周溝等は確認できず、試掘で周溝の一部を検出し調査に至った。北側の鞍部部分は工事で削平を受け、すでに切り通しであった。西側は耕地造成に伴い大きく削られ崖面となっている。東側も小規模ながら削平を受けて崖面を成し、南側は尾根筋の緩斜面である。尾根の緩傾斜部が傾斜を強める変換点に古墳を築いている。表土直下で地山となり、尾根を横断する周溝の一部を確認した。石室は西側にあったと考えられるが削平されている。

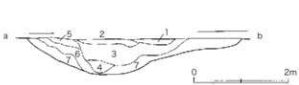
（2）墳丘（図Ⅵ－24）

表土を除去した時点で地山に達する部分がほとんどで、北側にわずかに墳丘盛り土と考えられる層を確認した。北側斜面の標高 43.5 m付近の斜面では、40㎝大の角礫が 5 個ほど隙間を空けて並んでいた。土壌化した土からの出土で地山からは浮いている。これに近接して須恵器の甕片がまとまって出土している。

周溝は丘陵を横断し、頂部では幅 160㎝、深さ 15㎝と浅い。東側斜面に向かって広がり、途絶える。

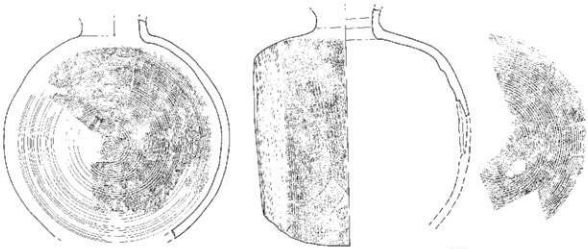


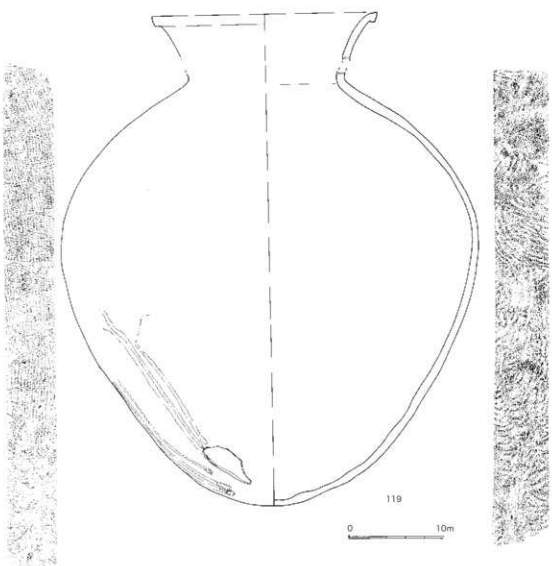
図Ⅵ－24　11 号墳全体図 (1/200)



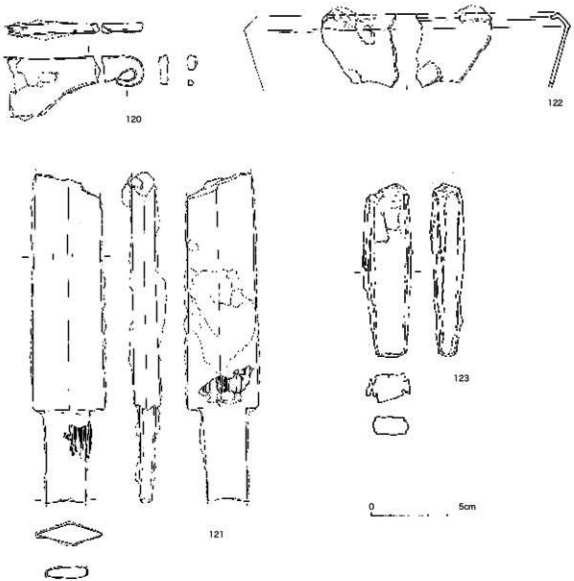
1 淡灰黄色砂質
2 暗褐色粘質土
3 2に7が混ざる 砂質が強い 土器を含む
4 3・7がブロック状に混ざる
5 灰褐色砂質土しまりない
6 灰黄褐色砂質土
7 6より淡い

図Ⅵ－25　11 号墳周溝土層 (1/80)





図Ⅵ－26　11号墳出土土器(1/4)



図Ⅵ－ 27　11 号墳出土鉄製品 (1/2)

図Ⅵ－ 25 の土層観察部分では幅 450㎝、深さ 70㎝ほどで断面レンズ状を成す。３層の暗褐色砂質土を中心に遺物が出土した。

（３）埋葬施設

11 号墳の主体部は周溝の位置などから丘陵西側の削平された箇所にあったと考えられる。削平された斜面には頂部より約２ｍ下に小さな段があり、石室の堀方を思わせる。この段には腰石風の礫があったが、表土の２次堆積の上にのり浮いている。また段付近では鉄剣が出土しており、石室があったことは確かだと考える。

（４）出土遺物

土器 (図Ⅵ－ 26)

118、119 は北側斜面からまとまって出土した。118 は須恵器の横瓶で全体の 1/3 ほどが残る。外面は頸部以外の全面に掻き目を施し、体部にわずかに叩きの痕跡が見られる。内面はナデで指頭圧痕が多い。灰褐色を呈し、胎土は砂粒が少なくきめ細かい。119 は須恵器の甕で胴部、肩部は接合せず、一部のみ残存する。口縁部は小片からの復元である。口縁部は内外面とも横ナデ、肩部以下は外面を

平行叩きで粗い掻き目を施し、内面には弧状の当て具痕が残る。掻目は底部付近にはない。焼きはややあまく灰褐色を呈す。器面は口縁部から自然釉がかかり、肩部では深い緑色に発色する。胴部下部には垂れる。胴部下部に須恵器片が付着している。

南側の周溝からは土師器の破片がまとまって出土したが、摩耗が著しく接合できていない。玄武岩の小片も1点出土している。北側斜面からは図版Ⅵ－55（124）のような焼粘土塊が出土している。

鉄製品（図Ⅵ－27）

120は素環頭刀子片であると考えられる。刃部は欠損しており、残存長は6.2cmである。関は片関の撫関で、茎尻を先細にして片方に曲げて素環としている。121は鉄剣もしくは鉄槍の剣身で、茎部と剣身の鋒が残存している。残存長は17.4cmで、剣身の残存長は12.6cm、剣身最大幅3.8cm、鎬の厚みは11mmをはかる。茎の幅は2.3cm、最大厚は6mmである。刃関は両関の直角関で、茎部は茎尻まで直にいたる形状が想定できる。茎・剣身に木質が残存している。122は鋳造製と考えられる容器片である。器種は不明であるが、口縁部から胴部にかけて残存していたため、胴部までの復元が可能であった。残存高は3.8cmで、口縁端部径は15.8cm、胴部最大径は17.2cmをはかる。胴部は口縁部にむかって直線的に外方に向かうが、口縁部は複合口縁のように内側に折れ曲がり、さらに端部がもう一度内側に折れる形状を呈している。器壁の厚みは2mmで薄手である。123は鏨で全長が9cm、最大幅2.5cm、最大厚1.8cm、刃部幅1.55cm、刃部厚0.9cmをはかる柱状の資料である。メタルが残存しており、層状剥離が顕著である。刃部は明確な刃が作られていない点から、石切鏨である可能性を指摘する。鉄製容器とともに後世の資料であることが考えられる。

5．溝（図Ⅵ－4、9）

9号墳の石室南側では、尾根を横断する溝1を検出した。東側斜面では直線的に走り、幅1m、深さ60cmを測り断面Ｖ字形の底幅は狭い。西側斜面では軽い孤を描き、幅約80cm、深さ30cm程で断面は浅いＵ字形である。尾根平坦部は石室奥壁付近で屈曲し、西側は大きく孤を描き墳丘を避けたかのようである。最大幅部分は160cmで底も広い。覆土はシルト質で小礫を含む。遺物は古墳に伴うと考えられる須恵器・土師器のほか、朝鮮時代の陶器4が出土している。土師器は摩耗が著しく明確ではないが坏と考えられる。時期は古墳が構築され、墳丘がある程度流出した後のものであろう。鞍部を経た尾根の延長には中世山城と考えられている戸山があり、山城に付随する施設の可能性もある。4の陶器がこれに関わる時期の可能性もある。

6．おわりに

（1）桑原古墳群Ａ群について

今回報告した桑原古墳群Ａ群9･10･11号墳は尾根上に位置し、いずれも横穴式石室を埋葬主体とした円墳と考えられる。横穴式石室が残存していた9、10号墳は、玄室幅1m以下、側壁長2m弱と幅狭で小型な点で類似する。

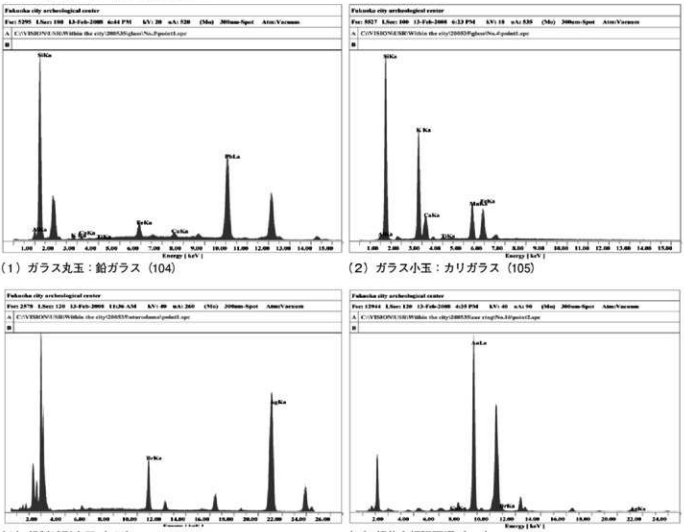
10号墳では4面または3面の床面を築いて追葬を行っている。遺物も周溝を中心として出土した土器に時期幅が認められる。その中では18～21の坏身のセットが古手で小田編年のⅢｂ期の範囲でとらえることができよう。これを初葬に近い遺物とすると、古墳築造時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。以降、5，6などの須恵器坏蓋が示すように、7世紀中頃から後半の時期まで追葬・祭祀が行われていたと考えられる。また、35の土師器坏は8世紀まで何らかの祭祀等が行なわれた可能性を示す。9号墳は遺物から細かな時期を判断し難いが、石室の形態から10号墳と近い時期と

考えられる。11 号墳は 118 の横瓶が 7 世紀代のもので、すくなくとも 10 号墳と同じ時期に営まれていたと考えられる。

桑原古墳群 A 群は、西に延びる尾根上に位置する 2 ～ 8 号墳が元岡桑原遺跡第 25 次調査 (第 861 集) で、1 号墳が第 21 次調査 (第 910 集) で調査されている (図Ⅵ－ 1)。報告によると 7 号墳が 5 世紀末に築造されるのが古墳群の始まりで、6 世紀前半には 5、8 号墳、と標高の高い位置から築造が行われる。続いてやや標高が下がる位置に 2、3、4 号墳が 6 世紀中頃までに築かれる。1 号墳は尾根の末端に位置し、遺物から類推できる時期は 7 世紀前半でやや時期を異にする。今回報告した 10 号墳は、以上の西側の尾根の一群より遅れて築造される。9、11 号墳も同様と考えられる。

(2) 山城関連遺構

38 次調査 1、2、3 区、45 次調査 9 号墳では尾根と直に交わる溝を確認した。そのなかでも 38 次 2 区溝 1 (図Ⅴ－ 6) と 45 次の溝 1 (図Ⅵ－ 4) は尾根を横断し、断面形態等からみて人為的なものと考えられる。いずれも明確な時期を決めがたいが、45 次溝 1 からは朝鮮時代と考えられる陶器片が出土し 15 世紀以降の時期が想定できる。また、38 次 2 区は水崎山北側斜面の傾斜が緩やかになった地点であり、水崎城と関わりがある可能性がある。両者とも尾根部の掘り込みは浅く、後世の削平を考慮しても堀切とするには小規模である。ここでは、水崎城、戸山城に関連した遺構である可能性に注意するに留めておきたい。



(1) ガラス丸玉：鉛ガラス (104)　(2) ガラス小玉：カリガラス (105)

(3) 銀製球形空玉 (108)　(4) 銅芯金板張耳環 (115)

図Ⅵ－ 28　10 号墳出土遺物蛍光 X 線分析結果

図版Ⅵ－１　元岡・桑原遺跡東半（北から）

図版Ⅵ－２　桑原古墳群Ａ群９･10号墳（北東から）

図版Ⅵ－３　９号墳全景（南西から）

図版Ⅵ－６　玄室右側壁

図版Ⅵ－４　９号墳石室全景（南東から）

図版Ⅵ－７　玄室左側壁

図版Ⅵ－５　９号墳全景（南西から）

図版Ⅵ－８　奥壁

図版Ⅵ－９　羨道部（玄室から）

図版Ⅵ－12　溝１（北東から）

図版Ⅵ－10　９号墳・溝１（南西から）

図版Ⅵ－13　10号墳（西から）

図版Ⅵ－11　９号墳・溝１（南西から）

図版Ⅵ－14　10号墳石室全景（東から）

図版Ⅵ－15　10号墳全景（西から）

図版Ⅵ－16　10号墳（北から）

図版Ⅵ－17　10号墳遺存状況（南から）

図版Ⅵ－18　天井石遺存状況（東から）

図版Ⅵ－19　玄室床第１面（南から）

図版Ⅵ－20　玄室床第２面（南から）

図版Ⅵ－21　玄室床第３面（南から）

図版Ⅵ－24　羨道・前庭部床第２面（南から）

図版Ⅵ－22　玄室床第４面（南から）

図版Ⅵ－25　奥壁（西から）

図版Ⅵ－23　羨道・前庭部床第１面（南から）

図版Ⅵ－26　玄室右側壁（北から）

図版Ⅵ－27　玄室左側壁（南から）

図版Ⅵ－30　玄門（玄室から）

図版Ⅵ－28　前庭部右側壁（南から）

図版Ⅵ－31　玄室床第３・４面（西から）

図版Ⅵ－29　前庭部左側壁（北から）

図版Ⅵ－32　玄室第４面（西から）

図版Ⅵ－33　石室堀方（北東から）

図版Ⅵ－36　玄室第４面遺物出土状況（北から）

図版Ⅵ－34　前庭部第１面須恵器出土状況（南西から）

図版Ⅵ－37　周溝遺物出土状況（西から）

図版Ⅵ－35　前庭部鉄器出土状況（北西から）

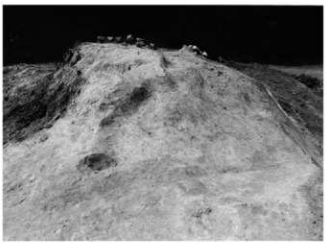
図版Ⅵ－38　周溝遺物出土状況（北東から）

図版Ⅵ－39　11号墳遠景（南東から）

図版Ⅵ－42　墳丘部礫出土状況（南東から）

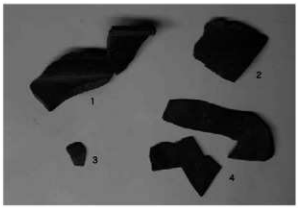
図版Ⅵ－40　11号墳全景（東から）

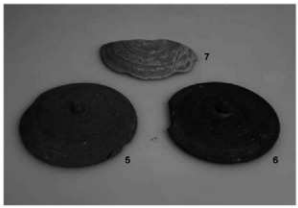
図版Ⅵ－43　石室推定部（北西から）

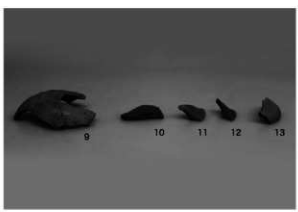


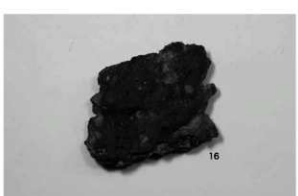
図版Ⅵ－41　11号墳全景（南から）

図版Ⅵ－44　周溝土層（東から）

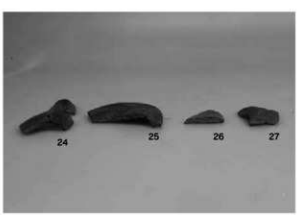




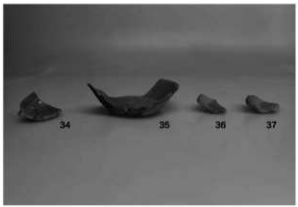


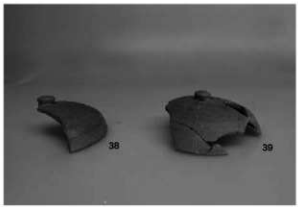


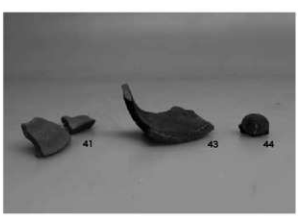
図版Ⅵ－45　９号墳出土遺物

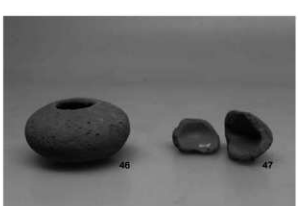


図版Ⅵ－46　10号墳出土土器1

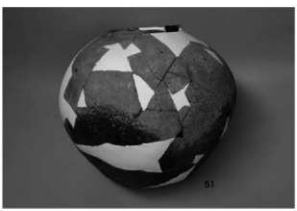


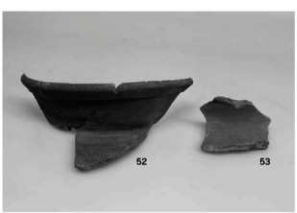


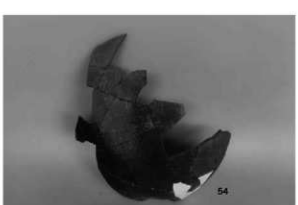




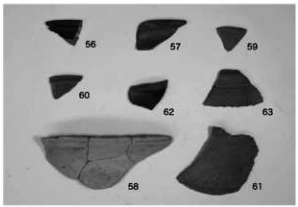
図版Ⅵ－47　10号墳出土土器2

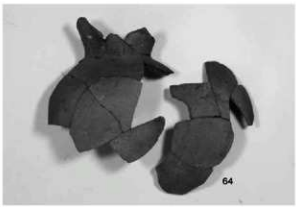


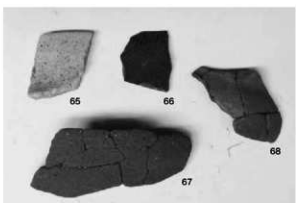


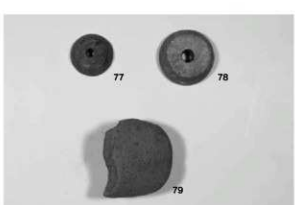


図版Ⅵ－48　10号墳出土土器3



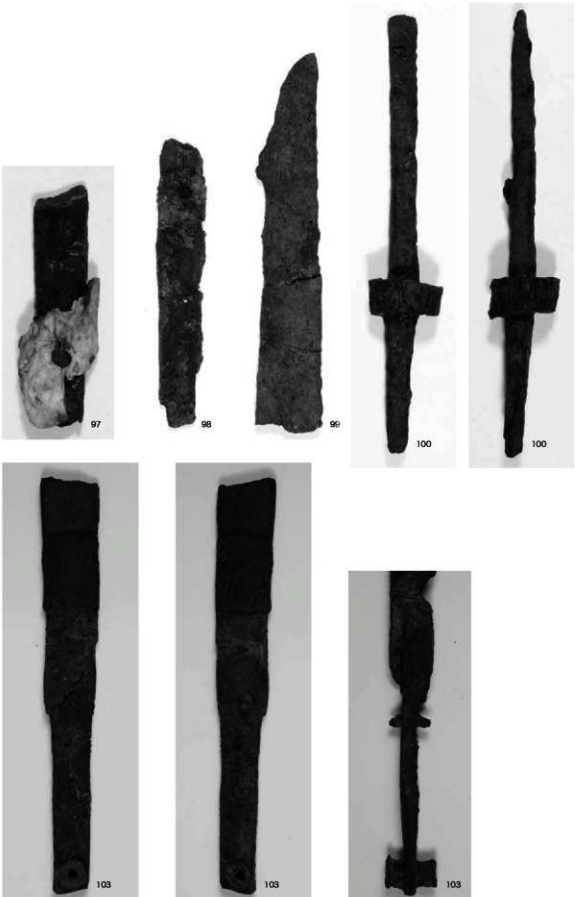






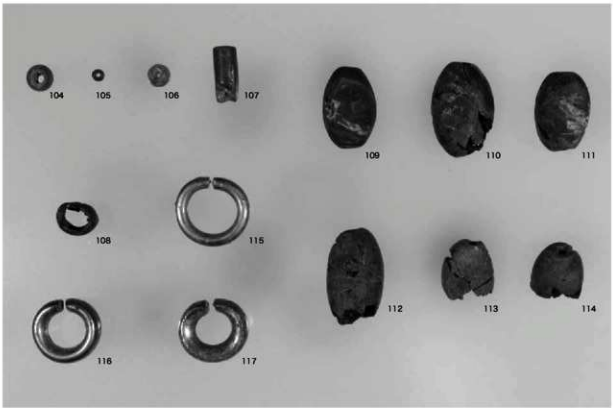
図版Ⅵ－49　10号墳出土土器4・石器

図版Ⅵ－50　10号墳出土鉄器1

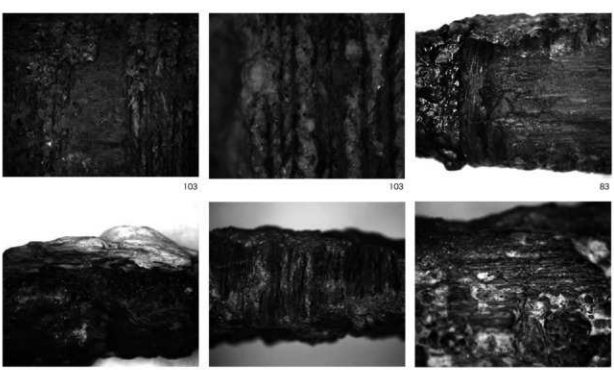


図版Ⅵ－51　10号墳出土鉄器2

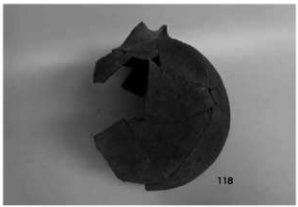
図版Ⅵ－52　10号墳出土鉄器3

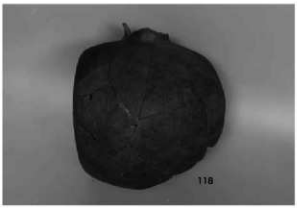


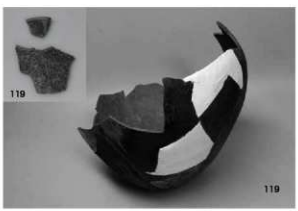
図版Ⅵ－53　10号墳出土玉類・耳環

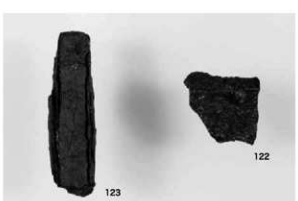


図版Ⅵ－54　10･11号墳出土鉄器顕微鏡写真









図版Ⅵ－55　11号墳出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もとおか・くわばらいせきぐん
書 名	元岡・桑原遺跡群
副 書 名	第20次調査の報告４・第36次調査の報告２・第38次調査・第45次調査の報告
巻 次	18
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第1105集
編 著 者 名	米倉秀紀・池田祐司・屋山洋
編 集 機 関	福岡市教育委員会
発 行 機 関	福岡市教育委員会
発 行 年 月 日	2011年３月18日
郵 便 番 号	810-8621
住 所	福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
電 話 番 号	092-711-4667

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	（世界測地系）			(㎡)	
もとおか くわばら いせき	ふくおかけんふくおかし にしくくわばらあざ おおくぼ・かなくそ	40132	2604	33° 35′ 57″	130° 13′ 48″	20040308 ～ 20050117	1,676	学校用地造成
元岡桑原遺跡 38次	福岡県福岡市 西区桑原字大久保・金屋							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元岡桑原遺跡 38次	山城	古墳		須恵器片	15世紀以降に文献に現れる水崎城は、標高95mの水崎山と考えられる。北側に延びる尾根上を中心に山城関連の遺構の確認調査を行った。検出した遺構では、水崎山直下の尾根を横断する溝が城に関係する可能性がある。他に焼土坑２基を検出したが時期は不明である。
		近世		陶器、磁器、銅銭（寛永通宝）	
		近代		陶器	
		不明	溝 3 土坑 3		

※第20次調査・第36次調査については既報告書を参照

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もとおか・くわばらいせきぐん
書 名	元岡・桑原遺跡群
副 書 名	第20次調査の報告４・第36次調査の報告２・第38次調査・第45次調査の報告
巻 次	18
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第1105集
編 著 者 名	米倉秀紀・池田祐司・屋山洋
編 集 機 関	福岡市教育委員会
発 行 機 関	福岡市教育委員会
発 行 年 月 日	2011年３月18日
郵 便 番 号	810-8621
住 所	福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
電 話 番 号	092-711-4667

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
くわばら こふんぐん	ふくおかけんふくおかし にしくくわばらいしがはら	40132	2604	33° 35′ 58″	130° 13′ 32″	20050720 ～ 20051122	1128.6	学校用地造成
桑原古墳群A群(元岡桑原遺跡第45次)	福岡県福岡市西区桑原字石ヶ原							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桑原古墳群A群	古墳	縄文		安山岩剥片	標高72ｍの頂部から北に派生する尾根上で３基の古墳を調査した。９号墳は腰石が残る。10号墳は堀方内の石室、周溝が残る。玄室床面は４面を確認し、鉄器、玉類、耳環などが出土した。11号墳は横穴式石室と考えられるが、石室は堀方を含め破壊され、周溝状の溝を確認した。10号墳の初葬は６末７初と考えられ、７世紀中頃まで営まれる。他の２基は７世紀に営まれいたことはわかる。
		弥生		玄武岩製石斧	
		古墳	古墳　3	須恵器、土師器、紡錘車 鉄器(鏃、刀子、鑿、刀) 耳環、ガラス玉、瑪瑙玉、琥珀玉、空玉	
		中世	溝　1	朝鮮時代陶器	
		近世		伊万里染付	

元岡・桑原遺跡群18

―第20次調査の報告４・第36次調査の報告２・
第38次調査・第45次調査の報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
電話　092-711-4667

印刷　九州チューエツ株式会社
電話　092-411-8367